
テルシオ = ヴォン = スタードの標的

J . I . A

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

テルシオⅡヴォンⅡスタードの標的

【Nコード】

N9843Y

【作者名】

J・I・A

【あらすじ】

魔法文明の発達した異世界。ジペンゼ州の賞金稼ぎテルシオⅡヴォンⅡスタードは、同じ賞金稼ぎで憲兵団の大佐に転身した裏切り者の男の暗殺依頼を受ける。

——ギルドにやってくる非公開の依頼は魔法文字の最後の文字「ヘギア」でランタ

テルシオ「デル」セトは紀元前三世紀、ドラゴンと契約して戦乱の中部地方を治め、イーサファルト王国を建国した偉大な英雄だった。——大体そんな内容の昔話を両親から聞かされた事があったが、ずいぶん小さい頃の話なのでほとんど覚えていない。

親父は膝の上に俺を乗せて、よく中部の昔話をしてくれた。俺の一族は中部地方の出身で、けっこう名のある騎士の家系だったそうだ。その五代目の領主だが一人の女をかけた決闘なんてしようもないもので命を落とし、主を失った親父の一族は凋落して東部に移住してきたのだという。騎士の子孫である父親はいまだにその出来事をひきずっていたらしく、俺に一族再建の夢を託していた。親父もそのまた親父に同じ夢を託されていたのだ。俺の名前「テルシオ」は、そんな中部地方の英雄からつけられた。

遠い国の騎士道を徹底的に叩き込み、目が過敏症の呪いにかかった時は大陸中の医者という医者を探した。手塩にかけて育てられてきたが、夢は結局果たせぬまま、無惨な形で断たれてしまうことになった。ある日、首に賞金のかかった悪党どもが屋敷に押し寄せてきて、見掛け倒しの俺の屋敷からわずかばかりの財産と命を奪って逃げたのだ。

俺は一人東部の大都会に取り残され、その後かなりゆがんだ道を歩いてきた。奇麗事ばかりが通用する世界じゃないってのはその時すでに学習していた。それでも俺の中に植えつけられた騎士道の精神はいつも曲がらなかった。

常に公平であれ、常に感情のバランスを保て。いつも父親の教えを忠実に守って、常に騎士らしくあることを心がけていたつもりだ。しかし、十世紀にもなると、さすがに騎士のスタイルもずいぶん様変わりしたものだった。

鈍色に輝く銀の剣を腰に提げていたのは遠い昔、魔石工学の最盛

期である昨今では、つや消しクリームを縫って反射光を抑えた魔法小銃が主な武器だった。餌代のかかる馬の代わりに《飛空艇》を乗り回して宙空を飛びまわり、戦いの場は砂埃の舞い上がる荒野から漆黒の塔が乱立する夜の大都会へと移る。好んで飲むのはワインから夜襲を恐れてその不味さで目の覚める缶コーヒーへ、そして一対一の純粋な決闘よりも、向かいの塔の屋上からの狙撃を好んだ。すなわち暗殺だった。

東部アーディナル共和国の大工業地帯ミッドスフィアのと真ん中で、俺は魔法使いの塔の屋上にコーヒーの空き缶を置いた。缶にプリントされた光の精霊ピサが静かにほほえんでいて、その隣には魔法使いの塔にありがちなフーピエの像があった。

フーピエは鳥面猿身の水の魔物だ。コウモリの翼で夜空を音もなく飛び、長い手足を絡めるように屋根を伝い歩き、猛禽の目と嘴を光らせて下界の人々の残りの命をじつと見定めるといふ。

一体何の目的があるのかは分からない。寿命を縮めるでも、魂を食らおうとしているでも、地獄に連れて行くでもない、ただ、死に行く者とそうでない者を、じつと見定めているという。そこに深いロマンを感じる。こうして塔の下に向かって銃を構え、標的を待ちかねているとき、俺の隣には常にフーピエがいた。

頭に巻いた黒バンダナは蒸し殺されそうな夜でも外せなかった。俺の髪の毛の色は暗闇でひどく目立つ。愛用の革ジャンもひどく蒸れるが、これはげん担ぎのためだ。俺の視界は高性能の暗視スコープによって狭められ、オペラ会館の前に停車した一台の高級車の姿を捉えていた。

無駄に長い車から次々と降りてくる女たちは、スパンコールドレスに身を包み、どれも俺にとっては向こうの世界のまばゆい笑顔を浮かべていた。俺の耳には届かない挨拶を交わし、俺には見えない聴衆に手を振っていた。銃声が轟いたときも逃げるのに必死で、きつとあの笑顔が張り付いたままに違いない。人間、本当に危機が迫った時はどんな表情をしたらいいのか分からなくなるものだ。

一台、二台、三台。劇場の前には黒塗りの高級車が代わる代わる訪れ、数十名を運べそうな車からほんの数名の人を吐き出し、音こそちらには聞こえてこないが、その度に周囲では大量のフラッシュや惜しめない拍手に莫大なエネルギーが浪費されていた。

俺は引き金に指をかけ、かけていた指をゆっくりと外す、そしてたまに汗でずれてくるメガネを直す、たったそれだけの静かな運動を繰り返していた。それでも俺の内側で浪費されているエネルギーの方が遥かに莫大だった。

五台、六台、七台。違う。違う。また違う。焦りや苛立ち、不安がこみ上げてきても、それを鎮める強い精神力は狙撃手としての重要な素養だった。これには幼い頃の騎士道の勉強が大いに役立っている。いったん引き金から指を外して、メガネのすわりを直し、呼吸を再三整えると、また指をかけ、暗視スコープの向こうの世界をじつと見つめる。延々とその繰り返しだった。何十年も飽きずにここを見下ろしているフーピエの精神と、俺の意識がゆっくりと重なっていった。

胸ポケットに入れた無線機が、ざざざ、と時おり静かにざわめく。標的の動きを追っていた仲間から最後の報告が入って数分、いくらなんでも到着が遅すぎる。見逃したか。焦る気持ちをおさえ、それでもあと十分と、ゆっくりと呼吸をしていたとき、無線機の向こうから聞こえてきたこの世のものとは思えぬおぞましい声に、俺は一瞬间が詰まった。

「ぴいぎやあああああああ！ いやあああつ！」

俺は無線機を胸に抱きかかえたまま、塔の縁から後方に飛び退いてその場にはいつくばった。

声が外に漏れないよう革ジャンを使って押さえ込んだが、奇声は布の下からびりびり響いてくる。ほとんど無駄な抵抗だった。懷に手を突っ込み、つまみを捻って音量を下げた。耳の中で残響がわんわんと鳴っている。心臓がばくばく鳴っている以外、周囲に変わった物音はしなかった。

右よし、左よし、逃走経路確保、よし、ほどなく確認を終了して、無線を可能な限りすばやく耳にあてがい、短く吠えた。

「スタイ！ 静かにしろ、今事中だ！」

「ターチィ〜（ターチィテルシオの東部読み）。えつ、えつ、えつ。さっきの見たあ〜？」

そっちの様子が見えた訳ないだろ、俺は超能力者か。喉まで出掛かったツツコミが俺の狙撃手としての素養で引ッ込んだ。

最悪な事に、こいつは今俺のパートナーなのだ。スタイ、十七歳、金髪碧眼、スタイル良し、本名不詳、天真爛漫で気分屋で放浪癖がある自称賞金稼ぎの女だ。

こいつをパーティに入れるのには端から反対だった。ドジでグズでマヌケで他の奴の足を引ッ張る事にかけては天才だったからだ。お前はいいから大人しくアニメでも観て情報収集をしていると言いつけていたのだが。

「ドックはどうした！ 側にいないのか！」

「ウソゼッタイ見てるわよ、どの局もさっきからおんなじニュースばかりやってるんだからあ〜っ」

「だから、今は事中だっつってんだろ、テレビなんて見てねえよ！ おい、ドックはどうした、ドックに代わってくれ！」

「ねえ聞いてよあ〜、それがさあ〜、ひどいのあ〜、ついさっき番組が中断してさあ〜、いきなりニュースが流れてさあ〜」

どうやらこの女、こっちの話を聞くつもりは毛頭ないらしい。この状況で大した度胸である。俺は心臓に鉋を打ち込むような心地で正座し、この高速道路を横断するカメのようなはらはらする会話に父親に教わった不屈の騎士の精神を総動員してなんとか耐えていた。「イーサファルトの王女様があ〜、急にご病気になっちゃったんだつてえ〜」

「ああ、そりや大変だなあ」お隣の国の王女様の心配なんかどうだつていいだろ！

「そうなのよあ〜、それで、それでさあ〜。さっき見てたドラマが

臨時ニュースに切り替わっちゃってえ。まあ、解決編だったのよ超楽しみにしてたのよ。それでね、それでね、主人公が容疑者を全員集めて犯人のトリックを解説してたんだけどさ。それが超びっくりしちゃってえ。

『この密室をつくった犯人は（中略）——』

そしたら、そのタイミングで急に仲間から連絡が入ってきてえ。それ聞いてドックもどっかにいっちゃったあ。もう私どうしたらいいのかわかんない（泣）」

俺は今の会話から必要事項だけを抜き出した。どうやらドックの元に他の仲間から緊急連絡が入って、あいつはこの脳天気な女をひとり残してどこかに行ってしまった、という事らしい。

ドックの個人的な能力は買っているのだが、反面チームプレイになると極端に大雑把になる。こいつに任せてどうするんだ。どうやら今、俺が頼る事ができるのはこの女の状況説明能力だけのようなった。

「どんな連絡だったんだ。要点を三つ以内にまとめて喋ってくれ、三つ以内だ。お前と話している間にも、標的がくるかもしれないんだから早く！」

「ふえええ、イーサファルトの王女様がご病気になっちゃったんだってえ」

「それさっき聞いた、あと二つだ！」

「そうしたら、そうしたら、今夜王女様のために開かれる予定だったパーティがみんなキャンセルになっちゃってえ。ああそうだそう言えばビリー」ジエニム様も明後日のコンサートキャンセルしちゃったみたいなのよ。もう私超楽しみにしてたのにい」

再び話が振り出しに戻ってしまったようだった。俺はフーピエの隣から向こうの様子をちらちらのぞいていた。俺の希望としてはこのまま速やかに無線を切って、他の事など一切考えずに静かにフーピエの隣にたたずみたかったのだが。

「それでジエニムさまがお手紙書くらいから、私も王女様にお手

紙書こうかと思うんだけど。そうしたら賢者の塔のホルベール主席がお見舞いに行く事にしたんだってえ」

「切るぞ、用事がないんだったら切るぞ」

「待ってよ。そうしたらホルベール主席がお見舞いするから補佐官のカンパリオンは一緒について行く事になつてえ。オペラ鑑賞会キャンセルしちゃつてえ。えつ、えつ。そうしたら他の取り巻きの人もみんな次々とキャンセルしちゃつてえ。あんたの標的もキャンセルしちゃつたんだってえ」

俺は速やかに通信を切った。

つまみを硬くひねりすぎて指先が白くなっていた。沸騰した脳みそが目からこぼれないよう、そのまま固く眼を閉じ、空調のように一定量の息を静かに吐き出す。

――あの野郎め。

腹の熱が次第におさまつてゆくを感じ、何とか立ち直れそうな気がしてくると、不意に荒々しい足音が建物の奥から沸きあがってきた。

統率の取れた足音に、がちやがちやと鉄の鎧が擦れあう音が混じっている。この足音は憲兵だ。こりやまずい、数が多すぎる。フーピエの台座に隠れてやりすごすと、銃を持った憲兵達がドアを蹴破つて屋上に現れ、方々をライトで照らしはじめた。

「クリアーっ!」「クリアーっ!」

ああ、くそ。なんで俺がこんな初歩的なミスを。油断した、仲間のせいだ、なんていう言い訳はとうに捨てた。かつて伝説の賞金稼ぎが俺に残した名言がある。

――危機に陥ったときは余計な感情を一切捨てる。賞金稼ぎの仕事をやって行く上では、不慮の事故なんてのはいくらでも付きまとってくるものだ。今の事態をどうやって乗り切るか、それを考えることだけに全てを集中しろ。

集中、集中、集中……。時に英雄の言葉は、こうして何度も俺の命を救った。足音から判断しただけでも憲兵は十数人。出入り口に監視役も見張っているだろうから軽く見積もって十四、五人。逃走経路はふさがれていると考えていいだろう。

唯一の通信手段である無線機を力強く握り締め、怯みそうになる自分を叱責した。この仕事を請け負ったときからタダで済むとは思っていない。怯むんじゃない。頼むぞ、スタイ。本当に、本当に頼むぞ。俺は深く息をはいて、ゆっくりと無線機をつまみをひねった。かちつという音と共に無線に魔力が戻り、蚊の鳴くようなちいさな雑音が聞こえてくる。

幸運なことに、そのとき通信に出た相手はスタイじゃなかった。力強い、覇気のある女の声が胸ポケットを震わせた。

「テルシオ、ドックがそっちに向かったわ」

首をめぐらすと、フーピエの翼の向こう、不気味なキャンドルみたいに立ち並ぶ塔の間を、黒い小型の船が猛スピードで飛んできた。船体は三日月型に反り返っていて、四本の足に取り付けられた細長い浮力管が力強い金色の光を放っている。

二人乗りがやっという小さな席に座っているのは、全身を灰色の毛に覆われた狼頭の男だった。ネイビーブルーの獣の顔にゴーグルが嫌に似合っている。そいつは立ち往生している俺に向かって牙を向き、無言で塔の先を指差した。

ドック！ 来たか、やっぱ頼りになる男だ！

夜の闇と暑苦しい革ジャンが俺を護ってくれることと、連中がいきなり発砲しないことを信じて、俺はフーピエの影から一目散に飛び出した。

「止まれっ！」

俺を発見した憲兵達の制止する声が響いてきた。警告を完全に無視してそのまま一気に屋根を伝い降り、接近してくる飛空艇とタイミングを合わせて夜の街に飛び出した。

「うおおおっ！」

片手で運転席の屋根を掴むと、中に乗り込むのも待たずにドックは急発進した。両手を伸ばして振り落とされないよう屋根にしがみつき、窓から両足をつっ込んで強引に進入した。ネオンサインの看板が危うく俺を弾き飛ばすところだった。

あんな、急いでいるのは分かるが、乗り込む前にちょっと死ぬところだったぞ。口には出さないがそういう顔をしていると、ドックは犬くさい顔をして背後を指差した。

「追っ手がいる、後ろを見るな」

ルームミラーから確認すると、背後に黒い飛空艇が二、三台、岩石のような大男達を左右の船べりからはみ出さんばかりに搭載して俺達を追跡している。どうやら通報したのはあいつらみたいだ。

「バクバの連中か。撒けるか？」

ドックは鼻で笑った。

「あんなトロい連中に追いつかれていたら賞金稼ぎはやっていけねえよ」

ドックの飛空艇は轡を引っ張られた馬のようにぐくと急停止し、塔と塔の間の彼しか知らない未知の構造を俺に見せてくれた。船の幅はぎりぎり、視界は暗く、得体の知れない黄色のガスが充満していた。

ドックはそんな路地を見据えながら操縦桿を捻り、魔力機関にさらに強大な魔力を集中させていた。

「掴まってるよ、ダウンタウンを突っ切るぜ」

俺はその興奮気味の横顔に、はじめて薄ら寒い恐怖を覚えた。

*

東部のしがない賞金稼ぎだった俺がこの大仕事を引き受けたのは、先月の頭の事だった。俺は東部アーディナル共和国の東にあるジペンゼ州に暮らしていた。

大工業地帯ミッドスフィアの少し外れにある、機械の部品で出来た

ゴミ溜めのような州だった。ジペンゼは昔から奇抜な発明をする機械工が多い、というか、変人じみた発明家が多いことで有名で、俺の住む町も多分にその例に漏れなかった。

最初に空を飛ぶ船を発明したスーベイという変人も、この岬で何百機という試作機を飛ばし、そして失敗してきたという。

《冷たい時代》と呼ばれる帝国の占領時代の真っ只中に、「船が空を飛んだら、素敵じゃないかい？」というスローガンの下、ただひたすら夢を追い求めていたロマンチストだ。連合軍がその飛空艇の性能に目をつけ、帝国と戦う為にその船を使わせるよう要求したのに対し、最後まで首を横に振り続けたという変人である。

終戦から三十年、スーベイのあまりの変人ぶりに憧れた変人たちが何百人もここに集い、自作の船を空に飛ばしてはその変人ぶりを披露していた。ついにはジペンゼに世界中から変人たちが集結して世に名高い飛空艇レースまでおっぱじめる始末だった。そうして出来たのがこのデュルス岬、通称《スクラップ岬》だ。掘っても掘っても空飛ぶ船の残骸が出てくる、ジペンゼの名所である。

地中海に突如出現した機械の城みたいなデュルス岬には、飛空艇の他にも正体不明の魔石機器がごろごろと転がっていて、ネズミやタヌキや魔物、果てはそれに類する人の道を外れた者達がうようよと住居にするようになっていた。

レジャー施設にでもなつていそうな景勝地だったが、このゴミの撤去にかかる費用の試算がいくらになるか分かったものではなかったし、もしそんな計画が持ち上がるものなら俺たち先住民が黙ってはいなかっただろう。自然は大切にしなければならぬ。

もちろん、俺たち専門の賞金稼ぎなんてのも人の道をはずれた生き物に過ぎない。ただ、ちょっと希に収入がある事と、連中よりもかなり見晴らしのいい場所に住んでいるという点では大きく異なっていた。

その日も天気は良好だった。飛空艇のぶうーんというプロペラ音が、雲ひとつない青空に響いていた。俺は愛用のメガネをかけたま

ま、寝癖だらけの頭でばんやりとベッドに腰掛け、頭のスイッチが入るのをしばらく待っていた。

教習場の船の騒音ならもう慣れてしまったが、いつ聞いても慣れる事のない音というものもある。助けを求める人の声はその一つだ。「きやあーっ！ 助けてえー！ 助けてえーっ！」

「騒ぐんじゃねえ！ さつさと金を出せ！」

騒ぐなと言われても被害者はぎやあぎやあ騒ぎ続けていた。たぶん子供の声だろう。誰かがドラマでも観ているのかと思ったが、複数の男が同時に声を張り上げていて、何を訴えかけているのかさっぱり聞き取れない。この辺はドラマとは違って本物っぽかった。

賞金稼ぎの巣窟として名高いこの賞金稼ぎアパートに、好きこのんで近づくような悪党はめったにいない。せいぜい気の弱いホームレスが弱い者いじめをするぐらいが関の山だろう。

喧嘩なら仲間内で好きなだけすればいい。嬉しいニュースもない世の中、憂さ晴らしぐらいしたくなるのは自然だろう。けれども子供を標的にする奴は許せない。それが俺の自然だった。俺の髪は生まれつき銀色だったが、染めようとは思わない。やはり男は自然でないといけない。目立って仕方ない髪をぼりぼりかきながら、茶色いフレームのメガネを外してテーブルの脇に置いた。

壁に立てかけてあった白と黒二本の銃のうち、白銀のショットガンを手に取り、裏路地に面した窓からひょいと身を乗り出した。

雨どいに手をかけ、路地に狙いを定めて発砲した。ずどふっ、銃弾は窓辺に掲げてあったランプに見事に命中する。ゴミ箱の周りに分厚いガラスの破片が散らばり、群がっていたホームレスどもが身をすくめる。

「やべえ、ターチだ！」

連中は俺を見つけると、金属の義手や義足をきしゅきしゅ動かして逃げ出していった。俺は銃を肩に乘せてそれを見送った。

ふむ、こんな事ばかりやっているから俺も結構有名になったもんだ。残ったのは散乱したゴミと、ゴミ箱にはまって抜けなくなっ

ていた被害者が一人、口をぽかんと開けて俺をぼんやり見上げていた。上着ははだけていて、片足だけゴミ箱から突き出して動けないでいる。中性的な顔立ちだったが、たぶん男だ。ちょっとがっかりした。

*

俺が助けた少年は、飛空艇の免許を取得しにジペンゼにやってきたそうだ。教習所は大陸南岸にもいくつかあったが、この時期は台風がきたり時化があったりしてしょっちゅう休みになってしまつたため、待ちきれない連中が途中から地中海のジペンゼにやってきたりする。

名前は聞いた瞬間に忘れてしまつたが、どこにでもあるような平凡な名前だつたというのだけは覚えていた。迷子になつたというので教習所が見える道まで案内してやつて、その辺のパスタが旨い店で昼飯をおごつてもらつた。

「ありがとう、本当に。いや、本当に助かつたよ」

そいつは俺がフォークを振つてもういいと言つまであと百回くらい礼を言つた。

「あんたみたいな人つて居るところには居るもんだね、やつぱり世の中つて広いや。スクラップ岬を通つたら近道かと思つただけど、全然だつたね。本当にぜんぶ機械の部品だけで出来ているんだね、あの岬。人も建物も地面も、いや、あんたは別だと思つけどさ。あ、いや、深い意味はなくてさ。というか、本当はもつとお礼をしなきゃいけないと思うんだけど……」

俺は少年の話より目の前のシーフードパスタの方に意識を傾けていた。この辺の料理は昔からシーフードが主流だつた。けれども今は大抵の魚介類を輸入に頼っている。放置された魔石機器の影響で近海にミュータント化した魚が出没するようになって、漁師の数が激減してしまつたんだそうさ。

「頑張つて免許取りな」

あんまりしつこいとかえって機嫌を損ねる事もあるという事を、この少年は学ぶべきだろう。だが俺が教えなくともそのうち自然に学ぶだろう。色々説明するのも面倒だったので、それだけ言っておいた。少年は少し黙った代わりにほうと息をついて、パスタを食う俺を夢中になって見ていた。あいにく俺は少年が模範にするべきヒーローじゃない。パスタに夢中になっているただの賞金稼ぎだ。時間が迫ってきているのか、少年はすぐに席を立った。

「あんた、きつと有名な賞金稼ぎになるよ。リゲルⅡシーライトみたいに！」

俺はフォークをぴたりと止め、皿の上でよじれたパスタを食い入るように見つめた。

ドアベルがからんからんと鳴つて、少年は去った。

首筋をぬらりと撫でてゆく冷房のうなり声を聞きながら、俺はそのままぼんやりと固まっていた。

*

——賞金稼ぎは恨みを買う職業だ。

恨みを買う職業らしく、ミッドスフィアの某所にあるギルド本部の二階は、全ての窓に暗幕が張られている。

壁は防音、外から人の動きが分らないように細心の注意が払われ、月に二回盗聴器の搜索が行われる。俺はギルドマスターの書斎に訪問して、今年に入ってからもう何度目かの嘆願をした。

「頼む、すぐにまとまった金が必要なんだ。俺に《ギア・ランク》の仕事を請け負わせてくれ」

ギルドには、所属している賞金稼ぎの中でも一部の者にしか公開されない非公式の依頼が存在する。具体的な内容はほとんど知られていないが、そいつは決まって途方もなく高額で、そしてそれに釣

り合うだけ危険だ。

ギルドマスターは暗い書斎で革張りの椅子に腰掛け、葉巻の辛い煙をくゆらせていた。

今は引退しているが、俺がここに来た頃のギルドマスターは凄腕の賞金稼ぎだった。仲間からの信望も厚く、その手で一体何億という賞金を稼いだのかは分らない。だが、彼の顔もやはり影が落ちたように暗かった。右目の古傷がひどく印象的な老人だ。

「若造が首を突っ込む世界ではない。信用が大事な仕事だ」

「昔は十代でギア・ランクを請け負った奴がいるって聞いたぜ」俺はギルドマスターに食って掛かった。「俺じゃ不足なのかよ？」

「時代が違う、当時とはな」

「いったい何がちがうってんだ！」

俺は机を拳で叩いた。思った以上に大きな音が出たが、マスターはぴくりとも反応しなかった。俺の威勢のよさは今に始まったものじゃない。孤児になった頃からここに入り立っていて、面倒見の良いいマスターは俺の親父代わりみたいなもんだった。

志望動機が両親の仇を討ちたいだなんて可愛いもんだ、俺が何をしでかしてもギルドマスターは怒る様子もなく、ただ静かに闇を、えぐられた右目で俺の怒りなんかよりももっと深いところにある闇を見つめていた。

ああ、そうだ、この闇だ。

ガキの頃から賞金稼ぎをはじめて十年、俺にはどうしても越えられない壁があった。

俺には見えない地獄のようなものを、あの男も背負っていた。

「戦争だ。お前と私が共有できない、唯一のものだ」

*

ギルドの一階に戻っても、明るいのには窓から差し込む陽射しだけだった。

顔なじみが安酒をあおっているところを見ると、今日も銃を扱う予定はなさそうだった。俺は誰に挨拶されることもすることもなく、待合室の定位置に腰掛けた。

見渡すと街は平穏無事で、事件らしい事件がほとんど起こらなくなっただけだった。現にギルドにやってくる依頼件数は今月に入ってから急激に減少し、全盛期の半分にまで落ち込んでいた。

入り口付近にコルク材の依頼掲示板が設置されているのだが、今日も張り出されている依頼は、発電所に住み着いた迷惑なタコだの、下水道に紛れ込んだ巨大ネズミだのといったミュータントの討伐依頼ぐらいいった、ミュータントの討伐は苦勞させられる割りに実入りが悪いし、他のお使いみたいな依頼は新入りの為に残しておく決まりだった。

要するに、この掲示板の内容こそが今の東部の状況を表している。世の中が平和でいいことだ。それはそれで確かにいいことだが、今の俺はそうも言っていない。俺はそうも言っていない。

俺は新聞を開いて、隅々このほうの小さな記事を見つめたまま、口をぽかんと開けていた。建材に使われている魔石の粉塵が人体に悪影響を与える可能性についてのコラムの脇に、ついさっき免許を取りにいったはずの少年の姿が載っていた。

終戦後まもなく行方が分からなくなっていた伝説の勇者の剣。それを、この少年が西部の広大な荒原から拾ってきた、つい昨日連合軍の本部にまで届けたというのだ。

昔、自らも勇者の剣を探していたという年配の賞金稼ぎが噂していたのだが、発見者にはピア・ランク三つ分ぐらいの破格の報奨金が与えられる予定だったとか。まさか、その発見者がこんなひ弱な少年だったとは思えないじゃないか。俺もつい先日までは、そんな大事なものが紛失していたという事すら知らなかった。無理もない、俺が生まれるよりずっと前の古い事件だった。

参ったな、かっこつけてないで、助けたお礼くらい貰っていればよかった。けれども今更にかっこわるいし。どうしようもない事で煩

悶しながら、結局俺も他の連中の輪に入って、ちびりちびりと安酒をあおるのだった。

「おい、しけた顔してんなよ。世の中暗いニュースばかりじゃないぞ、今月はリゲルの奴が賞金稼ぎを辞めたらしいじゃないか」

賞金稼ぎというより気前のいい武器屋といった風貌の小太りの男が、ジョッキを振り回しながら大演説をおっぱじめた。

「今まで俺が狙っていた高ランクの仕事は根こそぎあいつに持っていかれてたからな、今度こそ誰にも邪魔されずに仕事ができるってもんだぜ、がははは！」

赤ら顔のオヤジの演説を聞きながら、俺は鼻で笑った。どちらかというとあいつに助けてもらった回数の方が多くせに。

「よしなって、誰にもあいつの代わりはできないさ」

窓辺のテーブルを一人占領し、小銃を愛しそうに磨いている男もそう言った。こいつがエア・ランク以上の賞金首をしとめたという話は聞いたことがないが、ただ女にもてたいという一途な思いだけで賞金稼ぎをやっている見上げた根性の男だった。この不景気でも身に着けた宝石類はきらきらと輝いている。絶対に手放さない。軽薄そうな見た目によらず、かなり性根の座った男だった。

「リゲル」シーライトはこの賞金稼ぎギルドに残る『伝説』になっただ、もう誰にもあいつを越える事はできないのさ」

そう言って、まつげの長い片目をつぶってみせると、周りの連中から同意の言葉と失笑が同時に漏れた。

「ああ、確かにあいつは伝説だ」

「誰もあいつの代わりはできねえな」

確かに。あの男「リゲル」シーライト」は俺達には真似の出来ない伝説をいくつも築いてくれたもんだ。

リゲルの賞金稼ぎとしての腕前を認めていない者はこの場に一人もいなかった。本来なら思い出したくもないライバルの話であるはずが、誰もがにやにやと思ひ出し笑いを浮かべている。

いつもカウンターの席で一人座っていたダークエルフの剣士が、

肌の色と同じ褐色の鎧を鳴らして振り向いた。そして妖精らしい尖った耳を何か言いたげに触りながら、残念なニュースを伝えるような感じで言った。

「聞くところによるとリゲルは憲兵団の大佐になったそうだから今後一人です仕事を持つていくのは変わりないと思うぞ」

賞金稼ぎたちは一瞬会話を止め、呼吸を忘れてお互いの顔を見渡した。その言葉の意味が俺達の脳髓に浸透してゆくのに大分時間がかかった。やや間があつて、言葉の意味を理解した俺達は腹を抱えて大爆笑した。

「賞金稼ぎが、憲兵に？　おいおい、なんだよそのジョークは」

「知らないのかお前、そりゃ、あいつが始めた新手の詐欺に決まってるだろ！」

「あつははは。まったく、よくやるよあの親父は」

俺達は呼吸がつかくなるまで笑い転げた。妖精は細い眉をしかめて、そんな俺達を不思議そうな顔で見ていた。

「本当なんだがなあ……」

「いやいや、あの男の賞金稼ぎとしての腕前は認めてやるよ。確かなものだ。けれども気をつけろ、あいつは大嘘つきだ」

そう、ついこの前なんか、「伝説の剣を手に入れたどー！」とかいう大法螺をふいていた事があった。それがマスメディアを使った巧妙なやり口で、アーディナル全土が騙され、連合軍でさえこいつの口ぶりを信じ込み、まんまとひっかかって彼を賞賛していた程だった。

実際にテレビで観ていた俺達も仲間の活躍ぶりに興奮して、本当にあいつが伝説の剣を手に入れたものとすっかり信じ込んでしまっていた。だが、自伝『リゲル』シーライトはいかにして英雄の剣を持ち帰ったか？』がベストセラーになって、世界的に売れに売れ、ばる儲けしたら、突然リゲルは失踪した。実はこの新聞に載っている例の少年に成りすましていただけだとわかった時は、アーディナル全土がひっくり返るような騒ぎに陥った。

とまあ、普段からこんな感じの痛快な事件を起こしてくれる痛快なオヤジだった。だから、そいつがいきなり東部に戻ってきて「大佐になったどー！」という話を聞いたときも、こいつはまた新手の詐欺を思いついたに違いない、と俺達は腹をくくっていたんだ。少なくとも、今度はもう本を買わされないように、財布の紐をきつく縛っておかないとな。

色黒の剣士にもそう忠告してやると、分かったような分からないような複雑な顔をして了承してくれた。妖精には人間という生き物の複雑さがよく飲み込めないのだろう。

しかし面白い冗談を考える奴がいるもんだな。不景気な昨今、みんな久しぶりに腹の底から笑ってやったという顔をしていると、天井に吊るされた板状の投影結晶の中で、メガネをかけたニースキヤスターがパソコンを覗き込むような真面目な顔をして、こう言った。

「イーサファルト王国からテンニードイルコンタル州にお越ししてまでもなく、体調不良が心配されているマリー王女様に関する情報がはいりました。

ただいま連合軍第五憲兵旅団『広報官』……失礼しました、第五憲兵旅団『リゲル』シーライト大佐』による緊急記者会見が開かれております。現場に中継を繋ぎます」

あれ？ あいつ今なんて言った？ まあいいや、俺も昼間っからちよつと飲みすぎたみたいだな。などと思いつながら、ちよつと画面に目をやると、薄い板状の投影結晶はやたらとマイクがのさばった机を映し出していて、その中央になにやら大量のフラッシュを浴びる、見覚えのある顔の男を映し出していた。

波打つ黒髪に、中部人特有の彫りの深い顔。落ち窪んだ優しげな目は手元をじつと見つめ、サファイアブルーに輝いていた。うつむいていたので、とがった顎が余計に鋭く見える。不精髭が似合う、ハンサムで熊のように大柄な男だ。

「あれ？ リゲルじゃないか」

「なんであいつがテレビに映ってるんだ？」

ふいに俺は胸騒ぎを覚えた。いや、だってさ、とんでもない詐欺を働いて行方をくらましていた男が、とつぜん全国放送で大量の記者に囲まれて記者会見を開いているんだぜ。謝罪とか、逮捕とか、そんな単語ばかりがよぎるのは当たり前じゃないか。

周りの賞金稼ぎたちの笑い声も、その内ぴたりと止んでしまった。
「おいおい、マジかよ」

さらに不可解なことに、一斉に焚かれるフラッシュを浴びながら、そいつは緑色の軍服に身を包んでいたんだ。憲兵団の軍服だった。しかも緋色のマントまで羽織っていて、俺達にはもはや、どんなクラスの官職の格好をしているのかさえ分からなかった。

けれども、それは紛れもなく、俺達のよく知っている賞金稼ぎ、リゲル「シーライト」そのものだったのだ。

「なんだなんだ、また新手の詐欺をおっぱじめるつもりなのか？」

「前回もこんな感じだったよなあ、とつぜん伝説の剣を手に入れたとか言い出したんだっけ？」

「賞金稼ぎを辞めて俳優に転向したみたいだな、結構サマになってるじゃないか？」

仲間の悪ふざけを面白がるような、そんな囁き声も聞こえていたが、それも誰かのある一言でぴたりと止んだ。

「おい、これ……バレたら洒落にならないんじゃないか？」

そうだ、確かにこれは、本気でやばい。

剣を持ち帰った無名の少年に成りすましていたのならまだしも、今度は、憲兵団の大佐に成りすまして全国放送に再登場するなんて、一体何を考えているんだ、あのオヤジは！　こんな詐欺を働いて、連合軍が黙っている訳がないじゃないか！

リゲルのオヤジは演説台に手を突くと、前のめりになり、俺達の不安をよそに軽い声で言った。

「今回はいつもより地味な登場ですまない。用意していた打ち上げ花火が無駄になってしまった」

記者団はどつと笑って、俺達はぞつと鳥肌が立った。安酒のグラスが次々と床に落ちて、バリンバリンと音を立てて割れていった。

「あの親父っ……！」

「見てられねえ、誰かあいつを止める！」

見回すと、どいつもこいつも酔いからさめてしまつて、宴会で酔いすぎた奴が洒落にならない危険行為をやるうとしている現場を目撃してしまつた風な顔をしていた。

ここまでずっと鉄面皮のような顔をしていた俺も、さすがに心臓が脈打ち、メガネがずり落ち、開いた口がふさがらなくなつていた。ところが、記者団はそんな不思議を意に介さず、当然のように彼に質問をぶつけはじめたんだ。

「王女様の御様態について、《大佐》はどのような事をお聞きでしょうか？」

二人称が普通に《大佐》になつていた。ありえねえ。

五十近い年齢の割に、リゲルの風貌はかなり若かつた。その顔は心なしかやつれており、今にも涙をこぼしそうな悲しげな表情を浮かべて、今度は天井を見つめている。――気をつける、あいつが目

に涙を浮かべたら、詐欺が発動する兆候だ。
「つい先月の事です。皆さんもすでにご存知の通り、私が伝説の剣の事件に『ある形で関与していた』最中……つまり、英雄の剣をこの東部へと『安全・確実に運ぶために進んで身代わりになつていた』時の事でした……」

私は一度故郷に立ち寄つて、イーサファルト王室に上がる機会を賜つたのです。残念ながらその時、王女様にお目見えする願いは適いませんでしたが、その時点では、ご病気の事はまだ何も聞かされておりませんでした……。

王女の母君であらせられる前王妃には大変お世話になつており、ご息女の王女が東部にお越しになられると聞いた時から、今日までの時間は実に待ち遠しく、またささやかな不安もあり、とても長く感じられるものでした。今回お目にかかれなかつた事を、非常に残

念に思っております」

王女のご回復を、心よりお待ち申し上げております。そう言っ
て頭を垂れたリゲルに、また大量の無駄なフラッシュが浴びせられる。
記者達は手元に顔を伏せて一斉にメモを取っている。

おい。今の話の中にいつたい何を真面目に書くことがあるんだ？
記事になるのか、今の？ 今のはこいつの遍歴と心境を語っただ
けの、ただの自己アピールに過ぎないじゃないか。ひょっとして俺
たちは、何か滑稽なコントを見せられているんじゃないのか？

「もしお会いできたときには、王女様とどのようなお話をなさる予
定だったのでしょうか？」

余計な質問をする記者がいた。金で雇われていたに違いない。い
ずれにせよ、リゲルは内心ほくそえんでいたに違いなかった。目に
熱い涙を浮かべ、震える息を吐き、ここぞとばかりに演技力のリミ
ッターを外して感情を爆発させた。

「ああっ！ 王女は、さぞお聞きしたかった事でしょう！ どうし
て私が愛する祖国イーサファルトを捨て、遙か東の国で戦う道を選
ばなくてはならなかったのか。」

なぜ私が今日まで、賞金稼ぎのような人の道を外れた生き方をし
なくてはならなかったのか……！ 私は、私が経験した壮絶な戦い
の全てを王女に打ち明け、そして、ただ許しを乞いたかった……！
熱い心情を吐露する大佐に向かって、再び無駄なフラッシュが焚
かれる。誰か、誰かあの詐欺師の暴走を止めてくれ。

詐欺だ、全部詐欺だ。終戦直後はまだ世の中が荒れていたから賞
金稼ぎの実入りがよかっただけだ、本人がそう言っていたのだから
間違いない。

リゲルの自己アピールは一度始まるともはや歯止めが利かなかっ
た。ブーケみたいに束になったマイクを引きちぎると、壇上の持ち
場から離れて、全身がカメラに映る位置に立った。どおおっと記者
たちからどよめきがあがる。会場を右に左に自在に移動しつつ、
放っておくと壇の上に両足で立ちかねないほどの大げさな身振りを

交えて延々と語り続けた。

「なぜ？ と、皆さんも不思議にお思いの事でしょう。退役後、一介の賞金稼ぎに過ぎなかった男が、どうやって大佐の地位にまで登り詰めたのか？

世間には様々な憶測が飛び交っています。この私が連合軍の勲章を一度辞退した英雄だったのではないか。あるいは賞金稼ぎの世界に送り込まれたスパイだったのではないか。

ですが、それらはどれも真実には遠く及ばない。私はごくありふれた元軍人の、ごくありふれた、ただの賞金稼ぎでしかありませんでした。

忘れもしない。あれは人生の全てを賭けて挑んだ、失われた英雄の剣を搜索する旅でのこと……！」

もはや王女様はまったく関係なかった。それでもなお巧妙な語り口に、誰一人としてその間違いに気づかない。気づいていても誰も指摘しようとしめない。すげえ。逆に俺の中には、リゲルに対する尊敬の念さえ生じ始めていた。こうしている間にも、全世界のお茶の間にリゲルの自己アピールが延々と流され続けているんだと思うと、正直感慨深いものさえあった。

「王女様は、ぜひお聞きしたかったことでしょう！ そのとき私がどのような決断をしたのか！？」

伝説の剣を死守したほどの偉業を成し遂げたにも関わらず、なぜその後突然姿を消すという行動を取らざるを得なかったのか！

壊滅しかけていた憲兵団を復活させ、悪の組織と闘い、数々のマフィアを逮捕に追い込み、今日のように平和な東部を、どのようにして掴み取ったのか……！」

リゲルは口惜しそうに顔をゆがめて、やがて、思い切ったようにマントの中から分厚い一冊の本を取り出し、演壇にどんと置いた。

「その全てが、この、自伝第二巻！ 《リゲルII シーライトは如何にして憲兵団大佐になったのか？》に、詳細に記録されているっ！
いよいよ明日、全国一斉に販売開始だっ！ よろしく！」

リゲルはカメラ目線になり、全てのフラッシュをはじき返すよう
なきらいんというまぶしい笑顔を俺達に向け、白い歯を光らせた。
ほ、欲しい！　ちくしょう、なんて商売上手なやつなんだっ！
これは買いだ！　今すぐ買うしかないっ！　急げ、書店に！
……と、内心思ったが、どうやらそう思っていたのは俺だけみた
いだった。

見渡すと他の賞金稼ぎたちはみんな眉をひそめて、伝説の賞金稼
ぎを尊敬するどころか、むしろ憎々しげな眼差しを画面に向けてい
たのだった。

「ふん、憲兵に成り下がった裏切り者が、ふざけんな」

「どうせ、あいつお得意の法螺話しか載ってないんだろ？」

賞金稼ぎたちは声をそろえて、一同がっはっはと笑っていた。

俺もみんなにあわせて、周囲にはほとんど見分けのつかない苦笑
いを浮かべていた。

けれども、メガネの奥の両目だけは、しっかりとその本の表紙を
捉えていたのだった。

——翌朝、こっそり書店を覗いてみると本は完売していた。ギル
ド直営のショップにも寄ってみたが、平積みのコナーの周辺にリ
ゲルの顔がでかでかと載ったポスターだけが残されていた。ちくし
ょう、賞金稼ぎどもはみんな嘘つきだ。

どうやら伝説の男リゲルは本当に憲兵になってしまったらしい。
道理で世の中が平和になってきているはずだ。あいつは賞金稼ぎだ
った頃と同様、大佐になってもきつと成功してのける事だろう。

そして稼ぐだけ稼いだら、とつぜん何の前触れもなく去るのだ。
あいつの自伝は今作もベストセラーになるのは疑いの余地がない。
それに引き換え、俺はいつまでもスタート地点でうろろしている
小物に過ぎなかった。

学もない、職もない。あるのは腕に覚えのあるこの両手と銃のみ。
さて、これから一体どうしよう。肩を落としてぶらぶら町をさまよ

二度クラクションを鳴らした。どうやら俺に用があるらしい。車
は俺と併走するように速度を落として、スモークガラスをゆっくり
と下げた。

「おい、こんな所でぶらぶらしていいのか？」
小僧^{ボーイ}

日ごろ狙撃手の精神を培っている俺は、借金取りに出くわした時も落ち着いた態度で対処することができた。少なくとも、顔にはまったく感情を出さずにいられる。

有りもしない根拠を並べて、見得を切る。これもあの伝説の賞金稼ぎに教わった処世術だったような気がする。バクバは人の弱みを探るいやらしい笑みをさらに深めて、また唇を舐めた。

あー、うぜえ。うぜえこの外国語混じりのしゃべり方。

バクバー味の桁外れな情報収集能力は、アーディナルの賞金稼ぎの中でも追隨を許さなかった。

たったひとり、リゲルⅡシーライトを除いては、の話だが。

奴は窓から身を乗り出し、凶悪な笑みをたたえながら平たい鼻面を寄せてきた。

「俺達にも大口の仕事が到来したのさ、アイ・ビリーヴ」

相変わらず狙撃手の表情を保っている俺を見ながら、急いでいる割にはたつぷり時間をかけつつ、バクバはけたけたと笑っていた。「恨むんなら逃げた相棒を恨みな。賞金稼ぎなんざどいつもこいつも簡単に人を裏切るしかた生き物だ、簡単に信用しない方が賢明だぜ、ドンチュウ・シンク？」

俺は全身に虫唾が走る思いをしながらも、ずっとバクバに表情のない顔を向けていた。頼む、頼むから、早く俺の目の前から消え去ってくれ。

ようやく車はゆっくりと発進していった。バクバはじつと俺を見ていた。俺もバクバをじつと見ていた。スモークガラスが上がって、バクバの首を挟むトラブルを起こしつつ、連中はその場に俺を残して去っていった。

*

——正直者が損をする世の中だ。

長年連れ添ってきた俺の相棒についてここで詳しく語るつもりはない。要はいつの間にかバクバに借金をして、いつの間にか俺を保証人にして、いつの間にか蒸発していたという事さえ理解してもらえればそれで十分だ。

ある日俺がアパートの部屋に帰ると、机の上に新品のメガネと三行の謝罪文を残して消えていた。くそつたれめ。

俺は日当たりのいい壁を選んで、部屋にリゲル^{II}シーライトのポスターをでかでかと貼った。書店に貼ってあった宣伝用のポスターを盗んできたものだった。反対側の壁際に腰掛けて、そいつの憎らしい笑顔に向かってゴム鉄砲を飛ばしたりしていた。

リゲルは俺がこの世界に入った時からギルドにいた、先輩格の賞金稼ぎだった。俺はあいつに生き方のほとんどを教わったと言ってもいい。いつも一匹狼で、仲間とはほとんどつるまなかった。その

くせ他の連中の何倍も仕事をこなしていて、いつも誰かに憎まれていた。

あいつは他の賞金稼ぎとは、何かが決定的に違っているような気がした。それが何なのかが分からず、いつも俺は頭を悩ませていた。俺が遠征をして賞金首を十件も仕留め、最年少記録を引っさげて得意げに帰ってみると、あいつは一ヶ月に二十五件も仕留めるという月間最多記録を出していた。本当は一日一件という大よそ信じがたいペースだったらしいのだが、当時のマスターから少々やりすぎだとお咎めを食らって二十五日目から謹慎していたという。それでもその記録は今なお打ち破られていない、俺達のギルドの金字塔となっている。

いくら走ってもいつこうに差が縮まる気はしなかった。そのうちあの男は俺が追いつく前にふらりと賞金稼ぎをやめてしまった。今では憲兵団の大佐だ。

「……くそつたれめ」

本気で賞金稼ぎギルドに残る『伝説』になっちまいがった。俺は笑みを浮かべるリゲルに毒づき、もう一度ゴムを飛ばした。

*

そのまま燃料が切れたみたいに寝て、目が覚めたのは日暮れごろだった。海には縁のほうにまだ太陽の余韻が残っていて、窓の外はうつすらと明るかった。

部屋の隅で携帯の青い光が明滅していて、俺を見下ろす憲兵団大佐の顔が現れたり消えたりしていた。夕暮れにビリー・ジェニムのサックスの音色。

俺はしばしその自然な組み合わせに酔いしれながら、自然なタイミングでそいつを耳にあてがった。

「テルシオ、今すぐ書斎に来い」

俺は直ぐにでも仕事に取り掛かれる準備をしていた。銀色の髪の上から黒いバンダナを巻き、革ジャンに、黒のスナイパー・ライフルと白銀のショットガンを装備していた。

部屋に入ったとき、暗幕の細い隙間から、外の様子をじっと伺っているマスターの姿があった。その背中が、まるで今まさに外で戦争が起きているかのような耐え難い雰囲気をかもし出していた。

逆光の中を葉巻の細い煙がくると立ち昇り、熱い灰を受ける灰皿が、硬質な冷たい光を帯びていた。真夏なのにも関わらず、部屋に入った瞬間に悪寒が走った。

「二度と引き返せない道を歩む事になるぞ」

ギルドマスターはいきなりそう切り出した。もちろん何の話かは確認するまでもなかった。マスターは契約文の文言を確認するように、一言一言かみ締めながら言った。

「この取引は法的に存在してはならない。ゆえに、その存在を証明する契約書も存在しない。互いに信頼しあい、互いに脅迫しあい、互いに無謀な要求をしあう危険な取引だ。この契約を結べばお前はギルドと依頼主、双方の身を脅かす重大な存在になる。言うならば、おまえ自身が契約書となる。任務失敗、契約不履行、あるいは契約に背くあらゆる違反行為を犯した場合、場合によっては消えてもらう。消えてもらうことになる。二度と引き返せない道だ、それでも受けるか」

二度と引き返せない闇の入り口にたたずんでいたのに、俺は口ポツトみたいに平然と受け答えをしていた。

「ああ、いいぜ」

どうやら、本当の不幸ってのはこういう風にして訪れるものらしい。

借金とか、仲間の裏切りとか、親の敵討ちとか、そんな見た目も危険なものでは決してなかったんだ。

その応接室は、ギルドの地下室にあった。当然ながらこの部屋も盗聴を恐れて厳重に管理されている。窓は一つもなく、分厚い壁に阻まれて外の音は一切聞こえてこなかった。

暖色系の薄明かりの中に、その女は身動きひとつせずに座っていた。琥珀色の紗の衣に全身を包み、一目でそれとわかるような異邦人の風貌をしていた。俺やリゲルと同じ、中部人の顔立ちだ。鼻筋は高く、熱線を放っているような、直視すると痛いほどの強い眼差しをしている。瞳の色はグリーンだ。耳には高価そうな赤いイヤリングをつけていて、布で顔を隠していても、その美貌と高飛車な態度はこちらにまで伝わってきた。

「名乗りなさい」

俺が向かいの椅子に座ろうとすると、依頼者は俺の動きを牽制する様に言った。どうやら椅子に座るのにも許可が要る御身分らしい、俺はポケットに手をつ込んで、立ったまま返事をした。

「テルシオ」ヴォン」スタード」

「まあ、テルシオ」俺の名前を聞いた途端、女の目元が急に綻んだのが分かった。そして中部人は大抵こういう。「良い名です」

へいへい、光栄ですとも。と口の中で呟いた。正直、俺の名前なんてどうだっていい。俺は肩に背負った白銀の銃のすわりを直して、女の向かいの席を指し、なるべく騎士らしく丁寧に振舞った。

「座ってもいいか？」

依頼主が頷くのを見届けると、俺は背もたれを掴んでぐりと反転させ、背もたれの上に腕を組んでどっかりと腰掛けた。相手は目を丸くしていたが、気にせず続けた。

「早速本題に入らせてくれ。俺はそこら辺の傭兵くずれとは違う。契約を軽んじたりもしないし、依頼主の命令にはその都度従う。一度依頼を引き受けるからには絶対に逃げないし、どんな仕事でもあらゆる手段を使って確実にこなしてみせる。だが、その前に言っておかなくてはならないことが幾つかあって、まず一つ目……」

俺は指を折って、言っておかなければならない事を一つずつ数えた。

「一つは、俺と依頼主との契約に対して、俺とギルドとの契約が常に優先されるということだ。くわしい契約内容はあとでおっさんに見せてもらえばわかるが、たとえば依頼主の命令であっても、ギルドの関係者に直接危害を及ぼすような命令だけは受け付けない。」

二つ目に、一度契約したら契約金を全額支払う前に契約を取り消したり、または途中で俺から別の賞金稼ぎに取り替えたりはできない。あんたが任務完了の由をギルドに伝えない限り、俺とお前の契約は永遠に続くということだ。ここまで分かるか？」

「結構」女は深い笑みを浮かべて言った。「貴方に決めました。よろしく願います、テルシオ」

俺は残りの指をもてあまして、ぴたりと固まってしまった。どうやら、いきなり俺で決定してしまったようだ。

ここまで豪胆な依頼主を見るのははじめてだった。最初は信頼のおける奴かどうか、時間をかけてじっくり吟味するもんだぜ。

「で、そう」

やはり影の仕事はひと味違う。あっさりと契約を結ばれてしまった俺は、平静を取り繕って話を続けた。

「じゃあ、俺の方も異論はないので、早速本題に入ろうか。具体的な仕事の内容を聞かせてくれないか」

「護衛です」

「護衛？」

「ええ、東部を観光する間、私の護衛をしていただきたいのです。よろしいですか？」

「ただ護衛をしてりやいいって訳じゃないんだろ？」

ただの護衛を雇うだけなら、ギルドに賞金稼ぎを仲介してもらう必要はない。同じ金を払えば喜んで盾になってくれる奴を百人は集められる。

ひよつとするとそういつた無駄なところに大金をつぎ込む趣味があるのかも知れないが、なにかしら後ろめたい目的があるはずだった。少なくとも俺の嗅覚はそれを感じていた。

女は細い顎を引くと、再び刺すような鋭い目つきになった。

「私の護衛だけでは何か不満ですか？」

相手の脅迫的な態度に、俺は数ミリほど姿勢を正し、首を振った。
「いや、十分だ。よっぽど危険な連中に狙われているんだな」

女は何やら挑むような、試すような目つきでじつと俺の目を見ていた。

「分かりました、本当の依頼を申し上げます」

そして突然、まるで何がしかの強い念が籠った、恨みがましい目つきになって言った。

「リゲル」シーライトを暗殺して頂きたいのです。できますか」

その契約内容を言い渡された瞬間、背中の銃が今まで感じた事もない冷たさを持ったように感じられた。正直、聞かなきゃよかった、とも思った。

非公式の仕事だ、暗殺ぐらいあるだろうと覚悟はしていた。それでも標的はせいぜい仕事上のライバルとか商売敵とか、そんなものを想定していた。

だが、あまりにもデカかった。現連合軍憲兵団大佐の、暗殺。デカイ。ピア・クラスの仕事をいくつもこなしてきた俺でさえ、即座に首を縦に振るのがためらわれた。

「それはつまり、『連合軍に歯向かえ』ということになるな」

「ええ、そうなりますね」

思えば騎士はずいぶんと様変わりしてしまったものだった。

帝国の支配からアーディナルを救った正義の軍に、牙をむくテロリスト、か。この俺が、テロリストに。

冷や汗が後から後から吹いてきた。悪い夢のような気さえしてきた。何かの聞き間違えじゃないかと耳を疑ったりもした。

だが、これは作り話なんかじゃない。これは紛れのない現実なんだ。『何があっても、拒否できない』それを理解して受け入れたというのが現実だ。この部屋に足を踏み込んだ瞬間から、俺はこういう事態が起こる事すらも覚悟して、足を踏み込んでいなくちゃなら

なかったはずだ。

これが影の仕事。俺の顔にも早速影が落ちそうになった。

「詳しい事情は聞かない」それがルールだ。「あんたの素性も聞かない。早速仕事に取り掛かる」

表面上は何も考えていない風を装いながら、その実、心の中では激しく動揺していた。しばらく席から立つことさえ困難なくらいに俺は、試されている。引き金を引く指が震えた。塔の屋上で息を潜めている自分をイメージした。すると、俺の精神は再び屋上のフーピーエと一致して、世界を鳥瞰する一個の石像になる。震えは収まって、俺は一、二秒ほど閉じていたまぶたを開き、落ち着いて椅子から立ち上がった。

「呼び名がないのは不便だな。とりあえず、なんか適当な呼び名を作ってくれ」

「では、『ローロ』と」

俺が眉をひそめると、女は、もう一度にこりと微笑んだ。変わった名だったので、俺はもう一度念を押した。

「ローロ？ いいのか、それで？」

「北方民族の言葉で『大きなトカゲ』、すなわち『ドラゴン』を言い表す言葉です」

俺はにやりと笑った。へえ、なるほど。この女には結構お似合いじゃないか？

ローロは俺を見ながら微笑んだまま、白い手をそつと差し出した。「では、騎士殿。夷狄^{いてき}の征伐に、いざ参りましょう」

俺は恭しく頭を下げ、その手を取った。

琥珀色のドレスがドラゴンの鱗みたいに光を放ちながら、ローロは優雅に立ち上がった。

こうして、千二百年ぶりに英雄テルシオとドラゴンの契約が交わされた。中部から遙か東の地の、薄暗い地下室で。誰にも知られることなく、静謐に。

俺の最初の影の仕事は、賞金稼ぎギルドの伝説であり、裏切り者、

そして現ミッドスフィア第五憲兵旅団大佐、リゲル＝シーライトの暗殺だった。

『やれやれ、ようやく見つけたぞ』ドラゴンの生き残りを探して世界中を旅した

四大魔法民族が手を結んで後、世界中から魔法使い達が募り、日々新しい魔法を研究し続ける魔石工業地帯ミッドスフィア。

その中心地には漆黒の塔がずらりと立ち並んでいる。《闇の石》の粉末を混ぜた建材を使っていて、隣の塔まで魔力が漏れないようにされているのだ。

様々な肌や耳の人種が行き交う大通りを抜け、ゴミくずが散らかった怪しげな路地裏に入ってゆくと、そこには表の世界と平行して息づく裏の世界があった。

狭い道をめいいっぱい使って缶蹴りをしている少年達に、階段の手すりにぼんやり腰掛けてただ待機電力を消費している青年。赤ん坊を背負った老女が漆喰の塀の前をゆっくりゆっくり通り過ぎていく。ダウンタウンに息づく彼らのライフスタイルは基本的に低燃費で、どこか自分に通じるものがあるような気がした。

とある路地に入ると、行く手を遮るようにやたらと木箱が積まれている。その奥の小さな広場に、油で黒ずんだ小さな箱に腰掛け、野良猫たちと戯れる薄汚れた身なりの男がいた。

スーロデフ、身長一五七センチ、丸顔に猫目、動物愛護主義者、職業は情報屋だ。欲しい情報はピア・クラスからデイ・クラスまでありとあらゆる情報を買ってくれる。俺のギルドでこいつの世話になつていない奴はいない。

リゲルシーライトの情報を頼むと、彼はくわえたタバコを落とさないよう、唇をきゅっとすばめた。くっくくと体を揺らしている。どうやら笑いをこらえているらしかった。

「とうとうあのオヤジ、自分が賞金首になったのかい？ ひーっ、ひーっ」

そう言って笑って、爪の割れた親指で涙を拭っていた。五指はすべて指紋が消されている。ふやけたピンク色をしていて、いつもド

ツグフードや煮干の油でつるつるしていた。

「依頼主は賞金稼ぎ仲間かもしれないな。ぷぷぷ、やれやれ、あんまり目立ちすぎるもんじゃないねえ。憲兵団大佐か。えらい事をしてくれたもんだ」

そう言つて、また一人で吹きだしている。俺はただ隣で口ロボットみたいにたたずんでいた。

この能天気な男は、賞金稼ぎ達の不況も知ったことじゃない感じである。軽い男だったが、軽いなりに表裏のない自然な男だった。そこに好感を持てた。いつも被っているチューリップハットも自然でよく似合っていた。

「で？　どんな情報が欲しいんだい？」

「何でもいい、表の情報でも、裏の情報でもだ。とにかく、あいつに関する情報を片っ端から俺に売ってくれないか」

いつも一匹狼だったリゲルの素性は、同じ賞金稼ぎギルドでも知るものはほとんどいない。あいつの背中を辿ってここまでやってきた俺にも、実はよく分からない部分が多かった。

スーはパンをちぎって手元の黒猫たちに投げてやりながら言った。「まあまあ、そう急かすなつて。どうせ金は後払いなんだし、こつちは確実に元が取れるように渡す情報をじっくり吟味してやる必要がある。今のところ渡せるのは表の情報からだな、よいしょ」

スーは猫達の中から金色の毛の猫を一匹抱きかかえた。猫は嫌がりもせず、額同士をこつんとぶつけ合わせていた。

猫がぐるぐる喉を鳴らすのを聞きながら、やがてスーは標的の簡単な経歴を語った。

「……西部のイーサファルト王国の出身。世界魔法大戦時にはアーディナル西軍の第三歩兵師団に所属し、終戦と共に退役している。十六年前に東部にふらりとやってきたが、それまで何をしていたのかは不明。その後賞金稼ぎとして仲間に恨まれるほどの活躍をするが、先月伝説の剣を発見したという嘘について大もつけした後、突然行方不明になる。」

そして最近になって再び東部に姿を現した。どうやら憲兵団の捜査協力をしてアイズマール一家の逮捕に貢献したそうだ。その後、兵役時の功績なども評価され、賢者の塔からミッドスフィア第五憲兵旅団の大佐に抜擢される」

色々な情報屋がいるが、スーは動物に情報を記憶させている。特に魔法猫は賢い、いつも信頼できる情報しか語らないと彼は言う。リゲルがアイズマール一家の逮捕に貢献していたとは、一体どういうことだろうか。ここがリゲルの経歴の中でたった一点、不思議に思われた点だ。

アイズマール一家は東部のマフィアの元締めだ。賞金稼ぎギルドも連中の手下には手を出さないという暗黙のルールを敷いていた。このルールを破って手下を手にかけて奴はギルドから追放され、その後の末路は誰にも分からないという。

正気ならアイズマールに喧嘩を売るような真似はしない。一体どうして、あいつはそんな危険な真似を犯したんだろうか。

奴が今まで仕留めた名だたる賞金首をひとしきり言うと、スーはごちそうのニシンの燻製をポシェットから取り出して、猫を降ろした。

「よつ、ごくろうさん。一言で言うと、俺もよく分からない男だ」と、スーはタバコをくわえ直してこう評した。

「俺たち情報屋の間でも評判はよくない、なんせあいつ、俺たちから情報を買わないんだ」

「情報を買わないだって？」

俺は態度には出さずに心の中で驚いた。普通、独自の情報網でも持っていない限りは、賞金稼ぎを情報屋に頼らずやっていくことはできない。独自の情報網を持っている奴は、バクバー味のように大抵がデカイ組織がらみだ。

「これは未確認の情報だが、リゲルはアイズマール一家が開催するパーティに顔を出して、その時に奴らから賞金首の情報を得ているんじゃないかって噂だ。どうやってそんな立場を手に入れたのかは

知らんがな。ふふん、敏い奴じゃあないか」

なるほど、あいつはアイズマール一家とそんな関係を持っていたのか。意外に思われたが、よく考えればそれは賞金稼ぎにとって実に効率のいい情報収集のように思われた。

東部のマフィアの元締めであるアイズマール一家は、世界中にネットワークを持つ。そこには闇の世界のあらゆる情報が一拳に集まってきたはずだ。その情報網を利用すれば目当ての賞金首の居場所や、そいつが最近購入した武器などの有効な情報も割り出しやすいだろう。

だが、本当に情報だけで賞金首を仕留められるわけではない、情報をどう有効に使うかが問題なのだ。

「もし仮に、リゲルがアイズマールとつるんでいたにしても、活躍ぶりが半端じゃない。なんであいつはあんなに強いんだ？」

「噂はある、色々とな。なにかの異能力の持ち主だとか。あるいは、憲兵団と深いコネがあるだとか」

煙を吹くとスーは、一呼吸置いてにやりと笑った。

「面白いのが、アイズマール一家を逮捕するために賞金稼ぎのふりをして連中に接近していた、軍の特殊工作員だったとか」

『賞金稼ぎのふりをして』。その言葉に、俺は一瞬息が詰まった。

つまり、スーが言っているのはこういうことだ。伝説の男は最初から賞金稼ぎなんかじゃなくて、最初から憲兵の仲間だった。

あいつの目的はアイズマールの逮捕。十六年をかけて賞金稼ぎのふりをし、アイズマール一家に上手く接近し、そして逮捕にまでこぎつけるという遠大な計画を行っていたのだ。

賞金稼ぎをやめてすぐ憲兵団大佐に昇格したのは、この作戦が成功すればもともとそうなる予定……だったから。

なるほど、そう考えれば全てに説明がつく。説明がついてしまう。ずっと誰ともつるまなかったのにも、実に上手い説明がつく。本当はあいつ一人で戦っていたわけじゃなく、軍や憲兵の連中が、影ですっと協力して……。

「……そんははずはねえ」

あいつは確かに一匹狼だった。間違いない。なぜなら、俺はあいつが一人で戦う所を、この目ではつきりと見ていたからだ。

白銀のショットガンを担いで、たった一人で大勢の悪党どもの前に立ちはだかったじゃないか。もう片方の手に持った拳銃が何度も火を噴いて、圧倒的な強さで、俺の目の前でそいつらを蹴散らしてしまったんだ。

重大な任務についている憲兵が、そんな危険なまねをするはずない。

その考えは、なしだ。俺は感情のこもっていない目でスーを見下ろしながら、三秒でその考えをまとめあげた。とりあえず、もっと古い過去の情報を尋ねてみることにした。

「大戦時の従軍経歴は？ 西軍に所属していた時の事は分からないのか？」

尋ねてみると、スーは首を振って、お手上げといった風にピンク色の手をあげた。

「イーサファルト王国の第三歩兵師団は王宮お抱えの軍隊だ、ガードが固すぎて無理。ネズミもトビも近づけやしねえから」

スーはそう言ってまたひとり笑っていた。やった事があるみたいだな。

「王宮の兵士、か」

なるほど、遠くの国の憲兵団とは一見関係がなさそうでありながら、よくよく考えると上のほうで繋がっていてもなんら不思議ではない。実に怪しすぎる。

スーは膝についたパンのかけらを払って、のっそりと立ち上がった。

「とりあえず、今のところ知っているのはそのくらいかな。西軍は無理っぽいけど、また機会があったら探ってみるよ」

スーは魔法猫達を引き連れて、手を振りながら、ダウントアウンのどこかに去っていった。

しかし、結局スーからはその後リゲルの過去に関する情報を得ることは出来なかった。

作戦決行のその日まで、リゲルの本当の正体はとうとう分からずじまいだった。

＊

伝説の男がかつては王宮の兵士だったとか、あるいは憲兵だったとか、偽物の賞金稼ぎだったとか、そんな事はこの際関係ない。

どんな仕事を本職に持っていたようと、銃を片手に賞金を追い求める奴はみんな賞金稼ぎに違いなかった。そしてあいつは間違いなく俺達と同じ嘘つきで性悪な賞金稼ぎの一人にすぎない。

けれども今の俺は賞金稼ぎとしてどうなんだろう。美女の護衛をしつつ軍の重役の命を狙う。はつきり言って賞金稼ぎの仕事じゃねえ。殺し屋に頼めっていうレベルだ。

猫探しの依頼を受けて下町を駆け回っていた新人時代の思い出がまるで御伽噺の世界みたいだ。依頼主はスーだった。

その頃から一緒だった相棒は借金を残して依然行方不明だった。たとえ戻ってきて二度と仕事をしなくなかった。

まずは俺と一緒に同じ穴に落ちてくれる仲間を捜すところから始めなくてはならなかった。

ギルドから直営アパートの住所録を借りて、アーディナル東部を北から南まで片っ端から当たってみた。

かつて一緒に仕事をした事のある知り合いは全部当たってみた。「でかい仕事がある。でかくて、やばい仕事だ。俺なら成功させる自信がある、お前ならこの意味が分かるだろう？ たのむ一ヶ月で良い、手を貸してくれないか」

ドアはぱたんと閉じられて、俺はチェックリストの名前を消す。その繰り返しだった。

いっそのまま逃亡しちまおうか。そんな考えが頭をかすめたり

もするが、俺の背後には琥珀色の衣で身を隠した依頼者が常に立っていて、そんな気配を見せた途端にビームでも放ちそうな鋭い眼差しを俺に射掛けているのだった。

契約を放棄して逃げやしないか心配だ、などというので強引にくつついてきてしまった。まあ、初日にしてもう諦めかかっているの
で、その予感はあるがち外れじゃない。

逃げるのが無理なら、こいつと何とか話し合いで決着をつけるしかない。そう考えた俺は、東部の街中を歩きながら幾度となくその機会を伺ってみたが、結局はだめだった。

竜の目メクナゴン州で《阿熱の塔》の前を通りかかったとき、さりげなく「知ってるか、これ東部で一番高い塔なんだぜ」と教えても見上げようとすらしなかった。

竜の角コニーデ州で昼下がりに屋台に寄って、名物のクレープを二つ買って、片方を「ほら、やんよ」と言って渡そうとした時も受け取るそぶりすら見せなかった。

中には一つや二つ興味を示したものもあったが、これも上手くいかなかった。竜の上顎ジペンゼ州で前衛アーティストの作った噴水の前に通りかかったとき、「水中に輪っかのない魔法陣があるだろう真ん中にコインを投げ入れると波紋で完成して、水が吹き出るんだぜ」と言ってコインを投げ入れると、ちょうど水中を覗こうとした依頼者の肩から上が噴水の洗礼を浴びてしまった。俺は無表情を装っていたが、腹の中で爆笑していた。

列車の窓から黄昏どきの海が見えたとき、「見ろよ、綺麗な海だぜ」などと仕事相手には絶対言わないような恥ずかしい台詞を口にしたときも、じっと前を見詰めたまま無視を決め込んでいた。なんとかこつちを向いてもらえないと、まるで俺がしつこいナンパ師みたいに見える光景だった。

ちくしょう、なんで俺じゃなきゃだめなんだろう。なんで俺の名前がそんなに気に入ったんだろうか。けれども依頼者には何も聞かない、何も聞けない。それがこの仕事のルールだ。

ドラゴンと契約した者はお互いの心が通じるという。あれは俺が仕事を諦めようとしたら、迷うことなく契約書を破り捨てる目だ。それこそ粉みじんになるまで。

そのときは賞金稼ぎギルドだって黙っちゃいない、全力をあげて俺の命を狙うだろう。その気になればギルドが俺を始末する方法はいくらでもある。俺の首に賞金をかければいい。賞金稼ぎどもは猛禽のように俺の命を狙ってくるだろう。

あるいは、割のいい賞金の手に入れてふらりと旅に出て、二度と戻ってきませんでしたなんてのもある。こちらの方が安上がりで低エネルギーだ。

俺は自分に強く言い聞かせた。落ち着け、焦るな、テルシオ。どうせもう引き返すことのできない道なんだ。

*

あまり楽しい旅だとは言い難かったが、たとえ楽しい旅だったとしても夜通し歩き続けるわけにはいかなかった。東部の各地にはギルド直営の宿場が結構あるので、日が暮れるとそこに宿を取った。

一般人でも宿泊することは出来たが、ギルドに所属していると三分の一くらいに値引きしてくれる。

俺達の他には、とある賞金首を狙ってかれこれ二十日近く粘っているという義眼の男が一人泊まっていた。腕は良さそうに見えたが、初対面の相手を仲間に加えられるような話ではなかった。

一部屋に一台しかないベッドを使うのは、もちろんご主人様の口ー口だった。

彼女の騎士であるところの俺は、部屋の片隅に椅子を置いて、シヨットガンを肩に担いで窓の外を見張っていた。

ご主人様は俺がその気になればいつでも殺せるくらい無防備な格好で、このベッド固いですわなどと寝言で愚痴を言いながら寝転がっていた。

やれやれ、こいつ、契約したのが俺で本当によかったな。他の賞金稼ぎだったら大人しく騎士なんてやってなかったぞ。

空っぽの部屋をいくつか隔てた向こうから、義眼のおっさんのいびきだけが響いてくるような泥くさいシチュエーションだったが、俺は大人しく貴人を護る騎士を続けていた。

なぜって、この浮世離れた暢気を見ると、護らなければならぬと思うてしまっただ。俺が騎士であるのと同様に、こいつも貴族のような、本来騎士に護られる側の人間の空気をまとっているような気がしたんだ。

そのせいかどうかは分からないが、俺もこいつの前では常に騎士らしく振舞っていた。宿で二人きりのときも、あくまで、騎士らしく。バンダナをきつめに巻いて、いつでも裸眼で狙撃ができるよう、メガネを窓枠に置いて外を見張っていた。時々ベッドで寝返りをうつ契約主を、心の中で落ちろ、落ちろと念じながら見守ったりしていた。

悪党に命を狙われる立場の賞金稼ぎにとって、他人との余計な繋がりは命取りにしかない。あの男も確かそう言っていた。テルシオ、覚えておけ。賞金稼ぎはいつでも仲間と縁を切る心構えをしていなくちゃならない。

けっきょく、俺の仲間なんて一人も集まらないんじゃないか。その可能性も考えていないわけではなかった。俺はただ、可能な限り時間稼ぎをして、運命に抗おうとしていただけなのかもしれない。

リゲルが賞金稼ぎを辞めてしまった事は、実はずいぶん以前から知っていた。数ヶ月前、カスケードとかいう武器屋の前を通りかかったときだった。あいつが売った白銀の銃がショーケースに飾つてあるのを見かけて、すぐにそれだとわかった。

ただでさえ相棒の借金を背負わされて、四苦八苦していた最中だった。あの銃が目にとまったとき、こいつは俺が持っていないくちやならないものだと思えた。何か強い力に押されるように俺はそいつを手に入っていた。お陰で影の仕事にまで手を出すことになって、

気がついたらリゲルを殺すことになっていた。

やれやれ、自分の銃にまで恨まれるなんて、あいつらしい。そう思うと、少しは気分が軽くなった。

俺は静かな夜の街をじつと眺めていた。あの店は、この窓からは見えないだろうな。それでも、相棒がひよっこりその辺の角から顔を出しそうな雰囲気ではあった。

皮肉だとか、寂しいとか、そんな感慨は湧いてこなかった。ただ、不思議ではあった。賞金稼ぎ同士の繋がりなんて、所詮そんなものだ。

＊

契約つていうのは不思議な関係だった。なんでこいつの為にこんな苦勞をしなきゃならないんだってうんざりする事もあれば、こいつ、俺が護つてやらないと死ぬんだという当然の事実にどきつとさせられたりもする。

朝起きて、ローロがベッドの上から消えていたときも、俺はかなりどきつとした。

ベッドには琥珀色の衣がきれいに折りたたまれていた。首をめぐらせると、信じられないくらい綺麗な女がそこにいた。

質素な宿屋に似つかわしくない、真つ白い清潔なドレスを着ていて、囚われのお姫様みたいに背景から浮いて見えた。肩をきゅつとすばめて体の前に腕を組み、窓から射しこんだ光が背後の壁に広がって、ドレスの延長線上に生えた翼みたいになっていた。

ドラゴンも脱皮とかするんだろうか。なんて、一瞬そんな馬鹿なことを考えてしまった。

ローロの顔をはじめて見る。朝露にぬれた様にしっとりとした黒髪は、思ったよりも短い。目鼻立ちの整った顔をしていたけれども、中部人によくある彫刻みたいな極端さは感じなかった。どちらかというと、油ののった白い陶器みたいに柔らかくて、なんというか、

手に持つとしつくり馴染みそうな具合のオウトツがあった。

髪と同じ色の眉は不機嫌そうにつりあがっていて、その下の大きな赤褐色の目が俺をじろりと睨んでいた。

「何だ」表情だけは平静を装うことができたが、喉がからからに渴いていた。ローロはいつもの高飛車な調子で言った。

「起きるのが遅かったので、朝食を取り寄せました」

見ると、テーブルには湯気の立つドリアや、ロールパンや、サラダがめいいっぱいはいみ出した器が用意してあった。世間知らずかと思ったが、俺のドラゴン結構なんでもできるみたいだ。

「従者なら、主人より早く起きるべきですわ」

ローロはため息をついて、ドリアの湯気をふっと吹き飛ばした。どうやら本当の騎士道つてのは、思ったよりも厳しいみたいだ。

*

結局、騎士と姫様の旅は仲間が見つからないまま三日間続いた。

姫様もよく途中で投げ出さずについて来たものだと思う。

ようやく俺に力を貸してくれる命知らずが一人見つかった。そいつがスタイだった。

灯台下暗しと言うやつだろうか、俺と同じ賞金稼ぎアパートの、しかも隣の部屋に住んでいる女だった。金色のショートヘアに細長い手足、自分の明るさにさえ目を細めてにこにこ笑っている。俺がアパートにやってきた時は机と向かい合ってお絵かきをしている真っ最中だった。

頭のネジが緩い子だったが、絵がやたらと上手い。あまり詳しくはないが、こういうのを写実的というんだろうか。細かい描写が得意なくせに、でかい建物ばかりを好んで描いていた。

テン＝デイルコンタル州の白鳥城に、政治中枢の賢者の塔。岩山に墜落した巨大な天空城に、朝焼けに染まるクレタの大聖堂。旅をした先々の風景画がありとあらゆる方法で壁一面にちりばめられて

いた。

売ればそれなりの金にはなるだろうのに、自分の絵はぜったいに人に売らないという変なポリシーを貫いていた。それで一度貧窮して、隣の俺に泣きついて来た事もある。一緒に仕事をした事はなかったが、それがこいつとの奇妙な縁の始まりだった。

賞金稼ぎりリストに名前が載っていたのでちよつと首をかしげた。どうやら、ギルドの仕事は全くしていないのに直営の宿で値引いてもらっているらしい。ずうずうしい奴だ。この賞金稼ぎアパートに住んでいる理由もいまいちよく分からない。ひとたび聞くととてもなく長い話になるので、あまり聞かないことにしている。

ただ、理由は察しがついた。あくまで絵画コンクールの賞金を狙い続ける絵の賞金稼ぎを自負しているんだろう、こいつは。変な奴だが、それがこいつの自然なら仕方ない。

例のごとく、俺が仕事に手を貸してくれるよう頼むと、にこにこ笑ってうなずいた。

「うん、いいよあー」

電話番ぐらいなら大丈夫だろうと思って話しかけたのだが、電話番もこなせるかどうか、ちよつと怪しく思えてきた。

それ以前に、俺の言っていることを正しく理解しているかが問題だ。

「いいのか、俺と大犯罪を犯すことになるんだぞ。二度とこの町に戻ってこられなくなるかも知れないんだぞ。お前がいつもしているお絵かきとはスケールが違うんだぞ」

と念を押すと、何やら顔を赤らめて、ほっぺたをサンドウィッチにし、もじもじし始めた。

「て、テルシオに、こ、告白されたあ……」

頭から湯気が立ち昇って、意味不明な幾何学模様を描いていた。

だめだ、こいつ俺の発言の内容を全く理解していない。やっぱりこいつは俺なんかと運命を共にするより、ここでお絵かきしている方がよっぽど幸せだろう。

そう結論付けて、「やっぱり今の話はなしだ」と言おうとすると、スタイは、ぴきゅん、と目を光らせて、俺の後ろの依頼者をねめつた。

「その人、だあれ？」

「ああ……ローロって言うんだ。ちよつと訳ありの奴で」

念のため、この件の依頼者だということは伏せておいた。

本当は本部で大人しくして貰えたらもつと安全だったのだが、なんて今更そんな事を言い出しても始まらない。

スタイは顔の全筋肉を鼻先に集中させ、琥珀色の衣に身を包んだ依頼主をじいつと睨みつけていた。どうやら能天気なスタイに彼女の邪眼は通用しないらしい、スタイは抑揚のないロボットみたいな口調でカタカタと言った。

「ふうーん。テルシオはあのお姉さんの色香に騙されて達成困難な依頼を押し付けられてあつさり引き受けちゃったって感じだね」

しかも、こいつはこういう事になると途端に絶大な推理力を発揮するから困る。

その推理のほとんどのが的外れなものだったから更に弱った。俺とこいつはそんな関係じゃねえ。騎士と姫様だ。

スタイは俺の腕にしがみつくと、依頼者から俺をずりずりと引き剥がして自分の陣地に引き込もうとしていた。

「お、おい、スタイ」

「渡さないから」

なんだか、急に空々しい展開になってしまった。

「いーだ、私もテルシオと一緒にやなきやーよ」

そう言っつて、ローロにむかって歯を剥いて威嚇していた。さすがスタイだ、俺にはこの依頼主とそんな駆け引きをする度胸はない。

ローロは、俺の所有権をめぐって彼女と争う姿勢は見せなかったが、ここまで子供じみたわがままを言われるのに慣れていないせいか、少し困惑した様子をみせた。

綺麗な眉を寄せて、しばらく首をかしげていたが、まもなく見事

な解決案を彼女に示してくれた。

「でしたら、貴女にも同じ仕事を依頼しましょう。お二人で協力しあって任務を達成してください。よろしいですわね、テルシオ」

要約すると、スタイのわがママを聞きいれただけだった。

二人同時に契約するというのは聞いたことがあるが、こんな横暴があるのか。

「もうちよつと考えてみないか」

「貴方の意見は聞いていませんが」

「護衛役として忠告しているだけだ。そもそもこの仕事はギルドが斡旋した信頼できる賞金稼ぎにしか依頼できないはずだ」

「私が自らの責任において、個人的に彼女と契約を結ぶだけです。

ギルドを介するつもりはございません。貴方には依頼主の自由な行動を制限する権限がおりですか」

「……」

そこまで言われたら、俺に口を挟む権限なんてない。俺は押し黙って、それ以上の抵抗は諦めた。

だから、自分の命を預ける相手を名前が気に入ったのだ、わがママを言われて困ったので決めないでくれよ。こいつ、本当に命知らずってレベルじゃねえぞ。

二人のとんでもない女に囲まれて呆然とする俺の隣で、スタイは目を細めてぴょんぴょん飛び跳ねていた。

「やるうーっ！ いえーい！」

おいおい、スタイ。やる気満々だが、分かってるのか。これは、『二度と引き返せない道』なんだぞ。

*

もう一人の命知らずも、同じジペンゼにいた。思えばつくづく変人の多い州だ。

賞金稼ぎアパートのあるデュルス岬から湾を挟んだ反対側にある

工場町に住んでいた。この街はなぜか犬がやたらと多く、犬街とも呼ばれている。ドックは俺たちが訪ねた時には、丘の上に建つトタンの風除けみたいなボロボロの工場で、何やらおかしい機械を作っている真つ最中だった。

犬の顔をしたバーリオ（バーリヤ人）だったが、賞金稼ぎとしての腕前は確かな奴だった。普段は機械の修理工をしていて、岬のスクラップをかき集めては浮き船の改造に没頭している変人発明家の一人だった。

八面体の謎の機械の上からオイルまみれの顔をひよっこりと出した。毛むくじやらの体にオイルが染み込んでいて、いまや世界で一番燃えやすい男になっている。この格好で気楽にタバコなんか吸っているものだから、いつ引火するかとこっちがひやひやさせられた。「なんだ、テルシオ！ もう二人も仲間を見つけたみたいだな！ がっはっは！」

口の端を吊り上げて、ドライバー並みに尖った牙を剥くドック。いつもの豪快な笑い声が、ぱたぱたと風になびくトタンに反響した。俺はわずかに顔をしかめた。どうやら俺が仲間を集めてまわっているという情報が漏れているらしかった。どうやら訪ねた連中のなかに、口の軽い奴がいたみたいだな。

ふん、まあその辺の事は折り込み済みだ。直前まで用件も口外しないつもりだから、問題はないだろう。

スタイはこの毛むくじやらのバーリオがお気に入りで、力を込めてぶんぶん手を振っていた。

「ドックウー！ おひさあー！」

「おおー、やっぱりお前も仲間になったのか！ 最初電話で聞いたときはまさかと思っただぜ！」

ドックはますます豪快に笑った。

「テルシオがお前の所に泣きついて『どうか力を貸してください』なんて頼みにくるなんてな！ こりゃあ相当せっぱつまっていると思っただが、お前もよく決心したもんだ！」

「愛よ、愛！　それが愛なの！」

こいつだった。しかも微妙に誤解を招いているじゃないか。くそう、未来が俺から遠ざかっていくみたいだ。俺は不意に襲ってきた立ちくらみをこらえて、早速ドックを勧誘した。

「聞いているなら話が早い、お前も乗るか？」

正確には、まだ俺の仕事仲間とは○人だった。こいつらは依頼者と電話番号。ドックが俺の相棒になってくれなければ、俺ひとりで標的と一対一の対決をする事態に陥っていたところだ。

が、俺はこいつが仲間にならなかったときの心配なんてあえてしていなかった。

こいつなら絶対に参加すると思って最後にしていたんだ。なんせ奴は常に危険と隣り合わせのスリルを求めている変人だったからだ。良薬口に苦しみが座右の銘の男だ。体に悪い物が好物で、退屈な日常には常に危険のスパイスが欠かせないとコマーシャルのように繰り返す奴だ。

ドックはタバコの煙をくゆらせて、ひっひつと引きつるような笑い声を上げ、予想通り快い返事をくれた。

「いつ俺に声をかけてくれるか、待ってたところだぜええ！」

アオオオンと狼のような遠吠えをすると、ディーング湾一帯の犬達がそれにあわせて遠吠えをはじめめる。頼もしい限りだ。

だが、依頼者のローロを見ると、どこか怪訝そうな目つきをして俺に訴えていた。

「イリオーノ（獣人）を仲間にするのですか？」

「イリオーノって？」

「私の騎士として相応しくありませんわ」

ローロは拗ねたように言った。

あ、そうだ。すっかり忘れていたが、アーディナルの中東部では、獣の姿をしたバーリオに対する偏見が結構あったんだ。

なんせ昔はほとんど魔物と同じようにしか考えられていなかった種族だったからな。

けれども世界大戦の時に連合軍に参加した彼らは、そのぶん帝国軍との戦いに於いて最も頼もしい戦力となった。身体能力が桁外れなのは言うまでもなく、バーリオの神官は未だに原理が解明できない高度な回復魔法まで使えたらしい。

それにけっこう仲間意識の強い奴らで、世界大戦が終わってからもどんだん東部に移住してきて、今ではこうして四大民族の中で一番頻繁に見かける種族となっていた。

しかし弱った。俺らみたいな戦後生まれは連中が居る環境にもう慣れっこだったが、バーリオと付き合う機会の少ない上流階級には、彼らに対する偏見がまだ根強く残っていたりするんだ。ここはなんとかロー口を説得しないと、彼女の一存で最強の仲間がパーティ編成から外されてしまうことも有りうる。

俺がなんとか上手い説得方法を考えていると、さきほどまで脇にいたはずのスタイがいつの間にか八角形の機械の上によじ登っていた。ドックの腕を抱えて引き摺り下ろし、さらに俺の腕とドックの腕と一緒に脇に抱えて、口をへの字に曲げてロー口を睨み返していた。

そうやって無言の圧力をかけ続けていると、ロー口は諦めたように肩をすぼめた。どうやらロー口はこの手の女が苦手な様子だった。「分かりました、お好きになさってください」

やった。こいつを仲間に入れてよかったと、はじめてそう思った瞬間だった。

しかし、俺がこの三人でパーティを組んでしまったことを後悔し始めるのに、さほど時間はかからなかった。

俺はほどなくして、暴走する二人の変人に振り回されることになるのである。

*

話は冒頭に戻る。俺とドックを乗せた船は、右も左も分からない

ダウntaxウンの曲がりくねった細道を、信じがたい超快速で突っ走っていった。

パイプや煙突の群れをかいくぐり、このまま異次元にワープしてしまってもおかしくはないくらいに加速し続けて、浮力管がカーブで時おり火花を噴くのを見た。というか、すでに異次元だと言われてもなんら不思議はなかった。だって重力は普通、俺達の住んでいる星に向かって働くもんじゃないか？

身体はぐるぐると前後左右に重心を変えて、突然上下が入れ替わったりもした。がっはっはとドックの笑う声だけが耳にひびいて、俺はこいつと船に乗っているんだという事実だけが俺の意識を現実世界に繋ぎとめていた。

そして、あるとき突然、俺たちの船は建物の隙間から真っ暗な海岸に飛び出た。

どこをどう通ってジペンゼまで戻ってきたのか、ゴミ溜めのような波打ち際は、ちょうどデュルス岬の麓だった。岸辺を埋め尽くしている大小様々な船の残骸は、絶好の隠れ蓑だった。俺達の船はタンカーの腹に空いた錆びた大穴に飛び込んだ。

鯨の骨みたいに船を支える鉄筋や、それにひつついた雑魚みたいなガラクタが散らばった船内に、あらかじめ船の着地できる場所が空けてある。俺達の船は磁石が吸い寄せられる時のような予定された軌道を描いてそこに着地する。ドックはすばやく動力を切って、耳をぴんと立てて周囲の気配を探っていた。俺は息も絶え絶えで、周囲を警戒するどころではなかった。

どうやら追っ手を振り切ったらしい俺達は、船をそこに置いて夜のジペンゼに堂々と凱旋した。

クプール内海が緩やかにぶつかり合う波の音を立て、岬の灯台が温かい光を三筋も五筋も放っていた。ドックは俺の前でふさふさの尻尾をご機嫌に振りつつ、波打ち際を踊るように歩きながら、アドレナリン全開の酔っ払いのように笑っていた。

「がっはっはー！ 見たか、あいつらの慌てぶりを！ わざわざ知

り合いを夜更けに叩き起こして、新作ミュータントを用意してもらった甲斐があつたぜ！」

「一体なに作つてんだお前の友達！ てか、見るよこの服、へもいよだれがついたじゃねえか！」

革ジャンにべつとりついた毒々しい液体は異臭を放っていて、海水で洗つても臭いは落ちそうになかった。くそう、こりやもう使えそうにないな。

ドックの自作の船もオープンカーだったせいでその被害を免れてはいなかったが、彼はまったく意に介さない様子で、ますます高らかに吠え声を上げるのだった。

「俺が今作っているものを知ったらお前はさぞぶっ飛ぶだろうな！ 今度の飛空艇レースを楽しみにしてな！ おお麗しのジペンゼ！ ドラゴンの上顎！ まったく、同情するぜ、こうしてお前たちはこの俺様を生かしておくという、史上最大の不幸に見舞われたのだ！」

ガルルと唸り声を上げて、岩陰に潜む心の臆病な生き物達をおびえさせていた。

知らないうちに笑いがこみ上げてきた。やっぱり、なんだかんだ言つてこいつらは魔物の一種なのかもしれないな。いや、マジで。今の俺の相棒には、これほど相応しい奴は居ないや。

*

最初の作戦、《オペラ会館襲撃》に失敗した俺たち悪党四人組は、裏通りの秘密の地下室にある薄暗いアジトにこもり、唯一の光源である白色電灯の下で頭を突き合わせていた。

憲兵団は街の治安維持のために働くだけでなく、何かの行事が行われるときに政府要人の護衛として駆り出されたりもする。

コルバーニ主席のオペラ鑑賞会に同席するはずだった大佐の行動予定は、予期せぬ予定変更によって使えなくなってしまった。だが、

これが予期せぬ変更となったのは向こう側にとっても同じ事だ。

「チャンスだ。すぐに次の作戦に取り掛かる」

暗がりの中から、四人の目が俺をじっと見つめていた。ひときわ大きな目を瞬かせたスタイが俺に尋ねた。

「どうするの？」

「まずはコルバー二主席の動きを探る。コルバー二主席が動けば、憲兵団も必ずそれにあわせて動くはずだ。スーは他に何か言っていないか？」

ドックにたずねると、彼は牙をぎらつかせてにやりとわらった。

「明日の音楽会の代わりに、急病になった王女様のお見舞いをするらしいぜ」

「最高だ」

口の端をほんの数ミリ吊り上げて、俺もまたにやりと笑った。

連合国間の結束をアピールするためには仕方のない処置だったのだろうが、安全管理の立場からするとまず落第点だ。

組織が大きくなればなるほど、こういった急な変動が命取りになってくる。パレードの最中に象の向きを百八十度かえるようなものだ。末端は行列の動きにあわせる事に必死で他のことに気がまわらなくなり、指揮官は同様に象の動き以外の小さなところまで目が行き届かなくなる。

必ずそこに、他人がパレードに潜り込む隙が生まれる。少人数の俺達にとつては絶好の狙い目だ。

机の上に周辺地図を広げて、迎賓館に赤いバツ印をつけた。地区名を見てドックは唸り声を上げた。

「《アエーラ区》か。ここからじゃ遠すぎる。もっと近くに拠点を移動できないか？」

「調べておいたが、区画内の全てのホテルで予約が取れなくなっていた。どうやらさっきの俺たちの襲撃で、憲兵達が警戒を強めているらしい」

前回のような狙撃も無理だ、迎賓館の近くでは、武器を持ち込む

事も難しいだろう。

にやにや笑いかわしている俺たちに、ローロの失望の混じった声が響いた。

「では、諦めるのですか？」

「冗談はよしな」そしてドックはいつもの台詞を言った。「退屈な日常には常に危険のスパイスが欠かせない」

「同意だ」俺は即断した。「直接対決に持ち込む」

大佐の動きを予測しつつ、地図上に必要な情報を書き込んでいくと、迎賓館の周辺はあつという間に真っ赤に染まっていった。

どうにかして大佐に接近する隙を探らなければならない、注目したのは駐車場だ。

「コルベール二主席と補佐官が迎賓館に見舞いに行くなら、同席する予定だった大佐も共に姿を現すはずだ。ところが、迎賓館の駐車場はさほどキャパシティーがない。車は玄関先に大佐を置いたら、そのまま外の駐車場に停められるはずだ」

地図上のめばしい駐車場に丸印をつけ、メンバーの行動予定と時間が書かれた付箋をぺたりぺたりと地図上に貼り付けていった。

「俺が合図するまで、ドックは二つ離れた駐車場に待機していきな。迎賓館から西の駐車場までたどり着くには、オル宮殿脇の噴水を横切る事になる。スタイと俺が組んで、そこに張り込んでおく」

スタイは十ルクスくらい目の輝きを増加させて、ぴょんぴょん飛び跳ねた。

「きゃあーっ！ テルシオと張り込みいー！ デートだあー！」

「デートじゃない、ちゃんと最後まで聞いてろ。車に盗聴器を仕掛けて、大佐の宿泊先を突き止めて、それからがお前の出番なんだからな」

スタイは俺の顔をじいつと見つめながら、熱っぽい顔でうんうん頷いていた。意識はどこか遠くに行っているらしく、焼け石に水のようにだった。だめだこりゃ。

作戦を一通り決めてしまうと、ローロはじつと作戦図を見下ろして、何か考え込んでいる。また何か口を挟むつもりだろうかと思っ
て身構えていると、彼女はこんな事を言った。

「私の護衛は誰がしてくださるのかしら？」

俺はほつと息をついた。なんだ、そんなことか。俺は興奮気味の
スタイに抱きつかれてもっふもっふされているバーリオの男を指差
した。スタイがもふもふした女だったらドックも喜んでいたかもし
れないが、アーディオ（アーディナル人）はぶにぶにして熱いから
苦手だそうだ。ちょっと迷惑そうな顔をしていた。

けれども、ローロはまだバーリオに慣れていないらしい。ドックと
二人きりと聞いて複雑な表情を浮かべていたので、言ってやった。

「安心しなつて、この中で一番頼りになる男だよ」

ドックの仲間に関しては未知数だが、この男の危険回避能力だけ
は保障できる。先ほど俺も身をもつて味わったばかりだ。護衛をす
る時もきつちりと役目を果たしてくれるだろう。

けれどもローロは、俺が思っているのとは少し違うことを心配し
ているらしかった。

「私も、その現場の近くにいないてはならないということですか」

「あ……いや、まあ、そういう事になるけど」

鼻づらを叩かれたような心持ちで、俺は地図を見下ろした。当た
り前の事だったが、現場の近くにいれば危険が及んでしまう。ギル
ドで匿ってもらった方がはるかに安全だったかな。

今まで当たり前前みたいに俺にくつついてきたので、当たり前みた
いに側に置いてしまっていたんだが。さすがに今回は危険すぎたか
そう思っ慌てて訂正しかけたが、ローロが何か憂鬱そうに大き
なバツ印を見つめているのを見て、思いとどまった。

他の二人も依頼主の言葉を待っていると、ローロは首を振って、
深く息をついた。ようやく決意した様子で言った。

「分かりました。それで行きましょう」

このようにして俺たちの作戦は決定するのだが、物事は常に作戦どおりに運ぶわけではない、という事は理解しておいて貰いたい。

殊に非常事態というものは、いつも本番直前になって発生するものだ。決行の夜になって、スタイは体調を崩して寝込んでしまった。ドックは彼女の額に手を当てて、病名を診断した。

「だめだ、興奮しすぎて知恵熱が出たみたいだ」

「幼稚園児かよ！」

俺がドックの耳を掴んでキレ気味になっていると、スタイは毛布に顔を隠して、目をうるうるさせていた。

「だってえ、楽しみだったんだもん」

おいおい、どれだけ楽しみにしてたんだ。俺は髪をかきむしって、ため息をついた。

「まずいな、もう代わりのメンバーを探してる時間なんてない。俺一人で公園をうろついてちゃ怪しすぎるし、誰かと一緒に居るだけでいいんだが……」

「俺の知り合いに頼めば、女の一人くらいなんとか調達できるぜ」

「駄目だ駄目だ、これ以上関係者を増やしたくない。言い忘れたが無闇にお前の友達を関わらせるな、何をするか分からない怖さがある」

ドックと頭をつき合わせて、今回も未遂に終わりそうな雰囲気をもっていると、隅の方にいたローロが意を決して進み出た。

「待つて、私が行きます」

その力強い言葉に、俺達はつき合わせていた顔を向けた。

彼女の瞳は決然と輝いていた。どうやらこの依頼主には、危険を冒してでも大佐を暗殺しなくてはならない何かがあるらしかった。ふむ、だったらぜひその理由をお聞かせ願いたいものだな。

俺は天井から吊るされた電灯を掴んで、自ら危険な役目を買って出ようという健気なドラゴンを照らした。

「いいのか？ あんたは依頼主だろ」

「構いません、目的さえ果たせば」彼女は目を細めて、言うての

けた。「その代わり、私の身の安全は貴方が保証してくださいませわね」

手を離すと、電灯は振り子のように左右にふれた。やれやれ、また無茶なお願いをされてしまったものだ。俺はしばらく両手を腰にあてがって、答えに間をおいた。だが、本当は考えるふりをしていただけた。俺の答えはもう決まっていた。

「来てくれ、あんたにも手順を教える」

*

いくつかの変更点を加えた作戦は、その日のうちに実行に移された。毛布に包まれているスタイを第二アジトに残し、俺とローロはドックの運転する車で迎賓館のあるアエーラ区へと旅立った。

車から見る大都会の風景は、浮き船から見たときとはまた少し違っていた。

アシンメトリーが基本である魔法使いの塔は、どれも大きさや形が不ぞろいで、夜は延々と続くキャンドルの群れのようなだった。

都心を抜け、やがて遠くにそびえる白鳥城の姿が見えてくると、俺はローロと静かな公園付近で車を降り、ドックはそのまま持ち場に向かった。

占領時代を知らないのと同様、俺はこの城にどんな奴が暮らしていたのかよく分からない。

ミッドスフィア全域で市民革命が起こったのは、もう二百年も昔の事だ。それぞれの領土に君臨していた王城は、その後も取り壊されずに町のシンボルとして利用されていたが、大半が世界大戦で焼失し、残ったものは今では全て公園として一般に開放されている。テン＝デイルコンタル州の白鳥城は消失を免れた例の一つだった。

亡き王妃の為に建てられたというオル宮殿も、白鳥城と共に夜にはライトアップされ、優美な景観を誇っていた。幾何学的な模様も暖かい色合いを呈していて、王妃の優しい人柄を忍ばせた。

まもなく、政府高官たちが迎賓館に集まってくる頃だ。

車が道を通るまでひたすら待つしかない俺とローロは、夜の公園をぶらぶらとさまよい歩いて、微妙な距離の恋人的な雰囲気をも出し出していた。

宮殿の側には大きな噴水があつて、珊瑚のような段差を滝が何条も滑り落ち、浅く広い川になつて敷石の間を流れていた。

俺は遠くに浮かび上がる古城を見つめたり、平たい石を投げて川面を勢いよく進むのを見送ったりして、なるべくお姫様が退屈しないように話しながら敷石をわたっていた。

「ジペンゼがどうしてジペンゼ（上あご）と呼ばれているのか、知ってるか？」

地図で見ると分かるが、この東部は丁度東の海に向かって吠えてる怪物の頭の形をしているんだ。王政時代にモスプッチ伯爵が――ドラゴンの生き残りを探して世界中を旅して、最初の世界地図を作った人だけ――旅の末にこの地形を発見して、そのときに「やれやれ、ようやく見つけたぞ」と肩を落として嘆いたって、嘘かほんとかわからない逸話があるんだ。それがきっかけで、東北部の土地はドラゴンの頭に見立て名前がつけられるようになった。

「ジペンゼ（上顎）」に、「アディングゴ（下顎）」に、「イエメツト（鼻先）」に「ディルコント（角）」。ところが、それが王様の耳に入って不興を買って、モスプッチ伯爵は処刑されちゃった」

ぶしゅっ、と口で言いながら、俺は自分の首を水平に切るしぐさをした。

「モスプッチ伯爵が処刑されたのは見せしめのためだと言われている。そのころの王様はもういろんな権限を貴族に売り渡していて、権威を完全に失いかけていたんだ。東部人は代わりの地名を使うように強制されたが、それでも著名な魔法使いや、クプール内海の船乗り達だけは、岬の事をドラゴンの牙になぞらえて呼び続けたそうだ。

船乗り達の町があつたジペンゼは、市民革命が起こった時に真っ

先に地名を訂正したって話だ。昔から変わり者が多かったんだな。俺達は伯爵の功績を称えて、今でも東部のことを《ドラゴン＝ヘッド》と呼んでいる」

だらだと、そんな取りとめもない話をしながら歩いていると、黙って俺の後ろをついてきていた依頼主は、滝の前で不意に足を止めた。

「どこに行くつもりです」

どうやら勘付いたらしいな。俺は列柱のひとつに手をつけながらぐるりと一回りし、ドラゴンに面と向かって言ってやった。

「どこって？ 迎賓館だよ」

背後のなだらかな丘を指すと、依頼主の視線はじつに冷ややかになった。俺の横顔を滝の細やかな飛沫が撫でていった。

「謀ったのですね」

率直な怒りのこもった口調に、俺は予想していたとばかりに苦笑いを浮かべた。

非常事態というものは、いつも本番直前に起こるものだった。

気づいたのは、本当に直前だったんだ。

いくら政府高官の護衛のためとはいえ、憲兵達が宿泊施設を利用不能にするなんて、よほどの異常事態でなければあり得ないだろうってな。

何かおかしいと思って前日に下見をしてみたが、本当に俺たちの事を警戒しているのなら道路に検問ぐらい張られていそうなものだがそんな様子もない。武器を持った連中を血眼になって探している様子もなく、この公園まですんなりとたどり着いてしまった。

だったら憲兵達は俺たちを警戒して宿泊施設を利用不能にしたんじゃない。そうじゃなくて、客の出入りを一時的に制限していただけなんじゃないかと思っただ。誰かを探すために、区画内の宿泊施設を片っ端から調査していたんだろう、それが誰かと言えば色々あるだろうが、例えば、目の前にいる謎の女とかがいかに怪しそうじゃないか。

ひよつとすると、ちょうど同じころに迎賓館から出てこられなくなった王女様にも関係があるかもしれない。もちろん憶測に過ぎないが、試してみただけの価値はあった。

「あんた確か、俺の名前を聞いたときこう言ってたよな。『いい名前だ』って。実はリゲル大佐も昔、俺に全く同じ事を言ったことがあるんだよ。『いい名前だ』ってな」

依頼主の事情にいちいち首を突っ込まないルールだったが、つい首を突っ込んでしまうのが俺の自然だった。

嫌な趣味で悪いな。けれど無駄な殺しなら説得して諦めさせるに越した事はないだろ。賞金稼ぎをやっていたれば、依頼主の方が悪人だったという場合も沢山あった。本当はこうして直接真偽を確かめるために、スタイに体調を崩した演技をしてもらったんだ。

「あんたとリゲルは、なにか特別な繋がりがあるような気がしたんだ。それに、あいつの所属していた第三歩兵師団は王宮直属の軍隊だ。っていうじゃないか？ これは単なる偶然じゃないよな」

ローロの表情は、とたんに悲しげに曇った。なんだか怒りのやり場を失ってしまったようだった。

そんな顔をする必要はない。俺はまだ暗殺をしないなんて言っていないぜ。

俺だけではあの男がどんな犯罪をしでかしたかまでは掴めなかったから、ここはこいつに直接聞いてみるしかないと思ったんだ。

「教えてくれよ、なんで大佐を暗殺する必要があるんだ？ あの髭オヤジが、あんたに憎まれるような事でしでかしたのか？ ありえない話じゃないな、若い頃は色々女を泣かせていそうなオヤジだからな」

ローロは思いつめたようにまぶたを閉じると、急に射るような目を俺に向けた。

「あの方は、とてつもない嘘つきです。国王陛下に許しがたい嘘をついたのです」

滝の周辺に生ぬるい風が生じた。夜空を流れ星が落ちていった。

じつと話の続きを待ったが、ローロは言い切った感のある表情をして、口をつぐんでいる。あれ？ おかしい、何もこないな。不安になつて、尋ねてみた。

「え、以上？」

依頼主は、はっきりと頷いた。

「ひよつとして、それだけなのか？ それが、あいつの命を狙う理由？」

もう一度、今度はゆっくりかみ締めるように頷いた。どうやら、本当にそれだけだった。

「リゲル」シーライトは伝説の剣を持ち帰った時の様子を、国王陛下の御前で実にまことしやかに報告したと聞きます。私もその報告を聞いて胸を躍らせましたわ。彼こそは英雄の再来、イーサファルトに二百年来とだえていた伝統の復活とさえ思っていたのです」

言葉に反して、ローロの目はさらに冷たく、残酷になつていった。「でもそれはすべて偽りだったのです。あの男の単なる詐欺だったのです。そんなことがあつてなるでしょうか？ たとえどのような状況に陥ろうと、主君に対する忠誠を貫くのが騎士の本分というもの。

ところが、あの男は私どもの信頼を裏切ったのみならず、自らの行いを謝罪することらせず、この東部の地に逃げ込んで今もなおのうと生きている！ 断じて……許せません！

本当の騎士ならば潔く罪を認め、その首に主君の刃を受けるべきです！ それが騎士道というもの！」

あれ？ おいおいおい、ちょっと待てよ。これって一体どういうことだよ。

よし、ここいらでちょっと話を整理してみようじゃないか？

つまり、俺は、隣の国の顔も知らない王様に嘘をついた罪を裁くために、今までの髭オヤジを殺そうと命がけで頑張ってきた。そういう事か？

「陛下に嘘をつくことは、兵士にとって重大な過失です」

目の前の女は、最後にそう締めくくった。ぎゅっと握り締められた拳がわなわなと震えていた。

俺は拳が入りそうなくらいばかり口を開けていた。信じられなかった。この魔石工学の最盛期に、騎士道を熱く語りだす王女様が俺には信じられなかった。いや、俺も人のことをいえたもんじゃないけどさ。

中部のイーサファルトは今なお国王の権力が絶大な国だという。まさか、嘘をついただけで首が飛ぶなんて。なんて恐ろしい国だ。いやいや、問題はそんなところじゃない。なんで、わざわざ俺が暗殺なんて真似まで頼まれなきゃならないんだ。

「さて、さて、さて。さっきの話によると、あんたの国じゃあ、兵士が国王に嘘をついたらそれで死罪なのか？　だったら普通に王様が死罪を言い渡せば、それで済む話なんじゃないのか」

ローロは首を振った。

「いいえ、すでに国外に逃亡した犯罪者を我が国の法で直接裁くことはできません。イーサファルトがアーディナル東軍に訴えかけ、我々の西軍に身柄を引き渡させない限りは無理です」

「だったら、訴えかければいい話じゃないか！　堂々と引き渡すよ　う言えばいいだろう。事情を説明すれば、犯罪者の身柄くらい引き渡してくれるさ、同じ連合国だろ」

普通に考えて、ずいぶん無茶な事を言っているような気がした。果たしてこんな取り引きに応じるのだろうか？　疑問に思ったが、ローロの返答は、その内容にはまったく触れていなかった。

「それが無理なのです。西軍と東軍のパワーバランスの関係があります、大佐の地位を手に入れたあつたあの男の身柄を、こちらに引き渡すはありません」

「ほら、あれだ。国際裁判はどうだ！」俺はなんとか難しい単語をひねり出した。「連合軍が開催する国際裁判で有罪が確定したら、連合の加盟国はその決定に従わなくちゃならない、確かそうだったはず」

「それも無理です」ロー口は首をぶるぶる振った。「原告の王が許してしまわれたのです。私の力では、公式な裁判にはもう持ち込めません」

なに、王様はもう許してるのかよ。

「じゃあお前も許せば」

「いいえ、許しません」

断じて。彼女の気配が再びドラゴンじみてきて、背筋を脂汗がたらりと流れた。

「たとえ王のお許しがあろうと、私はあの男を許しません。私は東部に来るこの機をずっと狙っていたのです。迎賓館を抜け出し、私と共にあの男に制裁を加える頼もしき騎士を探して、ようやく見つけたのがあなたなのです」

おいおい、さっきから聞いてりや、これはつまり、大佐を暗殺したいってのは、単なるこいつのワガママなんじゃないか？ 冗談じゃないぜ！ 俺は今まで、こんな王女様ひとりのワガママに付き合わされていたってのかよ！

何もかもが馬鹿らしくなってきた。今日はもう大佐を暗殺するよな気分じゃねえ。俺は王女様の腕を引っ張って、強引に敷石の上を渡ろうとした。

「言いたいことはそれで終わりか？ もう充分楽しんだら、帰れよ、すぐそこに迎賓館があるんだ！ ほら！」

しかし、ロー口はがしつと足を踏みしめ、そこに踏みとどまった。摩擦面積の少ないはずのハイヒールが、敷石に吸い付いてしまったようにそこに動かなかった。

「私との契約を反故にするおつもりですか？」

そして信じられない力で俺の腕をねじり返してきた。ぎゃああと声に出しそうになった。華奢な手につかまれた腕がぎしぎしと悲鳴を上げ、ひどく残念そうな冷たい目が俺の心臓をぞつとさせた。

俺は影の仕事の恐ろしさをようやく理解した。一度踏み込んだら、二度と後戻りはできない。これが影の仕事！

丁度そのとき、公園に人がやってくる気配を感じた。足音からすると二、三人、憲兵の見回りかもしれない。ちよつとまずいな、このまま直線コースでここまでやってきそうだ。

「ローロ、少し我慢している!」

このままだと目立ちすぎると判断した俺は、咄嗟に彼女の首を抱きかかえた。

「なっ……!」

耳元でローロの驚きに満ちた声が聞こえる。そのまま二人で石柱の影に身を潜めようとした。——ようとした。ローロは一体どんな技を使ったのか、体格で勝る俺を勢いよく背後に弾き飛ばし、次の瞬間には池の中にひっくり返っていた。両腕を高く上げて、虎が威嚇するように俺を睨んだ。

「何をする!」

どうやら英雄の王国の王女は武術もたしなんでおいでのようだった。いつの間にか俺の下腹部を蹴り上げていたらしく、俺は下腹部を押さえて、うめき声を上げながらその辺にうずくまった。

「ちょ、ま、ありえねえっ、いろんな意味でありえねえ、お前っ!」

ともかく、このままでは事態がますます悪い方向に進んでいくのは確かだ。俺は耐えがたきに耐え、忍びがたきを忍びながらなんとか立ち上がって、水を含んで重たくなった足を引きずりながら再度彼女に迫った。

そのとき、俺は背後から誰かに肩を掴まれ、強引に彼女の前から引き剥がされた。おまけに顔面を殴り飛ばされ、がちんと歯がかみ合う音がした。

もついちど派手な音を立てて、俺は池に転がった。どうやら騒ぎを聞きつけてさっきの連中が駆けつけてきたらしかった。ああ、ちくしょう最悪の展開だ。

「こんな夜分おそくに、女性が一人で出歩くのは危ないですよ、お嬢さん」

違う、俺は暴漢じゃねえ。むしろ暴漢なのはその女の方だ。など

と文句を言おうとして起き上がった俺は、相手の顔を見て血の気が引くのを感じた。

メガネもどこかに飛んでいったせいで、少し像がぼやけていたが、そいつは憲兵の緑色の軍服を着ていた。さらに臙脂色のマントに身を包んでいるのは、リゲル「シーライトに間違いなかった。

まもなくお供の憲兵達が駆けつけてきて、威圧するような目で俺を睨みつけてきた。俺は池の中に座り込んだ暴漢の格好をしたまま動けなかった。

リゲルはマントを翻し、自分を盾にするようにローロの肩に手を回していた。

その仕草からはさりげないセクハラをうやむやにってしまうぐらのダンディズムを漂わせており、目の錯覚か二人の周囲だけがキラキラして見えた。

「大丈夫ですか、お嬢さん」

「……え、ええ」

「こんな夜分にお一人で出歩いてはいけませんよ」

ローロはなるべく相手から顔を逸らそうとしているらしい、まるで乙女が恥らいながら頷くようになさってしまった。

リゲルはその顔を間近でじっと見つめて、おやつ、という風に眉をひそめていた。

しまった。こいつらはたぶん、王女様を捜して迎賓館周辺をうろついている最中なんだ。やばい、こんなところで取調べを受けたら、百発百中で正体がばれてしまう。……いや、ばれてもいいんじゃないか？ あいつらがこのままローロを連れて帰って、迎賓館に閉じ込めてくれれば、俺は大佐の暗殺なんてしなくてすむかもしれない。……ああ、でも、もしローロがギルドに任務失敗の事を通告したら、俺は一卷の終わりじゃないか。

俺が赤くなったり青くなったり、やきもきしていると、大佐は突如はっとしたような、なにかを懐かしむような表情を浮かべて、大げさなため息を漏らした。

「じつに美しい目をしておられる……」

リゲル大佐は彼女の正体に何一つ気づいていない様子だった。突然彼女を口説きはじめた。

「おお、目をそむけないください美しいお嬢さんつ。私は貴女から目をそらそうとも逸らせません、貴女その目が私の心に火をつけたのだ！ どのどなたかは存じませんが、もし私に許されるのならば、どうか、どうかそのお顔を今一度よく見せてはくれませんか！」

ローロは大佐から顔を背けようとして、さらに恥らうような格好になってしまった。いや、頬が赤い。ひよつとするとあれは本当に恥らっているのかもしれない。

大佐は様々な美辞麗句を使ってローロを籠絡しようとしていて、周囲の憲兵達もちよつと困り顔だった。変な奴が上司になって、さぞ苦労が耐えないのだろう。大佐になるためにリゲルがどんな詐称能力を発揮したのかは、ここは押して図るしかない。

やれやれ、記者会見で亡き王妃の面影がどうのこうのとのたまっていたのは、ありや、どうやらお得意の嘘っぱちみたいだな。イーサファルトでは王族がテレビに露出する事はまずないから、俺にはローロがどれくらい王妃に似ているのかは分からないが、大佐はそれからたつぷり十分間、気づく気配もなかった。あの様子では俺の顔を覚えているかどうかさえ怪しい。

「なんでもありません、あの人は私の連れでして、ちょっと私が虫に驚いてしまいました……」

「ああ、なんだなんだ、そうだったのですか！」

どうやら王女様はスタイと違って、機転も十分に利く様子だった。リゲル大佐はマントを旗のように翻して、緑毛の豹か熟練のダンサーのようにしなやかに向きを変え、満面の笑みを浮かべて俺に近づく、俺の真上からグローブみたいな大きな手を差し伸べ、きらりと歯を光らせた。

「勘違いしてすまなかった、大丈夫かい？」

こいつ、俺のことを絶対覚えてねえ。俺はふらふらと立ち上がりながら、全身を駆け巡る様々な痛み、歯を食いしばって耐えていた。ああ、なるほどな。ようやく分かった。俺としたことが、気づくのが遅すぎたぐらいだ。どうやらリゲルは今の地位を手に入れて、完璧にのぼせ上がってしまったみたいなんだ。

人は誰でも地位と名誉を手に入れたら性格が変わるもんなのか？ ちくしょう、お前は俺の生涯の目標じゃなかったのかよ。今の俺を形作ったお前が、なんでこんな別人みたいならしのない男に成り下がってしまったんだ？

なんでお前は手帳の余白ページを破いて、さらさらと滞在先のホテルの名前と部屋番号を書いて、そいつを出会ったばかりの見知らぬ女に手渡しているんだ？……！ 少しは警戒しろよ……！ 「なにか私と話したいことがあったら、ここに来てくれたまえ。明日の晩までいる」

にやにや笑いを浮かべつつ、大佐は胸ポケットに手帳を仕舞うと、ふと悲しげに星空を見つめた。

が、どうやらそれは単なる演出だったらしい、ぱつと俺達に向き直って、おもむろに片目をばちんとつぶり、きらんと歯の周りに星を飛ばすお得意の笑みを浮かべてみせた。

そして憲兵たちを両脇に従えて、実に堂々とした、実に大佐らしい足取りで俺たちの前から去っていったのだった。

ロー口は渡されたメモを握り締め、安堵したように息をついた。彼女はしばらく心臓の高鳴りを押さえるように胸に手を沿えていたが、やや落ち着いたところで、不意に顔を上げて俺に言った。

「テルシオ、やりましたわ。大佐の宿泊所が分かりました」

その言葉は、もはや俺の耳には入っていなかった。やべえな、どうやら俺はあいつを暗殺するに足る理由を見つけてしまったようだ。俺は腹の底にふつふつと沸きあがる闘志を感じながら、大佐の大きな背中を見つめていた。

アジトに帰りつくなり、「疲れたのでニブロをして欲しい」と一口は発言した。

「ニブロって何だ」俺たちは顔を見合わせてきょとんとしていた。どうやら王宮のマツサージ法らしいが、そんな高尚なものを全く知らない下町育ちの俺たちのために、彼女はスタイを使ってちゃんと実演して見せてくれた。

椅子を二脚用意して向かい合わせに座る。中間にもう一脚椅子を置いてそれに片足を乗せ、親指で足の裏をぐいぐい押していく。足の長いスタイはそれを異様にくすぐったがって、けたけたと笑っていた。

「ひいーっ、ひいーっ、くすぐったい、ひいーっ！ やめてえーっ！」

見ていて飽きない女だ。ドックは缶ビールで一息ついている俺の隣にやってきて、こっそり尋ねた。

「で、どうするつもりだ」

俺はビールに口をつけて、熱い息を吐いた。

「続行する」

「そうこなくっちゃな」

ドックは嬉しそうに牙をむいた。そういえば、バリリオはアーデイオの何倍もの身体能力を持つ反面、二十年そこそこしか生きられないという。余生とか、将来とか、そんな事を考える必要がない。こいつの頭の中は、たぶん自分の人生を楽しむ事で一杯なんだろう。かつての仲間を殺す為の覚悟なんて、センチメンタルな感情とは無縁な気がした。

けれども、同じ覚悟は俺にももうとつくにできている。俺はビールを飲み干し、缶を握りつぶした。

大佐を殺す。

俺の標的は、もはや俺がかつて知っていたあの男ではなくなつて

いた。俺の中にはギルドの裏切り者を心から憎む気持ちと、連合軍に楯突くとしてもない大犯罪を行おうとしている事に対するぞくぞく感しか残っていなかったんだ。

やがて、一通りニブロの手本を見せ終わったローロは、スタイと場所を入れ替わっていた。

ローロは椅子に座り、裾の下から綺麗な足を差し出した。彼女の足は綺麗なぶん、足の裏に出来た血豆がよけいに目立った。歩き通しだったから当然だが、相当痛かったはずだ。今まで我慢していたのだろうか。あいつが弱音を吐いた記憶は一度もなかった。それだけの決意で迎賓館を抜け出したという事なのだろうか。

その足を前にして、スタイは舌をぺろっと口の端から出し、何やら企み事をするような笑みを浮かべていた。

「うりゃ」

などと言って足に覆いかぶさった。足の裏を押すというより、わざとくすぐるような指の動きをしていた。だが、さすが王女さまは慣れているようだ、何も感じないみたいに平然と構えてそれを見ていた。

逆にくすぐったがっていたのはスタイの方だった。身をぶるぶると震わせ、笑顔を引きつらせて肩をよじっていた。ローロは手を差し伸べた。

「待って、あなたがくすぐったがるのは普通逆ではないかしら？」

「ふえ？」

俺とドックは腹を抱えて爆笑した。

ああ、これから大罪を犯そうとしている俺たちが、本当にこんなに愉快に笑っていても、いいんだろうか？

飛空艇は時に海上を走り、時に空を自由に飛びまわる気の利いた乗り物だった。

隠しカメラの映像が、ややあつて品のあるホテルの廊下を映し出した。画質は良好である。スタイは普段パンプスなど履きなれていないので、トートバックに仕込んでおいたカメラは多少左右にふらふらしていた。大きな西部産の花瓶を押し倒しそうになって慌てたり、エレベータのほんのわずかな隙間に神がかり的に踵が挟まって大衆の面前で転びかけたりしつつ、俺達の視点をどうにかこうにかホテルの上の階まで運んでいた。

『ううゝ歩きづらいよおゝ』

「泣き言をいうな、こっちだって泣きそうなんだ」

俺たちはアジトの奥の一室に立て籠もり、送られてくる映像と音声を投影結晶で確認していた。時おりマイク越しに指示を出したり、くじけそうになるスタイを励ましたりしていた。

「がんばれ、なるべく怪しまれないように歩け。困ったらメモを見ろ」

『五〇一六、五〇一六』

「止まれ、バック、引き返せ。さっき通り過ぎた」

スタイは生まれて初めて来たような大きなホテルの中を行ったり来たりして、どうにかこうにかリゲル大佐が宿泊している部屋を探し当てた。

部屋の前には大柄な番兵がひとり立っていて、先ほどから廊下を行ったり来たりしていた痛い子に涼しげな目を投げかけている。鋼の鎧が絨毯の真っ赤な色を宿して、炎みたいに輝いていた。骨付き肉をばりばり食いそうな頑丈そうな顎に、額には大きな向こう傷、いかにも堅物といった面持ちだ。

対するスタイは黄色のキャミソールを着た天真爛漫な女の子である。臆することなく、むしろスキップをするように近づいていく。いつものにこにこした笑顔で話しかけているのは声で分かった。

「たのもお〜」

番兵の表情筋はぴくりとも動かない。

「リゲル、大佐と、お話がしたいんですけど〜」

「大佐は今お休みにいられています、お引き取りください」

番兵はにべもなく言った。見たとおりのちよつとネジの緩い子なので、不審には思っていないように見えた。

「でもでもお〜、私の友達があ〜、大佐の部屋に來いって、誘われてみたいんですけど〜。急に來られなくなっちゃってえ〜」

彼女が持ち前の明るさで食い下がると、番兵はぐつと顔をしかめた。これはスタイの発言内容を疑ったんじゃないな。この非常事態に女をホテルの部屋に呼び入れたと聞いて、リゲル氏の人格をいくばくか疑ったに違いない。いい気味だ。

おっと、どうやらスタイはここで秘密兵器を投入するつもりらしい。何やらトートバックをごそごそと探って、分厚いハードカバーの本を取り出し、番兵の分厚い胸の前に差し出した。

「実はわたし、大佐の本の大ファンなんです〜。きゃあ〜、言っちゃったあ〜。やだあ〜照れるう〜」

あいつきつと表紙を読むのも辛いぞ。大丈夫か、今回は活動拠点を移動させる時間が取れなかったので、向こうで何かあってもすぐに駆けつける事はできない。

ドックに今から迎えに行ってもらおうか、と思ったが、俺と一緒に部屋にいたのは琥珀色の衣をまとったドラゴンが一匹。居住まいを正して床に座って、食い入るように画面を見つめているだけだった。

そうか、鼻のいいドックにアジトの見張りを任せたんだった。俺は一瞬判断に迷ってしまった。

それにしても、こいつの顔をこんなに間近に見るのは初めてだな。画面の放つ光に青白く照らし出されていて、意識の張り詰めた眼差しが高純度の魔石みたいに光を宿していた。集中する時の癖なのか、形のいい唇はほんの少し開かれています。

綺麗だった。まるで俺と同じ生き物だとは思えないくらいに。

それにしても薄暗い部屋に二人きりか。俺は今の今までこの状況がもつ意味をまるで意識していなかった。あのエロオヤジの部屋にスタイを送り込んで、もし画面の向こうがピンク色の展開になっていたら気まずいどころの話じゃない。もし俺達が賞金稼ぎと依頼主の関係じゃなければ、要するに騎士と姫様の関係じゃなく、ましてや英雄とドラゴンの関係じゃなければ、つまり、ただの男と女だったならば、そして俺がもう少し人間的でもう少しこいつの性格に棘がなかったなら、ここで手ぐらひは握ってやったかもしれない。

そして間違いなく鉄拳が飛んでくるのだろう。それだけは不可避だった。俺は相手の間合いの外にさりげなく移動した、万が一があってもならない。こいつの側では常に騎士らしく振舞うことにしているのもう反射みたいなもんだった。

俺がロー口との距離を調節しているうちに、向こうでは何か進展があつたらしい。見ると、画面いっぱいにおぞましい何かが写りこんでいた。

新品同様の緑の軍服と、その上に整列した浮き彫りの金のボタンだった。視点が徐々に上に動いていって、垂直に立った襟に顎をうずめた髭オヤジの顔を捉える。

憎々しいほどハンサムな顔面に不敵な笑みを浮かべて、本能的にカメラが狙っているのが分かるんじゃないかと思うほどの確なタイミングできちんと歯を光らせた。

出てきたな、リゲル。俺の標的は、今まさにサインペンを片手にスタイから手渡された自分の自伝を受け取っているところだった。

『ははっ、やれやれ、しょうがないなあ。また私のファンが来たって？』

くそっ、そこだけかいつまんで話したら、まるでお前の追っかけが来たみたいじゃないか。まず問題なのは、部屋番を教えたのがお前だということだ。そうスタイに言わせてやりたくなかったが、隣の番兵がますます眉をひそめてリゲル氏を見るだけで、まったくもっ

て無駄なエネルギーに違いなかった。俺は狙撃手の癖で深呼吸して、ふたたび画面を睨んだ。

俺の標的は手馴れた様子で本にサインを書き込んでいた。それはもう実に手馴れた様子だった。何百回と書いてきたような手つきだった。いつ練習したんだ。本が返されると、スタイはそれを両手で受け取り、もじもじしながら言った。

『あの、あのあのあつ、大事な大事なお話があるんですけど……中に、入っても、よろしいでしょうか？』

対する髭オヤジはきりりと目を光らせ、探るような視線を向けてきた。

俺ならこんな怪しい訪問者、まず疑ってかかる。こいつが伝説の賞金稼ぎならなおさらだ。油断すると、背後にいる俺たちの存在もたちまち嗅ぎ取ってしまうことだろう。

ここからが化かし合いだ。さて、どう出る、リゲル。

大佐は注意深いまなざしをこちらに向けたまま、大胆にも、ドアを用心深く開いてスタイを中に招き入れた。

『話だけでも聞こうか』

『あ、ありがとうございますう』

スタイはウサギのようにぴょこんと中に跳び入った。さあ、いよいよ敵陣の中だ。隠しカメラはドアが閉じられる瞬間、俺達の標的の背中を的確に捉えていた。そしてそのときの大佐の表情を俺達は見逃さなかった。

満面の笑みをたたえており、思いつきりガッツポーズなんかしちやったりしている。これから俺たちとの勝負に挑もうとする気迫に満ちている様子などみじんもない。

魂が抜けたみたいになんとしている俺の隣で、ローロが呟く声が聞こえた。

「侵入に成功したわ」

「ああ……」俺は思いつきり脱力しそうになった。ありえない。本当にあのオヤジがりゲル＝シーライト本人なのか？

＊

俺が言つのもなんだが、今日のスタイは一段と綺麗だった。足の長さが強調される明るい色のキャミソールを身に着け、べっ甲の髪留めには盗聴器が仕込んであった。

鼻の下を伸ばした大佐が奥からティーカップとソーサーを二つずつ持ってくるまで、さほど時間はかからなかった。

『ふふふ、君のような熱心な読者がいてくれると、私も労を惜しまず書いた甲斐があるというものだ』

大佐はご満悦だった。スタイは本当に大佐の本のファンだったらしい。本の内容を一字一句覚えていて、俺が覚えていない場面を覚えていて、俺が笑ったところで泣いていた。俺達が指示を出す必要もなく、順調に楽しく会話を進めていた。

トートバッグは椅子の上に置かれていて、隠しカメラの映像は机の表面辺りを低い位置から映し出している。大佐は画面の手前に片方のカップを置き、もう片方のカップに口をつけながら、向かい側の椅子に腰掛けた。

『こんな所では大した持て成しもできないが、わざわざ来てくれたのだからお茶ぐらい飲んでいってくれ』

『わあゝ、ありがとうございますっ』

『気にする事はない、ホテルの備品だから』

付け爪をつけたスタイの手がティーカップを取った。実に和やかなムードの対談だったが、本来の任務を忘れてはいないか、心配になって呼びかけてみた。

「分かってるな、スタイ。あまり長居はできないぞ。なんとか明日の予定を聞き出すんだ。面倒なら上着を脱がせて、手帳でもなんでも手に入れろ」

スタイは返事をする代わりに盗聴器をとんとんと二回つついた。恐らく、髪をかきあげる仕草をしながら。俺たちとの交信手段はど

うやら忘れていないようだ。さらに自然な仕草でカップを置き、背筋のぞくぞくするような甘える声で言った。

『あ、あのぉ、もしお疲れでしたらぁ、寝る前にわたしがマッサージをして差し上げましょうかぁ？』

大佐は茶を吹いてむせ返った。うまいぞ、スタイ。あのオヤジがあんなに慌てる顔を見るのは初めてだ。

『いや、ま、ちょ、待ってくれ』

『私、こう見えても得意なんですよぉ』

スタイは猫のようにしなやかな仕草で大佐に接近していった。輝いている。今日のスタイは輝いている。いまだかつてないスムーズな作戦の進行に、俺は感動さえ覚えた。スタイはにこにこして両手の指を扇子のように広げて組み合わせ、さらに畳み掛けるように言った。

『ああ、つ、そういえば、大佐は中部出身でしたねえ』

『う、うむ』

『中部人の友達がニブロっていうマッサージを教えてくれたんでえ。今日はそれをやってみましょうかぁ』

『う、うむ、そうか。懐かしいな。じゃあ、よろしく頼むよ』

スタイはさつそく大佐の向かい側に椅子を二つ並べた。靴を脱いだ大佐は心得た様子で片足を椅子の上に乗せた。スタイが大佐の大きな足の前にちょこんと座り、準備は整った。さつそくマッサージに取り掛かったスタイは、途中で何かに気づいた様子で、はっとして目が点になり、硬直して動かなくなった。

なにかこう、積み木を途中で積み間違えてしまったような嫌な空気が漂っていた。俺はスタイの犯してしまった間違いがなんであるかにすぐに気づいたが、あえて口には出さないでいた。今のスタイにはきつと「ふふふ、それは計算の内よ」と言い出すに違いないと思わせるほどの輝きがあったからだ。

「テルシオ、あのマッサージ法では大佐の上着を脱がせられないわ」
ロー口が横からささずそれを指摘したが、それでも俺はまだス

タイを信じていた。大丈夫だよな、スタイ？　今のお前はそんなにっ娘じゃないよな？

だが、やがて通信機をトントン、トントン、トントン、と何度も叩く音が聞こえてきた。スタイは必死に助けを求めている。

俺は軽くめまいを覚えた。一体どういう星の元に生まれればこんなドジになれるんだろうか。

「落ち着け、スタイ。こうなったらもう一通りマッサージをやってしまえ。その間に次に会う約束を取り付けろ」

「う、うん……」

動揺したせいか、素で返事された。俺とローロは内心びくびくしつつ、食い入るように画面を覗き込んでいた。

「明日もお仕事忙しいんですかあ〜？」

持ち前の元気はどこへやら、スタイの声は心なしかしおれていた。スタイが親指に力を込めて足の裏を押すと、大佐は苦痛に顔をゆがめた。どうやら人によって反応が様々に異なるみたいだった。

「ああ。朝から晩まで、隙間なくスケジュールが埋まっているよ。うう……もちろん、『公務』でね」

リゲルは顔をしかめて『公務』の言葉を強調した。確かに賞金稼ぎの頃の自由さと較べれば、自由になる時間なんて雀の涙ほどに違いない。スタイはマッサージを続けながら、ぐすと鼻をすすった。『また会いたいですけど、駄目ですかあ〜？　この前お会いした友達も、すっごく楽しみにしてたんですけどお〜』

そのとき、リゲルの目が一瞬鋭く光ったような気がした。苦しみにひきつっていた両頬が急に引き締まり、切れるような真剣な顔つきになって上半身を起こした。

「待て、止める」

彼は声のトーンを落とし、強い口調でスタイに迫った。

まずい、さすがに怪しまれたか。……と思っていると、俺の標的はおもむろに胸ポケットから手帳を取り出し、ぱらぱらとめくって翌日以降の予定を確認し始めた。このダメ大佐め。

こいつはどうやらローロに痛くご執心のようだ。いや、確かに、彼女は大佐が気になってしまっただけの美人かもしれない、いや、けれどもスタイだって、いや、何を考えているんだ俺は。いやいや、とにかく、依頼主をもう一度あいつに会わせるのは危険すぎる。それだけは絶対に無理だ。

確認するようにローロを見やると、彼女は何か驚くべき事実を発見したように、じっと画面の方を見つめていた。緊張で軽く開いた口から、タイミングを見計らうようにこの言葉がこぼれた。

「スタイ、握り拳をつくって、さっきの場所を押してみて」

『ふええ〜?』

「強く、もつと」

スタイは気の抜けた返事をして、土踏まずあたりを握りこぶしでぐりぐりと押した。するとリゲル大佐は足に電気が走ったように跳ね上がり、軽く悲鳴をあげた。

『ぎゃあっ! いっ、いたいっ! それはっ! きくう!』

肝臓を悪くしているみたいね。ローロは呟いた。どれほど痛いのかは分からない、大佐は手帳を手放して机の上に置き、前のめりになって足をかばうように手を伸ばしていた。

ああ、さすが俺のドラゴン。まるでお互いに心が通じ合ったみたいだった。瞬間的にその意図を理解した俺は、次の瞬間にはこう言っていた。

「スタイ、いまだ、紅茶をこぼせ」

スタイは、言われたとおり大佐のティーカップに手を伸ばし、紅茶をひっくりかえした。俺の指示があまり親切ではなかったせいで、取っ手を掴んで中身を机に注ぐという、あからさまに怪しい挙動になっちゃったが。

うす茶色の液体が机の上面に広がっていった。

『あっ……きやああっ、ご、ごめんなさいい〜!』

スタイはマッサージを中断して、大慌てで立ち上がった。

やった、どうやらスタイにもこちらの意図が通じたようだ。彼女

は机の上のものをどける振りをして、そのついでに机の上から手帳を自然な仕草で拾い上げていた。

よし、手に入れた。手に入れた――まではよかった。なぜかスタイはそこにぼんやりとつつ立ったまま、偶然開かれたページをじいっと見つめていた。

ガン見してどうする！ 何をやっているんだ。内容を確かめるのは後でいいだろ。やきもきしていると、スタイは眉をしかめて、んん？ と唸り、そのページに鼻をくつつけた。

『……あれれ？ 読めないんですけど、なんて書いてあるんですか、これ』

大佐に、聞いて、しまった！ スタイの予想を遥かに超える絶望的な行動に、俺とロー口の心臓は臨界点を突破していた。しかし、大佐はそんな珍妙なスタイの様子を見て、さも当然といった風になににこと笑っていた。

『ああ、イーサファルトの文字なんだ。読めないだろ』

ようやく向こうの状況が掴めて、俺ははっと我に返った。イーサファルトの文字だって。そう言えば、中部では聖書にも使われる《正字体》と呼ばれる古代文字が一部の地域で今もなお使用されていると聞いたことがあった。東部で一般的に使われているのは《繁字体》と呼ばれる、それをさらに崩して使いやすくしたものだ。

さすがに俺も正字体は読めなかったが、同じイーサファルト出身のロー口なら読めるかもしれないと思いつき、咄嗟に確認を取ろうとした。

「ロー口、読め……？」

丁度そのとき、まさに、その瞬間だった、俺の頭のすぐ後ろで何か嫌な音がした。

それは、いつ聞いても慣れる事のない音の二つ目、鉄製の凶器が人に向けられる時の、がちやりという冷酷な音だった。

俺はロー口と顔を見合わせたまま、その場に固まっていた。ロー口は口を丸く開いて、形のきれいな犬歯をのぞかせていた。恐らく、

彼女の目にも俺と同じものが映っているはずだ。

そうだ、俺たちは二人揃って頭に銃をつきつけられていた。まさか、こんなバカな事が。信じたくはないが、どうやら、いつの間にかアジトに敵が侵入していたみたいだ。ドックの見張りがかいくぐられるなんて。ちくしょう、あいつ辛いものばっか食べて、鼻が利かなくなっただんじやないか。

「くくく、こそこそ何をシークレットにしているのかと思えば、女とアジトにしけこんで鑑賞会か。妬けるねえユー・ノウ」

おいおい、嘘だろ。しかも、この耳障りな台詞は。あいつしかない。ルオー＝ブルドルート＝バクバ。見渡すと、俺の背後にはやたらと体格のいい賞金稼ぎたちがぞろぞろ群れていて、その真ん中にひとときわ背の低い矮小な男がいた。ちくしょう、やっぱりバクバ一味だ。こんな時に……！

奴はにやつきながら、割れた唇を舐めて言った。

「お前の言っていたビック・ビジネスってのはこれのことか、ボーイ？」

「……………何の用だ」

俺が睨みつけると、バクバは鎖に繋がれた狂犬が吠えるのを見るように、けたけたと笑って葉巻を吸った。

「言っただろ、俺の方もビック・ビジネスが入ったんだってよ、サンキュー」

そう言ったバクバの目は、獲物を狩る獵犬のように投影結晶の画面に向けられていた。画面の中で、スタイはこちらの様子にまるで気づかず、大佐とお喋りを続けている。

『……………そうだな、どうしても私に会いたいと言うなら、明日の正午きっかりにカイゼル空港わきの埠頭に来てくれ』

大佐は外の番兵を警戒しているのか、内緒話をするように声を潜めていた。

『一分もいられないかもしれないので、時間厳守で頼む。直前にこっそり車を寄せよう。くれぐれも、他の人には秘密にしておいてく

れ』

『きゃあぁ〜っ！ 大佐、大好きい〜！』

これはまたとないチャンスだ。思わぬ大きな成果を引き出して、スタイは大はしゃぎだった。ああ、まったく、本当についてない。どうやらローロとまったく同じ事をバクバー一味に依頼していた奴が居たらしいんだ。

一部始終を見ていたバクバが邪悪な笑みを浮かべて、画面に煙を吹きかけている。

「俺の仕事もリゲル」シーライトの暗殺だ。残念だが、お前らにはこの仕事から降りてもらうぜベリー・ソーリー」

俺は肩を落とした。折角ここまでこぎつけたって言うのに。ローロも顔をゆがめ、足が届けば蹴り飛ばしそうな顔をして、バクバの配下に掴まれている腕を振り解こうともがいていた。腕力ではどう頑張ったって敵いそうにない。

背の低いバクバが俺の前を通り過ぎると、甘ったるい煙が顔の前に漂った。

「ドゥー・イット（やれ）」

俺の隣にいた大男が、鉄パイプをぶるんと振るって俺の腕を叩き潰した。俺は腕を押さえてうめき声を上げた。ローロが軽く悲鳴をもらった。俺は冷たい床にうずくまった。ちくしょう、こいつら俺の大事な商売道具を傷つける気か？

「いいのかよ、俺から借金を取り立てられなくなっても……！ まだ期限はあんだらうが……！」

バクバは何の感慨も沸かない様子で、葉巻を右に左に振った。

「どの道もうゲームオーバーだ。お前にはここでブレイクしてもらう、ゲリット？」

やばい、こいつは本気だ。そう悟った時、俺はマイクに向かって叫んでいた。

「スタイ、アジトに憲兵を呼べ！」

大男が舌打ちをし、再び鉄パイプを振るった。こめかみに熱を持

った痛みが走った。今のはかなり効いた。メガネが割れて片耳にぶら下がり、目の前の風景がぐらりと歪んだ。

なんとか立っていられる、と思ったが、体の方が言うことを聞かなかった。強い衝撃があつて、俺は床に倒れた。

骨まで揺さぶられるような容赦のない衝撃が、続けざまに腕や背中を打ち付けてくる。アジトの中を荒らしまわる音が聞こえた。

スタイが泣きそうになって俺に呼びかけてきた。

「ターチ！ どうしたの、ターチ！ ターチ！」

ぼやける視界で映像を見ると、どうやらスタイは大佐の部屋から逃げ出してしまったらしい。ホテルの廊下を走りながら、ひたすら俺の名前を呼び続けていた。ああ、駄目か。どうやら憲兵に助けてもらおうという考えはないみたいだな。まったく、最後まで俺の期待を裏切ってくれる奴だ。

「ふん。この辺で引き上げだ。とつと俺様のレジェンドをおっばじめようぜユー・ガイズ！」

俺は胸倉を掴みあげられて、空き缶みたいに壁に放り投げられた。背中を打ち付けてそのまま座り込むと、ズボンやシャツが血でぐっしりしていた。ようやく開放されたロー口は、そいつらから俺の身をかばうようにして抱きついてきた。声を振り絞って泣いていた。まったく、人を殺そうって奴がこの程度で泣くなよ。

しばらくそのままでいるうちに、俺は意識を失っていたようだ。

気がつくと、ドックがそこにいた。

どうやらまだアジトの中にいるみたいだ。感覚が麻痺していて、どこが殴られていてどこが殴られていないのか、はつきりしない。「ドック、俺の腕は無事か？」

笑っちゃう話だが、俺は自分の命より真っ先に商売道具の無事を確認した。ドックはにこりともせずにした。

「二本とも無事だよ、奇跡的に。三本目と四本目は死んだ」

三本目と四本目の腕。見ると、白と黒の銃がへし折られ、折りた

たまれるような格好で壁際に捨てられていた。

狙撃銃のサイクロプスに、リゲルから勝手に受け継いだ白銀のシヨットガン、ヴェガだった。まるで俺の腕の身代わりになってくれたみたいだった。やれやれ、もったいない。

ドックは腹立たしげに牙を剥き、包帯を巻く腕にさらに力を込めた。

「くそつ、罠だと思ったぜ。前の道をもふもふした女が通り過ぎたんだよ！俺はそももふ度合いを確かめるべく追跡調査を敢行したんだ、そうしたらそももふもふ……」

「わかった、わかったからもう聞きたくない」

こいつは俺たちアーディオに興味がないだけで、じつはかなりの女好きなのだった。しかし、まさかそこまで俺たちの情報が掴まれているとは。やはりバクバー味の情報収集能力は侮れなかった。

ローロが俺の胸にしがみついてきて、俺の胸で小さく震えていた。やれやれ、俺のために泣くなよ。お前が無事だったんだからそれでいいよ。そういや、こんな時は平気な顔を見せてやるもんだって、あいつは言ってたっけな。俺は苦笑いを浮かべてやった。

「悪い、みつともない所を見せてしまったみたいだな」

「いいえ、とんでもない、感動しました！」

顔を上げたローロは、なにやら頬を上気させ、目を輝かせていた。「あなたは主君である私を敵から護ろうと、自分の身を犠牲にしてくださいですね。あなたは素晴らしい！騎士というものは、やはりこうでなくてはいいけません！」

俺は笑った。騎士道を夢見るお姫様らしいや。

だがそのとき、アジトに邪悪な影がひとつ飛び込んできて、俺たちの表情から笑顔を奪い去った。そいつはローロや治療中のドックを押しのけて俺に飛びつき、長い手足を絡ませて身動きを取れなくし、さらに至近距離で超音波攻撃を放った。

「ぴいぎゃあああああああつ！ たあーちい……！」

後頭部をしたたかぶつけて、せっかく戻ってきた意識が再び遠の

きかけた。ドックの治療があと数分遅れていたら、冗談抜きでヤバかったかもしれない。とりあえず邪悪な影、スタイを両肩を掴んで引き剥がすと、鼻水が俺の肩からべっとりと糸をひいた。ああ、もうこの革ジャンも捨てなきゃな。

「スタイ、なんで戻って来たんだ。ここが危ないのは分かってるだろ」

スタイは、俺のジャケットよりもひどいことになった顔をぐしぐしとこすっていた。あんまり擦りすぎて真っ赤になっていた。

「ひぐうっ、だっ、だっ、だっ。私、ここ以外に行く場所なんてないよお、だっ、もう二度と戻れない道なんですよ……」

まったく、本当にどうしようもない奴だな。俺は無事だった二本の商売道具で、スタイをきつく抱きしめてやった。こいつは、どこまでも俺の予想を裏切ってくれる奴だ。

ローロは息を吞んで顔を真っ赤にして、ドックはふひゅうとへたくそな口笛を吹いた。肺を締め付けられたスタイの声は、一オクターブくらい高くなっていた。

「た、ターチ……。どうしたの？ あんたからハグしてくれるのは嬉しいけど、ローロちゃんあんまり免疫ないみたいだからここではちよつとまずいかも……」

ふむ、妙に冷静で的確な主張だな。お堅い中部では男女が人前で抱擁するのは珍しいらしい、何やら不機嫌そうに唇をとがらせて俺を睨んでいた。どうやら彼女の理想とする騎士がしていい行為じゃなかったみたいだ。俺は彼女に向かって、口の端を数センチ持ち上げて精一杯の笑みを見せ、騎士っぽい一言を言っただけだ。

「まだだ。まだやれる。俺たちの契約はぜんぜん終わっちゃいないぜ、ローロ」

*

スタイは、それから作戦室に籠りきりになり、アパートから持つ

てきた落書き帳に黙々と字を書き始めた。それまで白紙だった厚紙が、見たこともない中部の文字によって埋められてゆく。そのさまをローロが後ろから興味深そうに覗き込んでいた。

「あなたも中部の文字を知っているのですか？」

「知らない」

「？」

ローロには不思議だろうな。スタイには目で見た映像を瞬間的に記憶してしまう能力があるんだ。旅先の風景もこうしていちいち覚えていて、家に帰って細部まで思い出しながら描くそうだ。

文字の意味は理解できなくても、その図形は写真のようにきつちりと覚えている。やがて瞬間記憶した大佐の予定表が書きあがると、スタイは満足げにそれを高く掲げて見せた。

「できたあーっ！」

「よし、いい子だ！」

「へへえー。もつと褒めてえー」

俺は痛いというまで頭をわしわしと撫でてやった。筆跡も、誤字を訂正した部分もそっくりそのまま書き写してある。完璧だった。後はバクバ達に奪われた正午きつかりの待ち合わせよりも先に、どうにか標的と接触するだけだ。

この中でゆいっイーサファルトの文字が読めるローロは、予定表を端から端までじっくり眺めていたが、やがて眉を八の字に曲げた。

「……予定に隙がありませんわね。ホテルからは朝六時に出て、午前中は各官僚に帰還のあいさつ回りをする予定があります。それから空いた時間で軍関係施設の視察。十二時発の飛行機に乗って憲兵局に帰るとすぐに会議に出席して、引き続き夜まで公務になっています。他の日もだいたい似たようなものですわ」

これでは、お体も悪くするはずですね。ローロは大佐の体を心配するようなため息をついた。

ふむ、これから暗殺する相手の体を気遣うというのも不思議な話

ではあったが、どうやら組織のトップを務めるのは楽な話ではないらしい。

ともかく俺たちが行動を起こせるのは、標的が頻繁に移動する時間帯、ホテルを出発してから午前中のあいさつ回りをしている間くらい、という所になるだろう。

明日会う予定の人物は時間ごとにまとめてあつて、名前の横に役職名と一緒に書かれていた。どうやらまだそれらを覚えるのにひと苦労しているらしい。

まだ明日の朝までたっぷり時間はある。東部の文字に書き直した予定表も用意して、じっくり作戦を練っていると、不意にある人物の名前に気づいた。

「ん？ こんな官僚、いたっけ……」

それは、九時に面会する予定の人物だった。正確には、九時の十分前だ。やけに短い。スタイと会う予定を入れた時と同様、軍事関係施設の視察に向かう直前に、無理やり詰め込んだといった感じで書かれていた。

何か今日中に会わなければならない用事でも出来たのだろうか。

なんでこいつだけ役職名が書かれていないんだ？ 一般人か？ イーサファルトの王室関係者、という考えも浮かんだが、ロー口もこんな名前は知らないと言を振った。

ふむ。どうやら、こいつも俺達と同様、大佐と非公式に会う一般人に違いなさそうだ。一体何者だろうか。スタイが約束を取り付ける前に、俺たちと同じ約束をした人物がもう一人いる。

「ひょっとして、三人目の賞金稼ぎ？」

スタイの驚くべき推理力に、一同ははたとさせられた。俺はごくりと唾を飲み、他の二人と顔を見合わせ、目線で会話しあった。今回ばかりはいつもの勘違いであることを祈って、俺達はその意見をスルーした。

「王室関係者でない事は確かですわ……」

「アーディオの名前はよく分かんが、やっぱり女じゃないのか……」

…？」

「これは男の名前だよ、ドック……あれ、まてよ、この名前、どこかで……」

俺は頭をうんとひねった。なんだろう、確かにどこかで聞いたぞ。聞いた覚えはあるのによく思い出せない。

こういう時にはスタイの記憶能力も役に立たない。目をつぶって口をへの字に曲げ、鉛筆で書いたような顔になっている。

どこで聞いたっけ。この特に印象に残らない、ごくありふれた平凡な名前。

そこまで考えたとき、俺は急に思い出して、はっと息をのんだ。

「そうだ、あいつだ」

俺は隣の会議室に飛び込んでいくと、棚から新聞記事のスクラップブックを引っ張り出して、机の上に広げた。様々な事件の情報を集めるのは、賞金稼ぎにとって何かと役に立つ事だった。

「あつた、こいつだ」

その新聞にはアイズマール逮捕の大見出しが書かれていた。その新聞の端の方、建材に使われる水の石が人体に与える悪影響に関するコラムの脇に、英雄の剣を持ち帰った少年の記事が小さく載っていた。ああ、そうだ、こいつの名前だ。

そうだ、間違いない。だってリゲルは最初、この英雄の剣を持ち帰ったという大法螺をふいてぼろ儲けをしていたんだ。アイズマールを逮捕して、今の地位を手に入れる直前に。

リゲルとこの少年は決して表沙汰にならない、何らかの秘密を共有しているに違いない。だから非公式に対面する約束をしているんだ。

勝機を掴んだ俺は、思わずにやりと笑っていた。伝説の尻尾が、とうとう目の前に迫った予感があった。

*

飛空艇の浮かぶ青空を湖面にたとえると、ジペンゼの飛空艇教習場はさながら湖底に沈んだ二枚貝だった。

空に三つ四つ浮かんだ白い船が船首を傾け、ゆっくりと地上の二枚貝の中に入ってゆく。

少年が操縦する飛空艇は空を飛ぶ船としては前衛的な形をしていて、鳥の姿によく似ていた。胴体は船の上下をひっくり返したような山型のフォルムを描き、左右対称の折れ曲がった翼を両脇に大きく広げている。甲板は船の大きさに較べると非常に狭く、オブションとして設置された六つの船室を有する寮が、さらにその幅を狭くしていた。

入り口に翼や塔をぶつけないよう、慎重にドックの奥まで入ってゆく。船体から進行方向にまっすぐ突き出した操舵室は、丸い蜻蛉の目のような強化ガラスに包まれている。暗がりに侵入すると、滑らかな船底が日に灼けたアスファルトの地面や、平行に描かれたオレンジ色のラインを明るく反映していた。

中から運転手の少年が腕を上げて、外の人物に合図しているのが見える。チェックシートを持った若い教官は満足げな顔をしていた。「筋がいいね。前にどこかで習ってた？」

小柄な少年はヘッドカムを外し、梯子の先にある天井のハッチを開けて甲板から身を乗り出した。彼は少し言いづらそうに顔をゆがめた。

「実は、普通の船舶免許を取ろうとしていたんだ。少し前まではね」

「へえ、普通の船？ いまどきの若い子にしては珍しいね」

「約束だったんだ。最初は二人ぐらいで旅が出来る小さな船を買うつもりだったんだよ」

少年は含み笑いを浮かべながら、軽くため息をついた。

「けどさ、シヨップの店員が色々いらないオブションつけてくるんだ。『将来お子様ができた時のために、キャッチボールができるぐらいの甲板は必要ですよ』とか、『旅をするならお仲間が増えた時のために、最低八人乗り用は必要ですよ』とか、『やっぱり今の時

代、旅をするんだったら空も飛べないといけませんよ』とか言われてさ、気がついたら、こいつを買わされてた」

少年は唇を尖らせて船体を小突いた。どうやら上手く足元を見られたらしい。教官は「あるある」と言って、白い歯を見せて笑った。「けど、いい買い物をしたよ。私が保証する」

「みんなそう言うね。けど俺には良く分かんないや。結局、もらった報奨金も全部こいつに使っちゃったしさ」

飛空艇は時に海上を走り、時に空を自由に飛びまわる気の利いた乗り物だった。風の魔石を利用する浮力管によって空中に浮かばせた船に、さらに推進力を加える事で成り立っている《二価魔法船》と呼ばれる形式を基本にし、戦後から今日まで様々な飛空艇が開発されてきた。

戦後十年ごろには大量の人員を輸送する大型船も登場して（最初は軍用だった）、魔石産業の新たな時代を築いた。

しかし、ミッドスフィアにおける飛空艇産業はその後急速に下火になってしまった。ある航空事故をきっかけに、事故が起きた時のダメージを軽減するため、魔石を使った防御システムの設置が義務付けられたのである。つまり、もうひとつ魔石を使わなければならなくなった。

自動車産業界からの圧力がかったんじゃないかとも言われているが、ともかく開発者はみなそれに頭を悩ませる事となった。

防御システムそのものを作る事はさして難しくなかった。だが、複数の魔石を同時に使った魔石機器は、故障や思わぬ事故が多くなり、かえって危険だというのが当時の一般常識だった。

理屈はわりと単純だ。鉱石には必ずといっていいほど不純物が含まれているので、一つの魔石から純粋な目的の魔法効果だけを取り出すことは理論上不可能なのだ。微量に含まれている他の魔石成分が余計な魔法を発動させ、他の魔石の働きを微妙に狂わせたり、精密機器全体にほんの少しずつだが見えない影響を及ぼしたりする。

そのために、魔石機器は長期的に使い続けると遅かれ早かれ必ず

故障するとさえ言われ、三つ以上の種類の石を使った場合には『共鳴崩壊』と呼ばれる厄介な現象まで引き起こし、危険度が対数増加的に加速してしまうのだった。

これが飛空艇の場合、ひとつの故障が命の危険に関わる。浮力、推進力、防御システム、三種類ものの力に同時に魔石を使うなどもつての他だというわけだ。

けれども浮力は必須、防御システムも法律上外せない、となるとけつきよく多くの船で推進力が犠牲になってしまった。ジペンゼの技術者が飛空艇レースを始めたのは、賞金をかけてこの推進力の問題を打開するためだったりもする。なんとか魔石を使うことなく、強力な推進力を得ようと試行錯誤していたのである。

そんな中で登場したのがこの《エアリアル》だった。

エアリアルは完全に魔石の力だけで動くクラスに出場して、なおかつ故障やトラブルの少ない優良機種として、今まさに業界中の注目を集めていたのである。

こいつはかの名機《魔女の箒》から続く魔法航空学の革命だぜとドックは熱く、熱く語っていた。あれと比較したら他の船なんてその辺のスクラップと変わんねえぜ、とさえ言っていた。

しかし、幸運にもそれを手に入れることができた少年にそこまでの知識はなかったようだ。ただ自分の船を手に入れただけで満足といった顔をしている。

「さてと、九時半まで休憩だけど、なんか食べに行く？」

「あ、いいよ、もうちょつと頑張るから」

少年は一刻も早く免許を取って旅に出たいらしく、個人練習は欠かさないようだった。早朝から練習場に現れて、休み時間もひとり残って昇降口の点検をしていたので、その時が絶好の機会だった。

青いツナギの工員に扮して点検作業をしていた俺たちは、背後から素早く少年に忍び寄っていった。俺とドックが少年の両脇を抱えあげて軽々と持ち上げ、そのまま船の中に連れ込んだ。

「な、なななな、なんだ、なんだっ！ なんなんだ、あんた達はあ

！」

少年は何が起こったかわからず、足をじたばたさせてもがいていた。

「姫様あ！」

昇降階段をのぼって胴体正面から船内に入り込むと、俺達の後からローロが悠然と歩いてきた。

「姫様、問題の少年を確保しました！」

「如何いたしましょう！」

ローロは腕組をして少年と向かい合った。汗をだらだら流している少年をじつくりと吟味した後、顎でぐいっと奥の格納庫を示した。

「連れていけ！」

「船を出せ、全速前進！」

少年を船の奥の一室に放り込むと、ドックは素早く操縦席に乗り込み、三秒でエンジンを点火した。

俺は被っていたフードを脱いで、銀色の髪の毛をあらわにした。

「安心しろ、あいつの運転技術は保障する」

「た、たすけてえ〜！」

少年のむなしい悲鳴を残して、俺たちの乗った飛空艇は教習場から飛び出し、空高く舞い上がっていった。

水の石はありとあらゆるエネルギーを吸収する魔石で、他の石より若干重く、今

ドックの変人友達がセオフィールドの造船所で働いているというので、昨晚のうちに、エアリアルルの構造を知るために同じ型の船の内部を見せてもらっていた。

その変人友達はアーディオの青年で、ドックはどこか俺に似ている奴だと言っていたが、実際に会ってみるとこれが全然違って首をかしげた。ひよろひよろと痩せこけた青年で、よく矯正中の歯を覗かせて笑う、共通項は黒ぶちメガネぐらいしか思い当たらなかった。向こうもどんなオタクが来るのかと思つてわくわくしていたらしく、俺と対面して首を傾げていた。

ともあれ、さっそくエアリアルルを拝借した俺たちは、夜のディグ湾を周航してみることにした。プロペラ音もブースター音もしないまますつと浮かび上がり、紙飛行機のように風を切つて飛んでいく。

「静かな船だな」

俺がそう言つと、運転席のドックは答えにもならない答えを言つた。

「そりゃあ、エアリアルだからな」

「ああ、将来の高速船は、すべてこの形式を追隨するはずだ」

青年もそれに続いて言つた。

ふむ、青年との会話が高度すぎて、俺にはついていけないな。俺がそう言つと、俺に似ているという青年は嬉しそうに、やや専門的な解説をしてくれた。

「エアリアルルが魔石をたくさんつかうのに事故の少ない優良機種だつてのは知ってるだろ？ それは要するに、魔石同士の《共鳴崩壊》を起こさせないってことだ。そのために《イットーリオ機関》つていうのがこの船に組み込まれている。

普段はコマみたいにぐるぐる回転しているモーター機関だ。力を

使いたい魔石には魔力を発生させる《光の石》をくつつけて、逆に使わないときは、魔力を吸収する《闇の石》をくつつけ、作動中の他の石の魔力をシャットアウトする。

こいつを高速で入れ替えることによって、ほぼ同時に複数の石が互いの魔力の影響を受けずに平行使用が可能になる。

つい最近開発された《機関式魔方阵》と呼ばれる魔法陣の一種だ。古典魔石工学の名著《アトランティスの魔道書》の中にも見られる《魔石スイッチ方式》を発展させた考えにすぎないが、材質改善でいままでの課題だったコンパクト化が可能になったおかげで……」

青年は二つの握りこぶしを交互に入れ替えながら、二種類の石を入れ替えるエアリアルの仕組みを熱く、熱く解説していた。

俺は眉をひそめた。青年は簡単に説明してくれたようだったが、いささか理解しにくいところもあった。

「あまり詳しくは分からないが、たとえば浮力を切ってしまったら落ちないか？」

「これが、不思議なことに落ちない。自然界には慣性の法則というのがある、船の速度と構造次第では空気圧の関係で浮くんだそうです。《自然項》つつつてな、魔石工学の中でも自然界が本来持っている不思議な力を応用して、魔力の無駄な消費を抑える考えがあるのさ」
不用意に彼のオタク心を刺激してしまったみたいで、俺はいささかげんなりした。

「魔石工学をやるのなら覚えときな、今一番ホットな力だ。この船は鳥みたいな形をしてるだろ。つまりこれが自然項を一番上手く利用できる構造になってるってわけだ」

「はあ……」分かったような分からないような。

青年はにやりと笑って、甲板が背負っている大きな寮を指差した。

「まあ、あんなのはいらんオプションだな」

「ああ、あれはいらねえな」ドックも牙を剥いてぐふふと笑った。

「どうせポンサーが無理言っつけさせたんだろ、企業つてのはこついうのがあるから好かねえ」

このマニアっぽい青年とは、父親の代からの付き合いだとドックは言う。そう言えば、ドックの家系は三代続く魔石機器の発明家だった。

彼の祖父は大発明家スーベイの義理の息子で、セオフィールドにジベンゼ・エア・トラストこの造船会社を創設して巨万の富を築き、スーベイの発明した飛空艇の世界的な普及に尽力したという。

さらに二代目は、大型船が魔法使いの塔に衝突して大勢の命が失われた《霧幻の塔の事故》から、緊急時における飛空艇の衝突事故を防ぐ防御システムの普及と設置義務をミッドスフィアに訴え、その功績がたたえられて現在の賢者の塔に銅像が建てられるまでになった偉人である。

そして三代目のドックは、一代目と二代目から受け継いだ遺産をすべて放棄して、海岸でごみくずを拾っては改造に夢中になっている、よくある『三代目』だった。これがわずか二十四年間の出来事だというからバリリオの人生は目まぐるしい。

初代も二代目もう死んでしまったが、スーベイはまだ健在で、毎年飛空艇レースの観戦をしている陽気な白髪の爺さんだった。ドックはあの爺さんと俺がどこか似ていると言ったこともあるが、俺はますます首をかしげるばかりだった。やはり共通項といったら黒ぶちのメガネくらいしか思いつかないのだが。

「そういえば、オペラ会館から逃げる時に乗せてもらったサソリ型の船も、ブースターみたいな魔道機関がついてたよな。三つは使えないんだろ？ あれには翼がなかったけど、同じ仕組みなのか？」

ドックは何も答えなかった。長髪の青年はじつと口をつぐんで黙りこんだ。なんだか不穏な空気がただよっていた。ドックは口笛でも吹きそつな顔をして振り向き、俺の背筋を寒くする一言を言ったのだった。

「退屈な日常には常に危険のスパイスが欠かせないのさ」

そうして俺たちは万端の体制で少年の船を強奪した。

教習場は見る間に小さくなって、クプール内海は灯台のてっぺんから宝石がばら撒かれたみたいに輝いていた。このくらいの高度になれば、他の飛空艇にも邪魔はされない。

脱出不可能な高度に至ると、ドックは船を自動操縦に切り替え、俺達のいる中央船室にやってきた。

少年は見知らぬ海賊達に拉致されてぶるぶる震えていた。

だが、あるとき俺の顔を見てあれつと首をかしげた。

「あれ？ あんた、確か……あの時のメガネのガンスリンガーじゃないか」

メガネのガンスリンガーなんて呼ばれたのは初めてだったが、どうやら俺のことを覚えていてくれたみたいだ。

「覚えていたか、俺だ」

「なんで？ あんた、何してるんだよ。なんかの間違いだね。冗談だろ？ これ俺の船なんだよ、降ろしてくれよ」

「悪いが、それはできない」俺はさも残念そうに首を振った。「俺たちはこれからリゲル」シーライトと対決しなくちゃならない、そのために、お前の協力が是非とも必要なんだ」

「対決って？」

「ああ、リゲル」シーライトを殺すんだ」

少年は自分の肩を抱いて後ずさり、ええつという叫び声をあげた。思った以上に面白い反応をする奴だ。

ようやく震えが止まった手足を熱く振りながら、何やら大げさな身振りを交えて言った。

「そんな……そんなのダメだってば！ どうして！ あの人は何をしたって言うんだ。あの人は一見ダメな大人に見えるけどさ、中身だってほとんどダメな大人だけどさ、ダメなりに本当はいい奴なんだよ！」

俺達は一様に戸惑った顔を見合わせた。端のほうでスタイだけが

にこにこと笑っていた。

「いい奴だつて？ あいつはお前が持ち帰るはずだった『伝説の剣』を、自分が発見したものだと偽って大もうけした男だつて聞いたぞ」
「……そうだよ、確かに表向きはそうだけど」少年はつぶやくように言った。「本当はそうして俺の命を救ってくれたんだ。俺にとつては命の恩人なんだよ」

「そこまで言われたら、詳しい説明を求めざるを得ないな」

「……ああ、言うよ」

やがて、そいつは俺たちに『伝説の剣』の事件の真相を語りはじめたのだった。

*

少年が伝説の剣を手に入れるまでさまざまな冒険があつたみたいだがここでは割愛する、二ヶ月ほど前、苦労の末に手に入れた伝説の剣を携え、剣を探していた連合軍本部に向かおうとしていた時の事だつた。

西部から東部へと続く大陸横断鉄道に乗るため、税関で手続きをしていると、突然汚らしい身なりの男が列に割り込んできた。

その男がリゲル・シーライトだつた。

男は自分が軍人で、重大な任務を負つて東部へ向かっている最中だとか、例のあれを持っているとか、言葉巧みに兵士達をたぶらかしはじめたという。

少年にはまったく訳の分からない事をまくしたて、お前ら俺を通さないと首が飛ぶぞそれでもいいのかと脅しかけ、ついに関税を払うことなくゲートを素通りしてしまったのである。

全く不可解な出来事に少年は呆然とするしかなかったが、後で気づいたら自分の荷物がすり替えられてしまっていたのだ。

次にその男を目にした時、リゲルは純白の高級な衣服を身に着けて投影結晶の中にいたという。

さらに自分が伝説の剣の発見者だとぬかし、有りもしない冒険譚をでっち上げはじめたのである。

ようやくこの事態——あの男に伝説の剣を奪われたのだという事実——に気づいた少年は、なんとか剣を取り戻そうと躍起になったが、相手の方が一枚上手だった。

リゲルは連日マスコミを引き連れて大陸中を渡り歩き、自伝を著し、ありとあらゆる方法を使って「しがない賞金稼ぎが伝説の剣を手に入れたサクセス・ストーリー！」を世界中に吹聴しまくって、少年の発言を社会的に抹殺したのだという。

小さな正義と巨大な悪、それがリゲルとシーライトと彼の出会いだった。

やがて少年は多くの人々の協力を得て、ついにこの事件を裁判にまで持ち込む事に成功した。

だが、裁判の直前になってリゲルとシーライトは失踪し、どこかへ行方をくらましたのだった……。

「……悪人じゃねえか」

俺は思わず本音を口にした。どうにかフォローできるような面もあるんじゃないかと思っていたが、驚くぐらい悪人だった。

「少年、お前はその男の一体どこに共感したんだ？」

「俺も最初はそう思っていましたよ。けど、あいつがやった事には、全部意味があつたんだ」

少年は、言った。

「アイズマール一家って、知ってますか」

「あゝっ、それ、私も知ってるぅ」スタイがぴよんぴよん飛び跳ねて口を挟んだ。

「ん」とねえ、大佐の本にも書いてあつたんだよねえ。確か……」

——伝説の剣に関する情報を入れた私の命をアイズマール一家が狙わないはずはなかった。

私が唯一手に入れた情報は驚くべきものだった、『誰かが伝説の

剣を手に入れた』という。

私はアイズマール一家の執拗な追撃を逃れつつ、はるか西方の異国の地に逃げ込んでいた。

だが東部のマフィアたちの気配は、バーリオたちのひしめき合う駅にまで及んでいた。

しかし、連中の様子がどこかおかしかった。誰か私以外の人間を探しているようでもあった。

周囲に漂う異様な気配に隠れつつ、税関の列の後方にたたずんでいた元軍人は、とある少年を見つけた。

不意に懐かしささえこみ上げてくる、アーディオの若き少年である。なんとという清々しい姿だろう。

その手に持った切符は、無限の可能性に満ちた未来へと歩みだすための切り札である。

しかし、彼と税関の兵士達とのやりとりを聞きながら、ふと、何か少年の慌てぶりが尋常ではないことに気づいた。

そしてその時、元軍人は悟ってしまったのだ。このどこにでもいそうな少年こそが、英雄の剣を手に入れた人物なのだと！

あるうことが、それゆえに彼はアイズマール一家の標的にされているのだ！

私は義憤と、強大な悪を前にした恐怖の狭間に揺れ動いた。賞金稼ぎに身をやつし、一度は誇りを失いかけていた。

だが、この小さな少年の未来を護らねばならぬという軍人としての熱い使命に目覚め、決意したのである。

少年の身代わりになり、奸悪なアイズマール一家から剣を護らねばならぬと。

私は命を狙われる事を覚悟し、決意の一步を踏み出したのだった――！

なるほど、リゲルがアイズマール一家に齒向かったのは不思議だとはかり思っていたが、『突然正義に目覚めた』からだったのか。

少年によると、その後行方をくらました元軍人は彼の後を追ってきた少年に真実を明かし、アイズマール一家と決闘したのだそうだ。そして決闘を終えると、少年に伝説の剣を託してそのまま自らはどこかに姿を消したのだという。

じつに感動的なストーリーだった。少年の話とリゲルの書いた自伝の間にも、ほとんど矛盾は感じられなかった。

いやはや、俺も危うく信じてしまっていたところだ。

その正義に目覚めた元軍人とかいうおっさんが、あのリゲル「シリイトでさえなければな。

「……リゲルがいなければ、列車が攻撃を受けたときに俺は殺されていて、伝説の剣も今ごろはあいつらに奪われていたところだったんだ。

……あんたには感謝しているよ、あんたにだって助けてもらった恩がある。けど、俺にはそんな協力はできないよ……」

様々な思いを巡らせている俺の目の前で、少年はしょんぼりと肩を落とした。

なるほど、そういう事だったのか。なるほどねえ。つまり、これがリゲル「シリイト」という男のやり口なんだな。

だんだんと事件の全貌がつかめてきたぞ。俺はにやつきながらやれやれと首を振り、少年の鼻先に指を突きつけて、きつく言っていた。

「お前は、本当に何も知らないガキだな」

少年は何を言われたのか一瞬理解できなかった様子で、えつと目を剥いた。

俺はこの少年が真実にたどり着く為に必要だった、唯一肝心な情報を教えてやった。

「お前さ、本物のリゲルがどんな男かよく知らないだろ？ あいつが賞金稼ぎギルドでどんな通り名を持っていたのか言ってやるつか、『詐欺師』だ。」

お前はあいつの都合のいいように言いくるめられて、利用されて

いるだけなんだよ！」

「そんな、まさか……」少年は事実を受け入れられない様子だった。「いや、あんたの言ってることを疑う訳じゃないけど。で、でも、たとえそうだとしても、俺を助けたのは事実なんだ、本当はいい奴なんだよ！」

ふむ、どうやら、どうあってもあの男が突然正義に目覚めたなんて美談を疑いたくないらしいな。

仕方ない、リゲルが一体どういう賞金稼ぎなのか、ここで少年にわかりやすく教えてやる必要があるだろう。

「その剣を奪った悪党つてのは、アイズマールのことだろ？」

「う、うん」少年はぎこちなく頷いた。

「だったら、なおさら間違いない。あいつはそのアイズマールと月に二回、カードゲームで勝負をしながら賞金首の情報を得ていたんだ。」

要するに、リゲルつて奴は元を正せばお前から剣を奪おうとしていた悪党の仲間だったんだよ」

さらなる驚愕の事実を告げられた少年は、再び跳ね上がって、ええつと目をむいた。

スーから得た情報だ、俺は確信を持つてうんと頷いた。

「奴はただの元軍人であるだけじゃない、アイズマール一家の情報網を駆使して賞金首を次々と狩り、引退するまで多額の賞金を荒稼ぎしまくった、凄腕の賞金稼ぎでもあったんだ。」

……だが、奴はとつぜん憲兵に寝返り、アイズマールの逮捕に貢献した。その功績で大佐の地位にまで登りつめたんだ」

俺は人さし指を振りながら、言葉を一つ一つ区切って言った。

「なぜ、あいつは、アイズマールを逮捕する必要があったのか。ここが重要なんだ。」

もし憲兵があいつの働きをそこまで評価しなかったら、どうなっていた？

協力をしてくれたら俺達を部下にしてくださって結構です、なん

て馬鹿げた確約を賞金稼ぎと結ぶユーモアが憲兵どもにあれば話は別だがな、あいにくそんな筈はねえ。

せいぜい、はした金を掴まされてそこで終わりじゃないか。

憲兵団に肩を入れたってなんにもならねえ。仲間の賞金稼ぎからは恨まれて、アイズマール一家の残党からも命を狙われ続けるハメになる。

さらに、あいつが所属していた賞金稼ぎギルドには、アイズマール一家に手を出すとギルドから追放されるという暗黙のルールがある、それ以降はギルドからも仕事を斡旋してもらえなくなる。

そうすると、あいつに一体何が残る？ 何にも残らないんだよ。なぜ、あいつはそこまでの危険を犯して、アイズマールを逮捕する必要があつたんだ？」

俺も話しながらその理由について考えていた。

だが、考えれば考えるほど、『本当は軍のスパイだった』という説に信憑性が出てくる。

ちくしょう。それは違うんだ。違うんだよ、あいつはスパイなんかじゃない。

リゲル、どうしてだ。どうして俺達を裏切ったりしたんだ。どうしてお前は人を助けた後で、そいつをどん底に突き落とすような真似をするんだ。

そのとき、ふと俺の事を裏切って逃げた相棒の事が頭をよぎった。そうか、相棒に裏切られたのか。

俺は考えあぐねた末に、憤然として立ち上がった。

「なぜだ。答えは簡単だ、リゲルはアイズマールと仲違いをしたからだよ。

原因は恐らくお前の伝説の剣に違いない。

リゲルはアイズマールから伝説の剣に関する情報を引き出して、西部に行った。そこまでは自伝のストーリーと同じ筋書きに違いない。

だが本当はお前が手に入れた剣を、自分のものにしようと企んで

いたんだ。

ところが、計画の途中でアイズマールがリゲルを裏切ったんだ。列車を襲撃して剣を横取りしようとし、さらにリゲルの命を危険にさらした。

アイズマールの事を相棒だと思っていたリゲルは完全に切れた。要するに、これはリゲルの復讐なんだよ。復讐のために憲兵団に情報提供の協力をしたんだ。

剣を奪い返したのもあいつの復讐の一環だ。その後お前に剣を託して消えたのは、単に自分が持っていると危険だったからだよ。

お前の身代わりになったなんていうのは、あいつが後で思いついた単なる言い訳にすぎない」

少年は口をぱくぱくさせて、呼吸も苦しそうな真っ青な顔をしていた。

何か言いたそうだったが、うまく言葉にならないといった様子だった。

「俺、世の中というものがよく分からないよ……」

もつともだ。俺は額に大量の汗をかいて深く頷いた。

「世の中なんてそんなもんだ、見方を変えるだけで、悪行が人助けになったり、善行が犯罪になったりする。」

あいつは俺たち賞金稼ぎにとって、重大な裏切り者なんだ。あいつはやってはならない罪を犯した。

だから俺たちは天に代わってあいつを誅せなくてはならない。そうなんだ、あいつは、あいつは……」

そこで俺はまた、言葉に詰まってしまった。

——あいつ、どんな犯罪をしたわけ？

リゲルがアイズマールを逮捕したことだって、世の中の役に立っている。

たとえば他の賞金稼ぎにとってはひどい裏切りであったとしても。

リゲルという男が過去にどんな犯罪を犯したのか、そういった情報も結局手に入れることはできなかった。

けれども俺が賞金首を狩るためには、いつも金以外の何らかの理由が必要だったんだ。

被害者の無念を晴らすためだとか、何か大事な物を守るためだとか。

ローロは、あの男が国王陛下に嘘をついたと言った。

確かに、あいつは世界中の人間を欺くという大罪を犯していた。

世界中に嘘の本をばらまいて悪銭を稼いでいた。

マフィアとつるんでいて、マフィアの頭目を逮捕して、憲兵団の大佐にまでなった。

嘘つきで、のぼせ上がって、その実、大変なことをしていた。

どれも決定的じゃなかった。そんなものはちっぽけ過ぎて、どれも俺の理由にはならないような気がした。

あいつはどうして死ななきゃならないんだ。ちくしょう、あいつがいったい、何をしたって言うんだよ！

そして、俺がうなり声を上げて絞り出した結論は、結局こうなった。

「……そうだ、あいつは、とんでもない、『女たらし』なんだ！」

少年はぼかんと口を開けた表情のまま、細い眉をくいつとしかめた。俺はすかさず背後にいる女の子達を指した。

「こ、こ、ここににいる女性たちは、みんな、あの女たらしの被害者なんだ！」

そうだな、スタイ！ 大佐にホテルの部屋に連れ込まれて何をされたか、この少年に教えてやれ！」

みんな俺に注目していた。突然なにを言い出すんだこいつ、という怪訝な顔を誰もしていなかったのが、せめてもの救いだっただ。

スタイはほっぺたを指でぶにぶについて、にこにこしながら昨晚の事を思い出していた。

「うーんとねえ、大佐の本にサインもらってねえ、いっぱいいっぱ

いお話してねえ、マツサージしてあげてねえ。大佐すっごい痛がつてたんだよお、でもそれが気持ちよかったって言ってくれてねえ」

「また次に会う約束をしたんだよね？」

「うん、大佐も約束してくれてねえ、そしたら、そしたら……」スタイは突然なみだ目になって、声を詰まらせた。「とつぜん、ターチが襲われちゃってえ……」

「分かった、もういい」余計な事を言う前にタイミングよく遮断した。「心の傷に触れることなので、詳しいことはあえて言わない。

彼女は見たとおり能天気な女の子だが、本当は相当なショックを受けたせいで、心の傷を無意識の領域に押しやろうとしているんだ」

依頼者の目が試すように俺に突き刺さっていた。

騎士たるもの、嘘についてはならない。俺は一言も嘘をついていない。

「俺だって、リゲルに恨みがあるわけじゃない。同じ賞金稼ぎ仲間だ、本当はお前と同じように、命を助けてもらった事だってある。けれども、それでも俺は、どうしても仇を討って欲しいという、こつした数々の被害者の声のために立ち上がったんだ！」

さらに俺はロー口を指差し、畳み掛けるように言った。

「隣にいる女の子は、父親がリゲルに騙されて、それはそれは、とても辛い思いをしたんだ。隣国イーサファルトからリゲルの所に連れてこられる途中で、なんとか人の目をかいくぐって逃げ出してきた、足に血豆を作りながら異国の地を歩き続け、リゲル大佐を暗殺して欲しいと、賞金稼ぎギルドに願い出てきたんだ。そうだな、ロー口！」

なんとか一言も嘘をつかずに言い切ると、ロー口は決然とした表情でしっかりと頷いた。

「仰るとおりです。あの男はふしだらにもほどがある、最低の女たらしなのですわ」

空気の読める奴でよかった。

やれやれ、俺にも多少なり詐欺師の才能があるのかもしれないな。

俺達の言葉に嘘はなかったが、少年の心にはしっかりと俺の意図した嘘が植えつけられたようだった。

少年は俺の言葉をすっかり信じ込んでしまったみたいで、次第にこのような女性たちに心の傷を負わせた卑劣な悪漢が許せない、という男らしい顔つきになっていた。

さらに彼は、その奥で壁に寄りかかっている毛むくじやらの男を指差し、尋ねた。

「あのおっさんは？」

ドックは我関せずといった顔をしていたが、不意に理由を尋ねられて、つかなくてもいい嘘をついてしまった。

「俺は、妹が……」

ああ、くそっ！

俺は自分の手で作り上げてしまったりゲル像の出来栄に正直震えそうになった。

どうしてこうなった！

少年はそんなリゲル像を真に受けたのか、目に怒りの炎を宿らせていた。

「なんて奴だ……！」

もはや何でもありだな。

本当に単純な奴で、俺達は笑いを堪えるのが大変だった。

*

俺の標的が少年と対面する場所に指定したのは、《ミッドスフィア憲兵局》だった。

ドラゴンの頬に当たるテンニールコンタル州、軍事施設が募るエア区の、見晴らしのいい平地に唐突に現れる、青い二つの水晶の塔だ。

よりにもよって敵陣のまっただ中だ。空から見ると果し合いの末に弾き飛ばされた剣の断片みたいに見えて、それが英雄の墓場にあ

まりに似つかわしくて泣けた。

二十八階の壁面に突き出した飛空艇ポートに着陸すると、小さな戸から背の低い見習い兵士が出て来て、操縦席に近寄ってきた。

「局内は危険物の持ち込みが制限されています。武器をお持ちの場合はここで預からせていただきます。お付きの方もどうかお願いします」

もつと威丈高に扱われるのかと思ったが、割と丁寧な対応だった。俺のお付きの方扱いされた少年はむっとしていたが、運転席に居る俺が主人格に見えたのは当然と言えば当然だろう。

正面の青い水晶の壁がせり出して、格納庫への扉が開いた。

俺達の船はそのままずりりと水晶の中に入ってゆき、軍事用の船がずらりと並んだ格納庫の一角に泊まった。

飛空艇から降りる前に狭苦しい船室の扉を開くと、中に忍び込んでいた三人が顔を上げた。

結局ローロは『事が終わるまで信用できない』と言ってついてきて、スタイもついでにくつついてきてしまった。

俺ももうここまで来たらあきらめる事にした。全員不安なのがわかったからだ。なにしろここは憲兵どもの本拠地だ。

「ドック、何かあったら任せたぞ」

ドックは吠える代わりに牙を見せて笑った。ここならバクバのよくな邪魔者も入らないし、ドックなら何があってもきつと強引に逃げ切ってくれるだろう。

俺は仲間たちを船に残して、何もない段差でけつまづいたりする少年と並んで、敵陣へと乗り込んでいった。

やたらと高級な鎧に身を包んだ憲兵に先導されて、俺達は局内を進んだ。兵士の数は思った以上に少ない。ここまで二、三人とすれ違っただけだ。

窓の外の敷地に、蛇のようにうねうねと続く金網のゲートが見える。見張りの兵士の鎧が強い光を反射していた。そこにも見張りは一人、二人しかいない。外は勿体ないぐらいにのどかな天気だった。

先を進んでいた憲兵が、何気ない部屋の前で立ち止まった。ノックが湿った音を立てて、中から山伏のような野太い声が聞こえてきた。

「入れ」

憲兵は何のためらいもなくドアを開けて、自然な足取りで部屋に入っていた。

無論、事前に客人が来ることを知っていたのだろうが、ここまであっさりとい俺達を通して、その裏に悪意を含んでいそうな気配を感じずにはいられなかった。

何も知らない高級憲兵の態度と同じくらい自然に見えるよう、俺たちもそのまま自然に部屋に入って行かなくてはならなかった。

憲兵団大佐の執務室に通された俺たちは、書き机の向こうに腰掛けた男の前に並んだ。大佐は壁にかけられた大きな世界地図の方を向いていて、表情は見えなかった。

机の幅がやたらと広くて、男の大柄な背中はいつもの数倍大きく見えた。

少年は、からからになった喉から声をしぼり出した。「リゲル、俺だ」そして喉を鳴らす。

大佐は俺たちに背中を向けたまま、何かの書類をじっくり読みふけていた。

「ああ、お前か。……すまない、すぐに終わる」

俺たちは、大佐の背中を見つめたまま、そこから一步も動かなかった。背後でゆっくりとドアの閉まる音がした。案内役の憲兵が外に出ていったらしかった。

狙うなら、今だった。

たった今、強大な敵が、俺の目の前で背中を向けていた。

またとない絶好の機会だった。俺は奴を殺すための拳銃を袖口に隠し持っている。

俺は昂ぶった気持ちを落ち着けるため、ほんの数秒間、軽くまぶたを閉じた。

——もう後には引けない。いまここで大佐を射殺すれば、銃声が聞こえるだろう。

外に出ると、まださっきの兵士が居る。逃げるのは、上だ、上の階ほど人の数は少なくなる。

次々と現れる兵士を振り切って、屋上まで逃げ切れば、そこでドツクの船と合流する。

その後、ローロとはどこか安全な場所で別れて、王室に戻ったローロからギルドに報奨金が振り込まれるのを待つ。

俺たちは必要な額だけギルドから受け取って、二日後に開催される飛空艇レースに紛れこんで、どこか遠くの国に逃亡する。――

これからの行動を、何度も心の中で反芻していた。何をためらう事がある、これは、いつもと同じ。いつもの賞金首退治と同じじゃないか。

俺はもう、引き返すことのできない道を選んでしまったんだ。

フーピーエの精神と俺の精神が、再びゆっくりと重なっていく。袖口から銃がするりと落ちてきて、俺の手の中に木製の銃把の感触が広がった。木の心地よい温かみがあった。

真正面からぶつかって勝てるような相手ではない。振り返る前に、いや、たとえ振り向かれてもこちらの行動に反応される前に、反応されてもコンマ一秒でも相手の行動より早く、すばやく、正確に、事を終わらせなくてはならなかった。

俺は激鉄をゆっくりと上げた。

さらに腕をまっすぐ前に掲げ、銃口を大佐の背中に向けた。それとほぼ同時に、大佐の手から書類の束がすべり落ち、大佐は身をかがめて書き机の影に入ってしまった。

「ああつ、しまった……！」

俺はすばやく銃を引つ込め、ベルトの背中側に挟んだ。

くそ、最初のチャンスは不意になってしまったようだ。だが、狙撃手はどんな状況においても焦ってはならない。

失敗は許されない、確実に仕留められる状況を待つんだ。俺はじ

つと次のチャンスをつかがった。

書類をかき集め、机の下からひよっこり顔を出した俺の標的からは、昔の賞金稼ぎの面影は完全に消えうせていた。

すっかり気の緩んだおっさんの顔をしていて、照れ笑いなんぞ浮かべながら、机の上でとんとんと書類を束ねていた。

俺は心の底からがっかりしていた。お前はどこかで大切なものを置き忘れてこなかったか？ 白銀の銃と一緒に。

「よう少年、久しぶりだな」

標的はにこにこしながら言った。少年はぎこちなく頷いた。

「それと……あれ？ そっちの君は……ええと、ああ！ そうかこの前、確か宮殿前で会った人じゃないか！ いやあ、あの時は勘違いしてすまなかったねえ。はっはっは！」

ぬけぬけと笑う顔を見て思った。こいつ、本当に俺のことを忘れてやがる。

俺は憎しみを乗り越えてあきれ果ててしまった。なんだか悲しみさえこみ上げてくる。少年は俺の方を指差して紹介した。

「賞金稼ぎだ。テルシオっていう名前の」

リゲルは、ほほうという顔を見ると、探るような眼差しで、じいっと俺の顔を見つめた。

何かを思い出そうとするように眉をしかめ、両手で書類の束を持ったまま、ひよこひよここと首を伸び縮みさせながら、俺のすぐ目前まで近づいてきた。まるで二ワトリみたいだった。

「テルシオ？ ……テルシオ、テルシオ、テルシオ……はて、どこかで聞いたような名前……だな」

標的は何かを思い出そうとしていた。

拳銃の射程範囲にはとっくに入っていた。撃つべきだった。俺はすでに我慢の限界だった。間近に顔を覗きこまれて、手先の神経がぴりぴりと張り詰めた。動揺が断片でも顔に出ないように心がけたが、こらえきれず、徐々に眉間にしわが寄っていった。

「まあいいや。俺も昔は賞金稼ぎだったんだ。よし！ 先輩として、

ひとつ忠告しておこうか？」

そう言うと、リゲルは書類の束の裏に隠していた銃を二丁取り出した。そしてそいつを両手に持って激鉄をがちゃりと引き、俺と少年の首筋に突きつけた。

「背中にある男に不意打ちは通用しねえぜ？ 覚えときな」

リゲルの表情が一変して、伝説の賞金稼ぎのそれにもどった。

俺の背中を冷たい汗が流れていった。隣の少年も同じく、失神しそうなほど震えていた。

「小指と薬指を外に出したままベルトに差してある銃をつまみ、ゆっくりと肩の高さまで持ち上げる」

完全に気づかれていたみたいだ。俺は銃口に顎を押されたまま身じろぎひとつ出来なかった。ベルトに挟んであった銃を取り出し、高く掲げてぼとりと床に落とした。リゲルはなおも銃を離さない。

「次の銃だ」

「もうねえよ」

「左の袖にある奴だ」

「ありえねえ」

予備の銃の位置まで見破られていた。しかも正確に。

直接対峙して初めてこいつの恐ろしさを理解した、常識では計り知れない勘の鋭さだ。

だが、いくら勘が鋭かろうと、ここまでの確に相手の行動を先読みする事ができるだろうか？

遠くから見て予備の銃の場所まで把握できるだろうか？

そう言えば、情報屋のスーはこいつの事を「異能力の持ち主かもしれない」とも言っていた。

「あんだ、ひよつとして……」

そうか。もしかすると、俺を睨んでいる二つの目以外に、もうひとつ別の目を持っているのかもしれない。それがこいつの強さの秘密なのか。

「俺が持っているのは《魔力の読み手》と呼ばれる異能だ」

百万人に一人の割り合いで、魔石が持っている魔力を読み取ることの出来る特異体質のアーディオが生まれると聞いたことがある。

目や皮膚、聴覚、反応する場所は様々だが、その能力を鍛えれば周囲のあらゆる魔石の位置を把握できてしまうとされる。

この魔石社会においては、恐るべき脅威となる存在だ。

分らないはずだ、きっと西軍に所属していた頃も秘匿されていたに違いない。

俺の標的は、自分から正体を明かしてしまった。それはもう俺たちがなにをしようが構わないと判断してのことだろうか。

そしてその鋭い目は俺達よりもっと先のことを考えていた。もっと、ずっと先のことをだ。

「なるほど、もう一つ別のグループが俺の命を狙っていて、焦ってそいつらより先に乗り込んで来たんだな？　そして、お前はそれが誰か知っているな。誰だ、言え」

先ほどから驚嘆しっぱなしの少年みたいに、俺は驚嘆した。

「……知っていたのか」

「お前達を見て分かった」

「そりゃ、お得意の嘘か？」

「お前らみたいな身軽な若造のグループが、せっかく取り付けた約束の時間よりも早く来る理由なんて他にない、それだけだ。同じ標的を狙った賞金稼ぎとぶつかり合うなんて事態はざらにある、あとは勘だ」

バクバにやられた傷がうずいて、俺は顔をしかめた。こいつ、一体いくつの目がついているんだ。

そうか、スタイが身につけていた盗聴器も隠しカメラも、すべて魔石を使った魔工機だ。俺達の通信は最初から最後までこいつに筒抜けだったに違いない。

だとしたらあのとき、わざわざ自分の方から会う約束を取り付けたのは、俺たちを罠にはめる算段だったんだな。

こいつとは戦っている次元がそもそも違う。勝てないはずだ。俺

は観念して、標的に敵の名を伝えた。

「ルオー」ブルトルート「バクバだ」

俺がその名を告げると、リゲルは眉をしかめ、なにか口元でぶつぶつ言っていた。

「どこかで聞いたかな、いや、聞かなかったような」

なんでも出来る万能人間みたいな奴だと思ったが、人の名前を覚えるのはずいぶん苦手みたいだった。いや、これは単に年のせいなのかもしれない。

——なるほど、年か。

俺は深呼吸した。こいつは間違いなく、数々の伝説を残し、大悪党を捕まえた伝説の賞金稼ぎには違いない。

俺達が付け入ることの出来る唯一の隙があるとすれば、それはこいつの腕の衰えしかない。

どうする？ このまま捕まったところで、どうせ俺に未来なんか残されちゃいない。

他の仲間の事を心配する必要はない。ドックならやってくれる。

それじゃあ、いっちょ

派手にやっちまうか？ 最後の足掻きをしてみせるか？ 伝説の賞金稼ぎを相手に、早撃ち勝負に出るか？

軽く吊り上った俺の頬を、大粒の汗が流れていった。左袖に隠した予備の銃を、じつとりと汗ばんだ左手に降ろしてゆく。

警戒を強め、大佐の眼光がさらに鋭さを増した、そのとき、誰かがドアをノックした。

「こんにちわ」

俺の銃は銃口が手首の辺りに引っかけて止まっていた。少年は隣でガタガタ震えている。俺と大佐はにらみ合ったまま、身じろぎ一つしなかった。

「大佐さあゝん、またマツサージしましょうよあゝ」

その声に、大佐の顔が一瞬引きつったのを俺は見逃さなかった。

俺は大佐の腕を振り切って、すばやく背中を丸めた。

動いた瞬間に顎がふきとばなかったのは僥倖だった、俺は標的の腕と胴体の下の、ほんのわずかな隙間に飛び込んだ。そこに入り込まれると、どんな奴でも最初の一発は急所を外す。

一発食らうことは前提とした、ほとんど捨て身の攻撃だった。

そこからは血みどろの殴り合いだ。怯んだ方が負ける。

袖の銃を左手の中に落としながら標的にぶつかっていった俺は、だがその瞬間に、自分の負けを悟った。

だめだ——これも読まれている。

標的は俺を間合いに入れるような真似をしなかった。腕をまつすぐ伸ばした状態で、すばやく俺の背側に回り込んだ。

俺はほとんど一回転するような勢いで体をひねり、狙いを定めるために銃を向けるが、相手より一瞬だけ遅れる。

——その一瞬は生と死を分かつには十分に長すぎた。

しかし、予想外の事態というものは、いつもこういう時に訪れるものだった。

引き金を引いた大佐の顔が、一瞬引きつって見えた。

——不発だ！

俺はすかさず真正面に銃を突き出し、大佐の驚愕にみちた表情のど真ん中に銃口を向けた。

とうとう俺は伝説に勝った。勝ったんだ。こいつとの思い出やら、将来のことやら、目から零れ落ちそうになる熱いものやら、なにもかも、全ての雑念を心の中から綺麗に消し去って、——思いつきり、引き金を引いた。

そして俺は、そのままその場に凍りついた。

——不発だ！

俺の銃は、まったく火を噴く素振りさえ見せなかった。

標的は少年に向けていたもう一丁の銃を、すかさず俺に向けた。

ゆつくりと自分に向けられる銃口を見て、俺は死を覚悟した。ああ、こんなところで終わりなのかよ。

対立する二人の男の二丁の銃が同時に不発だなんて、そんな天文

学的な確率の落とし穴に引っかって、俺は死ぬのか。

ひょっとして、これが運命ってやつなのかもしれない。俺はかつて自分の命を救った男の手にかかって、こうして死ぬ運命だったのかもしれない。

そうなんだ。俺はかつて、この男に命を救われたんだ。ガキだった頃、賞金のかかった悪党どもに殺されかけたのを救われたんだ。そしてこの男みたいになろうとして賞金稼ぎになつて。こいつは全然知らないだろうけど、勝手にこいつの銃を受け継いだ。でも、そのせいでこいつと戦う羽目になつて。そして最後にはこいつの手にかかって死ぬんだ。

涙が出そうだ。自分がこれまで辿ってきた運命の数奇さに、俺は妙な感動さえ覚えた。

「じゃあな——テルシオ」

俺の標的は俺の胸の中心に銃を向け、そして笑うでもなく、嘆くでもなく呟いた。

リゲル、お前は本当は俺の事を覚えていたのか？

最後の瞬間まで、それは分からなかった。俺の標的は、ゆっくりと引き金を引いた。——不発だった。

弾の出ない三丁の拳銃を持ってぼかんとしている俺達を、少年がぶるぶる震えながら見比べていた。

あれ、何だこれ。何かありえなくないか。

青ざめた大佐は、自分の手の中の銃を見て、急に何かに気づいたような表情を浮かべた。

「これは、まさか……あの時に……！」

そのとき、唐突にドアが蹴破られ、金髪の女が執務室に乱入してきた。銃を構えたスタイが前髪をぶんと振り上げ、にやにやと不敵な笑みを浮かべて、膠着状態の俺たちを眺めまわしていた。

「ごめえ〜ん。大佐あ〜。来・ちや・つ・た（はあと）」

まさか、まさかまさかまさか。まさか、こいつ、天然のくせに、大佐のホテルに潜入したときに、二丁の銃に細工していたっていう

のか！

「薬室に水の石をちょこつと入れておくとなえ、銃が風邪をひいやうのよ。知ってた？」

スタイは得意満面に言った。驚いた。先月までずぶの素人だったのに、なんて成長速度だ。俺は自分でも破顔するのをこらえ切れなかった。

「まったく、お前はいつも俺の予想を裏切ってくれる可愛い奴だ！」
スタイは、にかーつと笑って、俺にぶんぶんぶん手を振った。
「うんーっ！　すごいでしょーっ！　昨日テルシオの銃でいっぱいいっぱい練習したのーっ！」

ははは、こいつめ。お前のせいかつ。俺は怒りに任せて地面に銃を投げつけそうになったが、冷静にスライドを引いて、一発目の脇にちょこんと挟まっていた青い石を抜き取り、発射可能な状態にまで戻した。

水の石は火の石の力を打ち消すんだ。こいつがあると薬室内の圧力が高まりきらずに、弾が飛ばなくなってしまう。衝撃緩衝材なんかに使われる。

さすがの大佐もこの状況にはお手上げだろう。両手をぶら下げたままスタイをじっと見つめて、それから全てを悟ったように言った。
「そうか……お前も俺と同じ《魔力の読み手》だな」

「うんーっ！　大佐ちゃんと、お揃いだねっ！」

俺は、驚いてスタイに目を向けた。スタイは銃を構えたままぴょんぴょんと飛び跳ねた。俺も大佐も銃が暴発しやしないかとひやひやしていた。

俺も知らない意外な才能をスタイは隠し持っていた。なるほど、瞬間記憶能力に、魔力を読む力。ひょっとするとこいつは、将来リゲルにも匹敵する凄腕の賞金稼ぎに化けるかもしれない。ただ、ネジが一本。頭のネジがあと一本、足りてさえいれば……！

もう何度目になるか分からないまたとない絶好の機会が訪れたというのに、あろう事か、運命的な出会いを果たした二人の魔力の読

み手は、ここですっかり意気投合してしまっただ！　そして同じ能力者同士にしか分らない悩み相談を始めてしまった！

「あとさあー、家の中でもちよつと調子の悪い石とかがあるとすぐ気になっちゃってえー。まだ全然使えるのに替えちゃうんだあー」
「それは分かる、けどあんまり強くエンチャント（魔力補填）しすぎたら、たまに気持ちが悪くなるだろ」

「そーそー！　町出るともう大変だよええー。どんなにブローしても髪の毛立っちゃってさあー」

「髪の毛が反応するのか？　それは面白いな」

「あー、あとねえー、携帯！　隣の部屋で使われてると、もうすぐくきになっちゃってえー」

「ついついメールの中身を読んでしまうよな」

「ええーっ、大佐ちゃん、えっちいー！　うふふ、実は私もおー！」

どうやら俺は知らないうちにこいつにメールのやり取りを読まれていたみたいだが、今はそんな事気にしている場合じゃなかった。

少年は耳をふさいで、どうしたらいいのか分からないといった様子で二人をきよきよ見回していた。俺も耳をふさぎたい気分だったが、とにかく大佐に銃を向けていなくてはならないので我慢した。スタイの前でいきなり大佐を撃つと混乱してしまうだろうので、なんとか二人の会話に割って入る隙を作らなくてはならなかった。

「スタイ、それ以上余計な事をしゃべるなっ」

「だってターチってばさあー、仕事の時以外は、いつも相棒といちやいちやしてんのよあー。気になるなっていう方が無理じゃないのよあー！」

リゲル大佐の表情がぴしりと強張った。

「なに、ひよつとしてあいつの相棒、女か？　それはけしからんな」
「ス、ス、ス、スタイっ！　やめろっ！」

出し抜けに余計な秘密を暴露された俺は慌てた。

しかし、スタイはなぜか憤懣やるかたないと言った様子で俺の方を指差した。

「そうなのよぉー！ 一人称『オレ』のくせに出るところ出ちゃってさぁー、まったくけしからん相棒なのよぉー。しかも不器用なくせにすっごいやキモチ焼きでさぁー。ターチってば物語の主人公だったら毎回女の子をとつかえひつかえするタイプだからいっつも喧嘩が耐えなくて……」

大佐はスタイの銃を奪い取ると、彼女の頭をすばやく自分の胸に引き寄せ、肩越しに俺に一発放った。

ずがん、ときた。

あまりの早業に俺も撃たれるまで反応できなかった。大佐の銃弾は俺の手にあつた銃に直撃し、腕が引きちぎれそうぐらいの重たい衝撃が走った。

やられた。俺は咄嗟に書き機の裏側に転がり込んで追撃を避けた。痛みやら出血やらでずしりと重たくなつた両手を抱え上げ、銃を握り締めた。

「テルシオ、忠告その二だ！ 捕まえた敵がべらべら喋りだしたら隙を見せるな！」

大佐にがつちりと捕まえられたスタイは、うーんと唸つてもがいている。腕力は大佐の方が数倍上だ、逃れようがない。

くそつ、両手の感覚がない。おまけに銃は使い物にならないときた、さっきの一撃で、激鉄が吹っ飛んでいやがる。

大佐は書き機の裏側に潜む俺に銃を向け続けていた。銃声を聞きつけた憲兵達がやってくるのを待っているんだ。万事休すだった。

奴は俺に銃を向けて、はじめて勝者の笑みを浮かべていた。

「じゃあな、テルシオ」

ああ、この台詞を聞くのは今日で二度目だな。おい、いい加減はつきりしろよ、俺のことを覚えていないのかい、どっちなんだっ！

「やめろおっ！」

そのとき、執務室に甲高い叫び声が響き渡った。

声の発生源は、——少年だった。

少年は最初に俺が捨てた銃を持って、前に構えていた。震える手でそいつをリゲルに向けていたんだ。

標的の顔が固まり、ゆつくりと少年の方を向いた。

「う、う、動くなっ！ 撃つ、本気で撃つからな！」

動いているのはお前だ。ちくしょう、あんな弱腰で撃てるのか、あいつ。

「リ、リゲル、そ、そ、その人を放せ！」

少年の決死の警告を受け、リゲル大佐は腕に抱えていたスタイをゆつくりと離れた。

スタイは目を丸く見開いて硬直しており、金色の髪がふわりと跳ねていた。

「……今日はお前と話をする予定だったよな」

俺の標的は、全く淀んでいない声で言った。少年はびくつと肩を震わせた。俺の標的は何一つ恐れる様子もなく、まっすぐ彼の目を見つめていた。

「俺の話を聞かずに殺すつもりか」

リゲルの迫力に、少年はすっかり気圧されている。俺は声を荒げた。

「だめだ、聞くんじゃない！ すぐに撃て！」

「黙れ！ 俺とこいつだけの、大事な話があるんだ！」

大佐の雷のような一喝が響き、俺はぐつと言葉をこらえて様子を見守った。少年は喉を鳴らし、きりつと表情を引き締めて言った。

「い、いいとも。な、何の、話だったんだ？」

二人の間の空気は凄まじく張り詰めていて、とても第三者の俺が声をはさめるような状況ではなかった。

両者の間に一体なにがあったのか、知る由もない。

その張り詰めた空気の中で一呼吸すると、大佐は真剣な眼差しを少年に向け、一言こう言った。

「『俺が六だ』、と、言っただけだ」

それが何を意味する言葉なのか、俺にはわからなかった。だが、

それを聞いた途端、少年の顔がみるみる青ざめていくのが分かった。何だ、いったい何を話している。大佐は、さらに言いつのつた。

「俺がアイズマールから伝説の剣を取り戻したとき、確かにお前にこう言っただけだ。『俺が六だ』と」

おい。

おいおいおいおい、ちょっと待ってくれ。それってもしかして、こいつら剣を連合軍に持って帰ったら、報奨金を分け合う約束をしていたって事か!?

何やってんだ少年!?! そんな約束、俺は今始めて聞いたぞ!?

「だ、だ、だ、だって、リゲル、お前、あの後ずっと行方がわからなくなってる……てつきり、もういいもんだと」

ああ、なんてこった、少年はすっかり動揺してしまっている。

対するリゲルも同じくらい動揺している。額から汗を流し、食い入るように少年を見つめていた。

「お前は一体何をおびえている? まるで本が売れて調子に乗っていた小説家が、年度末になってはじめて多額の所得税を突きつけられた時みたいな顔をしているぞ?」

やけに具体的だな。まるで自分の事を語っているみたいだった。

ああ、なるほど、そういうことが。今になってここに少年を呼んだのは、そういう経緯があったからだな。

二度もベストセラーを連発したせいで、気づかないうちに税金がとんでもない額に膨らんでしまったんだろう。ミッドスフィアは累進課税制だからな。

リゲルは遠い目を浮かべ、弱々しい少年の心の闇に付け込むような、そんな悪意に満ちた優しい声色で囁いた。

「俺がお前と話したかったのは、『その六割はもういらないから、お前の未来の為に使うがいい』という事だったんだ……(キラッ)」

嘘だ、明らかな嘘だ、たった今思いついた爽やかな嘘だ!

「おい少年っ! 騙されるな、そいつは得意のペテンだ! 絶対に耳を貸すんじゃない……!」

「おおっと、すまない、手がすべったア！」

そのときリゲルの銃が暴発し、俺の声を掻き消した。手が滑った割には絶妙なコントロールだった。壁と本棚の隙間に入った銃弾が火花を散らして、そのまま本棚を俺に向かって押し倒してきた。

ありえねえ。机の裏側にいた俺は逃げ場を失って、大量の本の下敷きになった。

「ぐわあああっ！」

まさに超人。ペテン師にして魔術師。銃を下ろしたリゲルは、悠然と少年に歩み寄った。

「少年、お前の気持ちはよく分かる。俺とこいつのどちらかが嘘をついているはずだ。そして、お前にとってはこいつの言い分を信じているほうが正しく思える……」

少年は俺の危機を感じ取ったが、この状況でどうしたらいいのかわからずに、ただおどおどするばかりだった。

リゲルは、少年を叱る父のような眼差しで呼びかけた。

「確かに俺は嘘つきだった。人に言えない汚いこともしてきた。俺は清廉潔白で、いままで一度も嘘をつかなかったなんて奇麗事は言わない。……お前がどちらの言葉を信じようと構わない、結局それを決めるのは、お前の心次第なのだから」

あいつの口上を聞いて、俺は一瞬、不思議に思った。お得意の口から出任せを言えば、こんな純朴な少年をたぶらかすのは簡単なはずじゃないか。

なんでわざわざ、そんなつまらない事を言い出すんだ。

けど、どういうわけかその時、俺の標的は自分の身の潔白さえ、あっさり否定してしまったんだ。そいつは自分の罪の苦しみをこらえるように、眉をひそめて言った。

「どちらの言葉が正しくて、どちらの言葉が間違っているか。ここで俺にそれを証明することはできない……。だが、一つだけ確かなことがある。それは、お前の進むべき『未来』がお前の判断ひとつ

によって決まってしまうことだ」

「未来」

少年はその簡潔なフレーズを、口の中で繰り返した。

俺の標的は頷いた。

「少年、俺はお前を助けたい。……もし、お前が俺を信じれば、お前は大佐の危機を救った英雄として俺の隣に立ち、輝かしい未来を歩む事となるだろう。……だが、もしここで俺を疑い、その賞金稼ぎを信じるならば。お前は憲兵団大佐を暗殺した犯罪者として連合軍から追われ、その賞金稼ぎの仲間として、逃亡の日々を送ることになるだろう。……俺はお前に、そんな汚れた未来を歩んでもらいたくない！」

大佐の頬を、一筋の涙が伝っていった。迫真の演技だった。

いや、この涙はいつもの演技なんかじゃなかった。本物の、真実の、涙だったんだ。

大佐は涙をぼろぼろ流しながら、なおも少年の心に訴え続けた。

「賞金稼ぎの生活がどんなものか、お前に想像できるか？ 嘘つきと罵られようが、卑怯者と蔑まれようが、己の命が奪われるまで命のやり取りを延々と繰り返し返さなくてはならない。俺は、何度もこの世界から足を洗おうと思っていた。だが止められなかった。それはもう二度と引き返すことが出来ない道に踏み込んでしまったからだ。どこに逃げようと、常に闇の世界が俺を追いかけてくるから……！ 今はまだまっとうな未来を歩むことのできるお前が、俺と同じ未来を歩むことはない、そんな無駄なこととはするな、賞金稼ぎなんかに身をやつすことはないんだ！」

そのとき、俺はようやくわかったんだ。

リゲルが憲兵団と組んでアイズマールを逮捕したのは、俺が考えてたみたいな裏切りや不和があったからじゃなかったんだ。

ギルドや仲間を失ってもいい、もっと単純な理由があったんだ、こいつは今までの生活が嫌になって、もう賞金稼ぎを止める決意していたからだっただ。

あれ。どうして俺は、こいつの作り話を信じているんだ。どうして俺は、こいつの法螺話に引き込まれているんだ。

スタイがおいおい泣いて「ええ話やなあ」などと感涙しているのは仕方がないとして、どうして俺が泣いているんだ。

――泣くな。

あれはいつ聞いた言葉だっただろう。俺がまだ年端も行かないガキだった頃だ。

――泣くな。お前の両親の仇は討った。

標的の話を聞いているうちに、俺の脳裏に、ある男がいつか言った言葉が蘇ってきた。

まだ俺の両親が生きていて、まもなく死んでしまう時だった。

悪党の間を縫って颯爽と現れた一人の賞金稼ぎが、瞬く間にそいつらを蹴散らしてしまったんだ。銀色のショットガンと拳銃を持って、たった一人で戦っていた。

俺はその賞金稼ぎの背中に憧れて、走り出した。他に行く場所もなかった。けれども、あいつは俺にこう言ったんだ。

――お前には未来がある。せめて俺とは違う道を歩め。

何度孤児院に連れ帰されても、何度でも抜け出して、しつこくあいつの後を追っていた。

俺はひ弱で目も弱くて、パワーファイターにはなれないと言われた。けれど、それでも俺は諦めなかった。

狙撃銃サイクロプスを手に入れ、とうとう賞金稼ぎになってしまった俺は、東部を流れていくうちにもう一度こいつと出会った。

そのとき、こいつは多分、俺の事なんかちつとも覚えていなかったと思う。たった一度出会っただけだから、無理もない。

けれどもこいつは何気なく俺の名前を尋ねて、苦笑いを浮かべて言っただ。

――テルシオか。良い名だ。

リゲル、信じてもらえないかもしれないが、本当はお前を殺したくなかったんだ。

どうしてあの時、俺を助けてしまったんだ。どうしてあの時、もう賞金稼ぎを辞めるつもりなんだって、言ってくれなかったんだ。

俺はもう、後には戻れない道に踏み入ってしまったんだぜ。

ちくしょう、みんな、お前のせいだ。みんな。

「――私が賞金稼ぎとして、一体どのような人生を歩んできたのか。その過酷な人生の中で、何を手に入れ、そして何を失ってきたのか。どのような苦悩の末に、賞金稼ぎをやめる決意をしたのか！

そのすべてを、今ここで語るつもりはない……！」

少年は目から涙があふれ、狙いを定めるのも難しそうだった。

俺の標的は彼に背中を向けると、書き机の側に近寄ってきた。

そしてその上に、先ほどの資料の束をどんと叩きつけ、力強い声で言い放ったんだ。

「そしてその全てが、この、現在執筆中！『リゲル』シーライトはいかにしてハンチントン海賊団を捕まえたのか」に、詳細に記されているっ」

三冊目！俺の標的はこの二ヶ月に本を三冊書いていた。

すげえ、本当に真面目に仕事をしているのかこいつ。そんなに税金がやばいことになっているのか？

とてつもない速筆の大佐は、涙ながらに少年にその本の重要性を訴えかけていた。

そのとき、俺は半ば覚めかけてきた頭で大佐の涙を見て、こう思っていた。

――ああ、そうか、本物の涙なはずだ。これはたぶん、税金の苦しみによる、血の涙なんだ。

「この数奇な人生で、私の学んだことを通じて、多くの若者達が己の人生を見つめなおし、生き方を変える契機になればと、強い願いを込めて書いた本だ！

お前のすべき事は、たった一オツ！あらゆる手段を使ってこの本を宣伝し、より多くの若者たちにこの本を読んでもらうことっ！そして、これからは私の代わりとなって、私の心のメッセージを

世界に広げ、この本を前作をしのぐ、ミリオンセラーへと導くことだっ！」

宣言撤回。こいつ、最悪だ。全人類のゴミだ。一体何があったらここまで人格が終わっちまうんだ。もういい、もう、俺の綺麗な思い出がこれ以上汚れないうちに、ここで終わらせてやるっ……！絶対に、俺が、この手でお前の息の根を止めてやるっ！

純朴な少年はすっかり騙されて、泣きべそをかいて銃を下げてしまった。まずいぞ、もう銃をリゲルに向けちゃいない。俺にこの少年の心を引き止めることはもはや不可能だ。

俺は大量の本に埋もれて動けないし、スタイは「大佐ちゃん、私ぜったい買うっ」なんて涙に咽びながら言っているし。

俺はつくづくとんでもない怪物を敵に回したことを思い知った。自らの窮地を乗り越えて、なおかつ税金の問題を解決しようとしているんだぜ。このオヤジに、底知れぬ恐怖さえ感じていた。

やがて、ようやくと言っていいのか、大勢の憲兵達が執務室になだれ込んできた。

「動くなっ！」

銃を構えていた少年はその場で即座に取り押さえられ、本に埋もれている俺もライフルを突きつけられた。銃を持っていなかったスタイは憲兵達に囲まれて、きよろきよろと辺りを見回していたが、やがて人畜無害だと判断されて、部屋から連れ出された。

「きやーっ、テルシオーっ！」

やれやれ、生まれついた幸運に感謝しろよ。俺の方は、どうやらもう終わりみたいだ。

そのときだった。兵士達のざわめきが一瞬間の間、静まりかえった。兵士達の足の間から廊下を見て、俺は凍りついた。

そこに居たのは、一番ここに居てはならない人物だった。

ロー口。ああ、なんで来たんだ。しかも、顔も隠していないじゃないか。

王女の素顔をさらした彼女は、スカートの前に手を組み、リゲル

大佐の前まで静々と歩き出した。驚いた憲兵たちが、なすすべもなく道をあけてゆく。

驚愕の表情を浮かべていた大佐は、痙攣する筋肉を動かし、懸命に笑顔を取り繕って、こわごわと言った。

「こ、これはこれは。ご機嫌麗しゅうございます、王女様。まさか、このような所においになるとは存じませんでした。……我が憲兵局に、一体何の御用でしょうか？」

ローロはついと顎を引き、目をきつといからせた。そして、今まさにどんな言葉よりも一番、彼女の口から出てはいけない言葉が飛び出してしまった。

「貴方を暗殺しに来ました、リゲル大佐」

ああ、これはまずい。きつとまずいぞ。だって、西軍の王女様が、東軍の憲兵団大佐の暗殺を公言したんだぜ。

いきなり国際問題が勃発しかけたが、憲兵たちはあまりに突拍子もない展開についていけず、ざわついているだけだ。

けれどもドラゴンの目は淀みなく、まっすぐに大佐を見詰めていた。

大佐ははつと頬をたたかれた様に、身を翻し、俺たちをきつとにらみつけた。

「なに？　そうか、こいつらは私の命を奪いにきた者たちだったのですか！　なんと、それは憲兵局の安全管理に関わる、非常に重大かつ深刻な問題であります！　いやあ貴女が居なければどうなっていたことか！　ご協力、まことに感謝いたします！」

大佐の打った小芝居に、憲兵たちもやつぱり聞き間違えたのかと勘違いして、ほつと胸をなでおろす。

だが、国際問題の危機をなんとか救ってくれた当の大佐は、どうやら暗殺される覚えが沢山あるらしい。

だらだらと脂汗をかいてローロと目を合わせないようにしていた。「剣を」ローロはその大佐に詰問した。「英雄の剣を持ち帰ったのは、自分だと。国王陛下の御前で、そうおっしゃいましたね、大佐

？」

大佐は周りの憲兵たちが気になって仕方がない様子で、がたがた震えながらも、口の端を吊り上げて安堵の笑みを浮かべた。

「あ、ああああ、ああ、その件のお話でしたか？　それでしたら、その、それは、アイズマールという不逞の輩を逮捕するための方便でして。仕方のない嘘だったのです。事情はすでに軍を通じて説明しておりまして、先日、国王陛下がご恩赦賜る由を、公式に発表……」

「お黙りなさいっ！」

リゲル大佐や憲兵たちが震え上がって、まるでローロが衝撃波を発生させたように見えた。

すげえ。大柄な大佐が、小柄なドラゴンの目の前では萎縮して見える。今はただの詐欺師だ。

あの目にはイーサファルトの男たちを本能的に屈服させる、『何か』があるんじゃないのか。

「国王陛下がお許しくださったですって？　それで罪が帳消しになったとも思っているのですか？　貴方は一体何を血迷ったことを言っているの、『許すしかなかった』事ぐらい分らないのですか。軍の高官ならば誰でも知っているというのに、大佐ともあろうあなたがご存じないのですか。世界大戦の終結から三十年の節目を迎えた今日、帝国軍が再戦の準備を始めたことが確認されたことを！」

俺達は度肝を抜かれた。それこそ、王女様の暗殺宣言が吹っ飛ぶくらいに。

「こんな状況で、あなたを裁けるはずがないではないですか。再び迫り来る帝国の脅威に対して、さらなる結束が求められている時に！　連合国間で大きな問題を起こさないために、陛下はあえて超法的なご決断をなさったのですよ、この譲歩がイーサファルトと東部の力関係を決定的にするものだというのに！　あなたはそれがどういう意味か分かっていないのですか！」

ローロはさらに一歩前に進み、燃えるような目で訴えかけた。

「貴方が見捨てた故郷イーサファルトはかつて英雄の園と呼ばれ、白竜との契約から数多の英雄を世に輩出してきました。しかし今は市場経済の介入によって衰退の一途をたどっています。」

そんな中あなたは戦争を前にして祖国を捨て、なおかつお体の弱った陛下に追い討ちをかけるような仕打ちをするのですか。そして『許されたから』と言って開き直るのですか。それでも貴方は陛下に忠誠を誓った事のある兵士ですか！ 王宮の石畳を踏んでいた英雄達は、いったいどこに消えてしまったの！」

爆発したローロを目の当たりにして、俺は思った。

どうやら騙されたから気に食わない、なんていうレベルの話じゃなかったみたいだ。こいつは国の在り方みたいなかい物を背負い込んで、裏切り者のこいつと戦いに来たんだ。

俺たち賞金稼ぎにとつての裏切り者であつたりゲル＝シーライトは、同様にお姫様の国にとつてもとんでもない裏切り者だらしい。

まったく、つくづく敵を作る男だ。

こいつも本当はそんなつもりは無かつたんだろう。ただ正論を通して正義を働こうとしても、色んなところでひずみが生まれてしまうものだ。

「申し訳ございません、姫様」

怒り心頭のローロを前にして、大佐は心なしに辛い表情を浮かべていた。あいつは、全く申し開きをしなかった。

「私は、弱くなつてしまいました。かつての勇敢な兵士ではなくなつてしまいました。——それが全てでございます」

嘘だろ。リゲルの口からそんな言葉を聞くなんて、俺は夢にも思つていなかった。

俺の標的は、弱くなつてしまった。

ローロは息を呑むような強い目でリゲルを睨みつけて、そしてもう一つ、何かを言いかけた。けれども、結局、

「分かりました。……私たちの負けです」

そう言つて、硬直する憲兵たちの間を縫つて、そのまま部屋から去つていつてしまった。

こうして俺の影の仕事は幕を閉じた。結果は無残な敗北だ。

俺のドラゴンはそのまま憲兵達に連れられて、どこか俺の手の届かない場所へ行つてしまった。

「立ち上がれ！」

ちっ、相変わらず粗暴な連中だ。腕が痛くなるほど強引に引つ張られ、俺も執務室から連行されていった。

「ちよ、ちよつと。ねえ、俺も？ 俺も逮捕されちゃうの？ リゲル、リゲルうゝっ！」

少年は憲兵に引つ張られながら、リゲルに対して何か訴えかけていた。

一人だけ助かるうなんて考えは甘い。

「大佐！ 大丈夫ですか！」

兵士の一人が大佐に駆け寄つていった。いまさら感が抜けないせいか、大声で無事を確認する姿はどことなく空々しかった。

危機を脱した大佐は銃をくるりとまわして、憲兵に手渡した。

「ふん、大した警備システムじゃないか？」

リゲル大佐がそう皮肉を言ったのが、俺が執務室で最後に見た光景だった。

*

俺と少年はそのまま憲兵団に逮捕された。やれやれ。

ところで、ここからはバクバたちのことになるので、読み飛ばしてくれても一向に構わない。

連中は大佐の罠だった十二時の待ち合わせを信じ、のこのこ埠頭に向かつていた。

巧みな情報網を使い、『リゲル大佐が見境のない女ったらしであ

る』という情報を聞きつけた連中は、埠頭の灯台下に部下数名を女装させて立たせていたそうだ。

獣耳やらメイド服やらボンテージやらを身につけた屈強な男が、香水のにおいの塊みたいになって大佐を待ち構えていたという。鏡が割れそうなほどひどい有様が想像できた。

「ふっ、実に美しい。実にパーフェクトだ。リゲル大佐、来るなら来いっ！」

この審美眼が狂っているとしたか言いようの無い発言の主はバクバクだ。ミッドスフィアのミステリーゾーンになったその一角に、バクバは岸壁から狙撃銃で狙いを定めていた。不幸中の幸いといえば、こいつが女装していなかった事だけだ。

小さなスコープを覗いて、大佐の到来をいまかいまかと待ちわびていた彼は、背後から忍び寄ってくる憲兵達の影に、手錠をかけられる直前までまったく気づいていなかったという。

他の取り巻きたちが畏だと気づいたときには、もう手遅れだった。埠頭の一帯は完全に包囲されていて、逃げ場がない。

連中はその日のうちに全員お縄についたということだった。やれやれ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9843y/>

テルシオ = ヴォン = スタードの標的

2011年12月3日14時51分発行